



2019（令和元）年度 全国私立中学高等学校

全国私学教育研究集会栃木大会

研究集録

人間力(コンピテンシー)を高める私学教育

主催 一般財団法人私学研修福祉会 協力 一般財団法人日本私学教育研究所

実施 関東地区私立中学高等学校協議会／栃木県私立中学高等学校連合会

後援 栃木県／宇都宮市／日本私立中学高等学校連合会

目 次

発刊のことば	1
実施概要	2
大会役員等一覧	3
全体集会	4
開会式	5
栃木県私立学校活動紹介	9
報告	1 0
記念講演	1 4
部 会	1 7
私学経営部会	1 7
教育課程部会	2 9
法人管理事務運営部会	4 5
進路指導部会	5 6
生徒指導部会	7 1
特色教育（ICT）部会	8 3
参加者アンケート	9 6
参加者数	1 0 2
開催地・研究目標一覧	1 0 3
編集後記	1 0 7

発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長 中 川 武 夫

2019（令和元）年度全国私学教育研究集会栃木大会は、令和元年10月17日・18日の2日間、栃木県宇都宮市のホテル東日本宇都宮で開催され、全国から603名の教職員の皆様にご参加頂きました。

本大会は、栃木県、宇都宮市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、関東地区私立中学高等学校協議会、栃木県私立中学高等学校連合会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施致しました。

本大会の直前、令和元年台風第19号によって大きな被害が日本各地にもたらされました。栃木県でも河川が氾濫し、大きな被害がありました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りしております。

本大会が無事開催できましたことは、偏に栃木県の私立中学校・高等学校・中等教育学校の厚いご協力の賜物です。研究目標である「人間力（コンピテンシー）を高める私学教育」に向けて、参加者皆様が考え、取り組むためのヒントを得る場にできたことを確信しています。

初日の開会式では、吉田晋・当研究所理事長と堀井基章・実行委員長による挨拶、さらに公務ご多忙にもかかわらず、福田富一・栃木県知事、佐藤栄一・宇都宮市長にご臨席の上、ご祝辞を賜りました。最後に、松良千廣・新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会会長から次年度の秋田大会のご案内を頂き、開会式を終了致しました。

開会式後の全体会では、栃木県私立学校活動紹介として宇都宮海星女子学院中学高等学校箏曲部の生徒による「箏曲演奏」の披露、日本私立中学高等学校連合会及び当研究所から「教育政策と私学情勢について」をテーマとして、現在進行している教育改革の情勢等の報告を行い、最後に、名古屋外国語大学学長で東京外国語大学名誉教授・前学長の亀山郁夫先生より、「『人生百年時代』を生きる力」と題した記念講演を頂きました。

「人間は常に人間、humanであることの意味を問い続けなければならない。今、人間はデジタルデバイスを用いて小さな神になろうとしているが、これは傲慢だ。先生方は生徒達に謙虚であることが大事なのだと教えてほしい。人生百年時代を生きるにはじっくり、ゆっくり歩んでいかないといけない」と話され、参加者から大変好評でした。

2日目は、私学経営部会、教育課程部会、法人管理事務運営部会、進路指導部会、生徒指導部会及び特色教育（ICT）部会の6つの部会に分かれ、それぞれのテーマのもと、講演、実践・事例・研究発表、パネル・ディスカッション等が行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録にまとめました。各学校の今後の教育活動にお役立て頂ければ幸いです。

最後に、本大会開催にご尽力頂きました講師・発表者の方々、また本大会開催の2年前より企画を進めて頂き、大会当日は司会・記録並びに運営に携わって頂いた運営委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

なお、次年度の秋田大会は、令和2年10月22日・23日の2日間、秋田県秋田市・秋田キャッスルホテルにて、「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」を研究目標に、4部会の開催を予定しております。秋田大会開催に向けて多大なご尽力を頂いております秋田県私立中学高等学校協会の皆様に御礼申し上げますとともに、全国からの多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

実 施 概 要

- 1 研 究 目 標 人間力（コンピテンシー）を高める私学教育
- 2 会 期 令和元年10月17日（木）・18日（金）の2日間
- 3 会 場 ホテル東日本宇都宮
- 4 参 加 人 員 603名（募集600名）
- 5 基 本 日 程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
						45	05	30		50	15
10月17日 （木）				受 付	開 会 式	全 体 会				教 育 懇 談 会	
						※	報 告	記 念 講 演			
10月18日 （金）	部 会			昼 食	部 会			開 会 式	※は栃木県私立学校 活動紹介		

6 全 体 会

栃木県私立学校活動紹介 「箏曲演奏」 宇都宮海星女子学院中学高等学校 箏曲部

報 告 「教育政策と私学情勢について」

日 本 私 立 中 学 高 等 学 校 連 合 会 会 長 吉 田 晋
一 般 財 団 法 人 日 本 私 学 教 育 研 究 所 所 長 中 川 武 夫

記念講演 「『人生百年時代』を生きる力」

名古屋外国語大学 学長／東京外国語大学名誉教授・前学長 亀 山 郁 夫

7 部 会

- 1 私 学 経 営 部 会 新しい時代に求められる学校マネジメント
～多様化する教育と私学の独自性～
- 2 教 育 課 程 部 会 未来社会を切り拓く私学教育の実践
- 3 法 人 管 理 事 務 運 営 部 会 私学から発信する働き方改革
- 4 進 路 指 導 部 会 主体的・協働的学習からの人間力育成を目指す進路指導
- 5 生 徒 指 導 部 会 学校を取り巻く関係機関との連携による生徒指導
- 6 特 色 教 育 （ I C T ） 部 会 コンピテンシーを高めるICT教育
～AI時代に対応した人材の育成を目指して～

大会役員等一覧

1. 大会役員（順不同）

吉 田 晋	一般財団法人日本私学教育研究所	理事長
富 士 見 丘 中 学 高 等 学 校	理事長・校長	
平 方 邦 行	一般財団法人日本私学教育研究所	副理事長
工 学 院 大 学 附 属 中 学 高 等 学 校	校長	
山 中 幸 平	一般財団法人日本私学教育研究所	副理事長
学 校 法 人 山 中 学 園	理事長	
中 川 武 夫	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・所長
蒲 田 女 子 高 等 学 校	顧問	
長 塚 篤 夫	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会総括責任者
順 天 中 学 高 等 学 校	校長	
鈴 木 康 之	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会副総括責任者
水 戸 女 子 高 等 学 校	理事長・校長	

2. 実行委員・指導員（順不同）

委員長 堀 井 基 章	関東地区私立中学高等学校協議会	会長
学 校 法 人 堀 井 学 園	理事長	
副委員長 船 田 元	栃木県私立中学高等学校連合会	会長
作 新 学 院 中 等 部 ・ 高 等 学 校	学院長・校長	
委員 鈴 木 康 之	茨 城 県 私 学 協 会	会長
一 般 財 団 法 人 日 本 私 学 教 育 研 究 所	理事・全国集会副総括責任者	
水 戸 女 子 高 等 学 校	理事長・校長	
野 口 秀 樹	群馬県私立小・中・高等学校協会	会長
樹 徳 中 学 高 等 学 校	理事長・校長	
小 川 義 男	(一社)埼玉県私立中学高等学校協会	会長
狭 山 ケ 丘 高 等 学 校 付 属 中 学 校 ・ 狭 山 ケ 丘 高 等 学 校	校長	
佐久間 勝 彦	(一社)千葉県私立中学高等学校協会	会長
千 葉 経 済 大 学 附 属 高 等 学 校	理事長・校長	
工 藤 誠 一	(一財)神奈川県私立中学高等学校協会	理事長
聖 光 学 院 中 学 高 等 学 校	理事長・校長	
須 賀 英 之	栃木県私立中学高等学校連合会	副会長
宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 中 学 高 等 学 校	理事長・校長	
中 川 武 夫	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・所長
蒲 田 女 子 高 等 学 校	顧問	
長 塚 篤 夫	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会総括責任者
順 天 中 学 高 等 学 校	校長	

3. 運営総括委員・指導員（順不同）

委員長 須 賀 英 之	宇都宮短期大学附属中学高等学校	理事長・校長
副委員長 永 井 治 寿	青 藍 泰 斗 高 等 学 校	理事長・校長
委員 青 木 一 男	國學院大學栃木中学高等学校	校長
五 味 田 謙 一	矢 板 中 央 高 等 学 校	校長
上 野 一 典	宇 都 宮 文 星 女 子 高 等 学 校	校長
岡 部 宣 男	白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校	校長
菅 井 康 政	足 利 大 学 附 属 高 等 学 校	校長
渡 邊 明 男	佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校	校長

全 体 集 会

- 1 日 時 2019（令和元）年 10 月 17 日(木) 13 時 00 分～17 時 00 分
- 2 会 場 ホテル東日本宇都宮 3 階 大和
- 3 開 会 式
 - (1) 開会のことば
 - (2) 主催者挨拶
一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋
 - (3) 実行委員長挨拶
関東地区私立中学高等学校協議会 会長 堀 井 基 章
 - (4) 来賓祝辞
栃木県知事 福 田 富 一 様
宇都宮市長 佐 藤 栄 一 様
 - (5) 次期開催地区代表挨拶
新潟県・東北 6 県私立中学高等学校協会協議会 会長 松 良 千 廣
 - (6) 閉式のことば
- 4 全 体 会

栃木県私立学校活動紹介 「箏曲演奏」
宇都宮海星女子学院中学高等学校 箏曲部

報 告「教育政策と私学情勢について」
日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋
一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中 川 武 夫

記念講演 「『人生百年時代』を生きる力」
名古屋外国語大学学長／東京外国語大学名誉教授・前学長 亀 山 郁 夫
- 5 全体集会運営委員・指導員（順不同）

委員長
永 井 治 寿 青藍泰斗高等学校 理事長・校長

副委員長
佐々木 秀 治 宇都宮海星女子学院中学高等学校 校長

委員
石 塚 千 恵 宇都宮海星女子学院中学高等学校 教頭
池 澤 敏 英 青藍泰斗高等学校 教頭
嶋 原 佳 奈 宇都宮海星女子学院中学高等学校 教諭
高 野 友 喜 宇都宮海星女子学院中学高等学校 教諭
小久保 貴 子 宇都宮海星女子学院中学高等学校 教諭
鈴 木 友 青藍泰斗高等学校 教諭
村 井 惇 哉 青藍泰斗高等学校 教諭
大 畠 秀 子 作新学院中等部・高等学校 養護教諭

全体集会 開 会 式

須賀英之・全国私学教育研究集会栃木大会運営総括委員長からの開会のことばで大会が開始され、吉田晋・一般財団法人日本私学教育研究所理事長の主催者挨拶、次に堀井基章・関東地区私立中学高等学校協議会会長の実行委員長挨拶が行われた後、公務ご多忙のところ、ご臨席頂いた、栃木県知事の福田富一様と、宇都宮市長の佐藤栄一様にそれぞれ祝辞を頂いた。

引き続き、大会役員、大会実行委員の先生方の紹介が行われ、最後に次年度開催予定の秋田大会の案内を兼ねて、松良千廣・新潟県・東北6県立中学高等学校協会協議会会長から挨拶を頂き、永井治寿・副運営総括委員長の閉式のことばで開会式が終了した。

主催者挨拶

一般財団法人日本私学教育研究所 理事長



吉 田 晋

今回の台風19号により、栃木県を含め、各地で多大な災害を被り、亡くなった方には哀悼の意を表したいと思います。

日本の教育は今、まさに変わろうとしています。グローバル化社会がやってきました。最近、勇気づけられたことの1つにラグビーのワールドカップがあります。私はあの中に日本の未来・将来があると感じました。それは、まさにダイバーシティです。チーム31名のう

ち15名が外国人。もちろん日本国籍を持っている選手もいます。その中で共通語を日本語として、そして「君が代」の意味まで全部勉強して、みんなが大きい声で「君が代」を歌って、日本のチームのために、チームジャパンのために頑張りました。その試合の中のことで、レフェリーは、すべて英語で話します。つまりラグビーは英語ができなければ、試合ができないということになります。日本の国に置き換えれば、世界の80%をカバーできると言われている英語の4技能を、子ども達にしっかりと身につけてもらうことが、これからのグローバル社会では不可欠となります。そのために2020年度に向けて、大学入試改革を行っているわけです。それが今、遅れてきています。その点については後ほど報告致しますが、やはり日本が変わるためには、まさに今大会のテーマの「人間力（コンピテンシー）を高める私学教育」です。それを是非、皆さんにご協力頂き、成し遂げることが、私立学校だと思います。

今大会は関東地区が担当で開催致しますが、栃木大会実行委員長の堀井基章・関東地区私立中学高等学校協議会会長、副実行委員長の船田元・栃木県私立中学高等学校連合会会長、そして、須賀英之・運営総括委員長をはじめ、栃木県の運営総括委員と運営委員の先生方には2年半にわたり、ご準備を頂きました。本大会終了後、皆さんに「良い大会だった」と言って頂けることと存じます。是非本大会を有意義に使って頂くようお願い致します。

実行委員長挨拶

関東地区私立中学高等学校協議会



会長 堀 井 基 章

2年半くらい前に、一般財団法人日本私学教育研究所から2019年度の全国私学教育研究集会を関東地区にて開催して欲しいとの依頼を受け、関東地区

は6県ございますが、栃木県でお引き受け頂くことになり、準備が始まったわけです。

本大会の研究目標は「人間力（コンピテンシー）を高める私学教育」です。私も私学教育に50年くらい携わっていますが、今の時代は非常に大きく変化をしており、加えて、人間力を育てる教育力がなければ、私学はやっていけないということを各学校は感じなければいけません。

本大会は、そのテーマの下に、全体集会と6つの部会を設置して頂きました。それぞれの部会ではその内容を深めて、各学校にお持ち帰り頂き、私学は素晴らしい教育をしているということを全国に知らしめて頂くことがこれからの私学の生きる道になると思います。今日と明日の2日間ですが、皆様方と一緒に研修をしていきたいと考えています。よろしくお願いします。

来賓祝辞

栃木県知事 福 田 富 一

全国各地から全国私学教育研究集会栃木大会に大勢の方々にお集まり頂き、心から歓迎申し上げます。また、吉田晋・日本私学教育研究所理事長をはじめ、本日お越し頂いた先



生方よりお見舞いを頂きました。心から感謝を申し上げます。

中学校2校、高等学校が4校の計6校が本日も休校となっています。1日も早く、子ども達が勉強・部活動に励める環境を作るために、しっかり災害の対応に取り組んで参ります。

さて、人口減少、情報社会など様々な課題があります。その中の変革の時代において、建学の精神に基づき、個性豊かな教育を実践し、多様な人材を育成している私立学校の重要性はますます大きくなってまいります。栃木県におきましても、子ども達が安心して学ぶことができ、あるいは、親御さんにとっても安心して子育てできる環境作りに取り組んで参ります。私立学校の振興につきまして、支援をして参りたいと考えております。教育内容の更なる充実とより魅力ある学校作りに、皆様方には取り組んで頂きますようよろしくお願い致します。

本大会の目標であります「人間力（コンピテンシー）を高める私学教育」は来年度からスタート致します新学習指導要領が目指している、子ども達の「生きる力」を育むことにも通じるものであります。時代の要請に応え、人材の育成に尽力されている皆様方の熱意によりまして、2日間の研修内容が意義深く、充実したものとなるようご期待を申し上げます。

栃木県の旬は、今、「にっこり」という県が開発しました梨が出始めました。梨としては「幸水」、「豊水」から始まって、一番最後が栃木県の「にっこり」で、大玉で、常温で来年2月頃までは食べられる、保存が利く梨です。千葉、茨城、栃木の順で梨の生産量が全国3位です。県が開発しました「日光」に「梨」を平仮名で「にっこり」です。もう1つは令和米です。私が勝手に「令和米」と名付けてしまいましたが、11月に行われます大嘗祭に悠紀（ゆき）地方は栃木県、主基（すき）地方は

京都府が各々お米を納める県に選ばれました。抜穂、つまり稲刈りが終わり、先日、皇居にお納めをする儀式も終了したところです。銘柄は栃木県が開発した「とちぎのほし」です。これは大粒で収量が多く、粘り気が若干少ないものですから、カレーライスや丼物に向くとされておりまして、食味ランキングは特 A です。お土産の 1 つに考えて頂ければと思います。

本大会が実りの多い成果を上げられますと共に、ご臨席の皆様方には、より一層のご活躍をお祈り申し上げます。

来賓祝辞

宇都宮市長 佐藤 栄一

この度、全国私学教育研究集会栃木大会がここ、宇都宮市で盛大に開催されますことに、お祝い申し上げますと共に、全国各地からお越し頂きました皆様方に、52 万人の市民を代表しまして、心から歓迎申し上げます。また、吉田晋・日本私学教育研究所理事長をはじめ、皆様方にはお見舞いの言葉も頂きました。大変ご心配をお掛けすると共に、こうして、今日この大会が無事に開催されますことを、準備・運営に携わった先生方のご苦勞に改めて心から敬意を表する次第でございます。

本日お集まりの皆様方におかれましては、日頃より将来を担う子ども達のため、建学の精神に基づき、それぞれの学校で特色を活かしながら、教育活動を展開して頂いていることに深く敬意を表する次第でございます。

我が国を取り巻く教育環境は本格的な人口減少、また少子・高齢化、グローバル化、人工知能等の

技術進展等、社会情勢が大きく変化する中で、時代の潮流を的確に捉えながら、これからの社会を生き抜くための人づくりが求められております。本市におきましては、まちづくりの原動力となります、高い人間力を備えた人づくりを重要課題として捉え、本市の人づくりの指針となります「宮っこ未来ビジョン」を平成 17 年度に策定致しまして、心豊かでたくましく生きる人づくりに取り組んでいるところでございます。このような中、全国の私学教育関係者の皆様方が人間力を研究目標とした大会を、ここ宇都宮市で開催されますことは大変意義深く、そして心強く感じているところでございます。本大会の成果が私学教育のより一層の発展につながることを期待しております。

宇都宮市でございますが、簡単に紹介させていただきますと思います。栃木県のほぼ中央に位置し、古い歴史と豊かな自然環境に恵まれていると共に、交通の要所として、東北自動車道、北関東自動車道、また新幹線、東武線といった交通に支えられてこられた、そして、古くから栄えてきた北関東最大の都市であり、日本有数の工業団地を有する等、大いに発展してきたまちでございます。観光面でありまして、全国的な知名度を誇る餃子に加えまして、カクテル、ジャズ、そして昨年度日本遺産に登録されました大谷石文化等、本市が自信を持ってお進めできる地域ブランドが数多くございます。餃子でございますが、第 14 師団が大東亜戦争の時に中国大陸に行って、宇都宮に戻ってきたときに、中国で食べた、茹で餃子、蒸し餃子が懐かしいということで、宇都宮風にアレンジして、焼き餃子として食べ始め、それが商売となった。それが原点でございます。今ではたくさんの餃子の店が宇都宮に集まっております。今週末、10 月 19 日、20 日に開催されますアジア最高峰の国際自転車レース、ジャパンカップサイクルロードレースを始め、来月 11

月2日、3日には、来年、東京オリンピックで正式種目となります、3人制バスケットボールの世界大会である「3×3（スリー・エックス・スリー）」ワールドツアー宇都宮ファイナルが開催される等、国際的なスポーツ大会も開催されまして、県内外の皆様には本市の魅力を感じて頂いているものと思います。大会の参加後には是非、宇都宮市の魅力を堪能頂きますと共に、宇都宮市へ再訪頂ければ有り難く思います。

最後に大会の成功とご参加の皆様方のご健勝を心から祈念致しましてお祝いの言葉と致します。

次期開催地区代表挨拶

新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会

会長 松 良 千 廣

次年度開催県が秋田県と言うことですが、実は秋田県は私立の高等学校が5校、私立学校教職員退職金財団加盟校は4校、私立中学校0校という県でございます。秋田県に



「開催しますか」と伺ったところ、「開催します」と力強い返事が返ってきましたので、お願いする

ことに致しました。

「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」を研究目標とし、令和2年10月22・23日の2日間、秋田県秋田市の秋田キャッスルホテルにて開催致します。初日の全体集会では公立大学法人国際教養大学の鈴木典比古・理事長に「2500年を超えるリベラルアーツ教育～『個』の確立と私学の使命～」を演題とした記念講演、2日目は私学経営、教育課程、特色教育、グローバル教育の4部会で、講演、パネル・ディスカッション、実践発表等を行う予定です。

全国の皆様からすると、秋田県はなかなか行く機会が少ないかと思いますが、盛岡から先はミニ新幹線ということで、在来線のレールの上を走りますので、踏切付きの新幹線、そして大曲駅ではスイッチバックをするという体験ができます。餃子の代わりには、「きりたんぽ」という鍋料理がございまして、食糧自給率が日本全国平均で38%と言われる中で、東北地方の平均は約100%ということで、地産地消の美味しいものを召し上がり頂けると幸いです。いろいろなものを楽しみながら参加頂ければ幸いです。



全体会 栃木県私立学校活動紹介

「箏曲演奏」

宇都宮海星女子学院中学校高等学校 箏曲部



宇都宮海星女子学院中学校高等学校・箏曲部

部長 藤田 菜美子 さん

本校は北関東唯一のカトリックミッションスクールであり、カトリックの価値観・人間観を基本理念とし、「真理と愛に生きる」を校訓としています。

箏曲部は平成29年度に栃木県文化功労章を受章された箏曲演奏家の和久文子先生を講師に招き、先生の熱心な

ご指導の下、日々練習に励んでいます。高校生は全国高等学校総合文化祭日本音楽部門へ11回出場し、文化庁長官賞を3回受賞しています。中学生は広島県で開催される全国小中学生箏曲コンクールに平成21年度から10年連続出場し、5回金賞を受賞しています。

最初に演奏する曲は箏曲家・沢井忠夫先生作曲の「独奏十七絃と箏群のための焰」。普段は低音域を担当する十七絃にも光を当て、箏群と十七絃が互いに響き合い、高め合う曲としてつくられました。掛け合いで炎の揺らぎを再現し、私たちの青春の炎をこの演奏に表現したいと思います。

— 演 奏 —

今回演奏している箏は2種類あり、絃が13本の「十三絃箏」と絃が17本の「十七絃箏」です。箏というと一般的には、「十三絃箏」を指します。「十七絃箏」は「春の海」の作曲で知られる宮城道雄先生によって開発された低音用の箏です。どちらの箏も絃の下に柱を立てて動かすことで様々な音階を調絃し、音を表現します。次に演奏する曲は「千本桜」です。箏の様々な奏法を活用し、演奏したいと思います。

— 演 奏 —

全体集会 報告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋
一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中 川 武 夫



日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋

2019年度の私立高等学校の生徒数は103万1,000名で、前年度比1万5,000名減少した。私立中学生は24万2,000名で、1,000名増加した。都道府県によるバラツキが大きい。減少した高校生は通信制に流れている。高等学校は男子校が6.8%、女子校が20.5%、共学校が72.4%。中学校は男子校10%で、なんとか男女別学が残っている。

財源計画の生徒等1人あたり額、いわゆる「標準単価」は私立高等学校の場合、国庫補助が5万5,611円、地方交付税措置が28万円で、合計は33万6,311円。高等学校以下の私学助成は都道府県の所管で、学校の役割の大きさ、財政状況、知事・地方自治体の私学理解などに違いがあり、助成水準に影響している。

教育環境の整備にかかる事項は私学教育の充実に影響を及ぼさないよう、国は影響力を強めてほしい。私たちが一生懸命努力して獲得してきた地方交付税を蔑ろにして、他の事業に使っている県もある。

文部科学省の令和2年度の概算要求では私立高等学校等経常費助成費等補助が1,043億円、私立学校施設・設備の整備の推進が506億円、特に私立高等学校ICT教育設備整備費として54億円が計上された。

私学助成関係予算の中でも耐震化等の促進は275億円で、耐震化完了100%に近づけたいが、財政的に厳しい学校もある。補助率を上げてもらうことが100%への近道である。

就学支援金が増えており、保護者の負担が軽くなった。ただ、学校は経常費の補助金と学納金の合算で運営される。足りなければ公立は自治体が出すが、私立は保護者に負担してもらうしかない。これでは公私の格差が広がっていく。

「高大接続改革」の現状

受験生の「学力の3要素」について、多面的・総合的に評価する入試に転換、令和2年度から記述式問題が導入されることになった。英語は「読み」「聞く」のみから「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能が評価対象になり、民間の英語資格・検定試験を活用することになった。これが今、大きな問題に発展している。

令和2年度から入試が変わる予定だったが、英語4技能の問題でどうなるか分からなくなった。「4技能評価へ転換する」と、はっきり言明した以上、4技能で押し通さなければいけない。

令和6年度までは2技能を残し、4技能を併用する。資格試験として受験し、それを使っても良いことにしていたら、大ごとにならなかったかもしれない。

休み時間や給食を外部のボランティアに任せる動きも

次に「教育改革の現状」である。「学習指導要領」が改訂される。高等学校の学習指導要領も現在は移行期間で、令和4年度から完全に変わる。英語は現行でも高等学校卒業時には英検準2級以上50%、

中学校卒業時に英検 3 級以上 50%が教育課程の目標となっている。

ところが、実際には高校 3 年生で英検準 2 級以上取得している生徒は公立の場合は全国で約 20%しかない。目標を達成できていないのに今年も準 2 級以上が 50%以上となった。もう少し議論が必要ではないか。

学習指導要領を改訂する際、「米国の SAT（大学進学適性試験）を参考にせよ」「考え方・思考力・判断力・表現力を、しっかりと判定できる試験にすべきだ」と、いろいろな理想が語られた。ところが、できあがったのを見ると、ほとんど変わっていない。

平成 31 年 1 月、「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」の答申が公表され、同年 4 月、「新しい時代の初等中等教育の在り方について」が諮問された。

前者の第 1 章には次のように書かれている。

「経済協力開発機構（OECD）が 2000 年から 3 年に一度実施している PISA 調査においては、数学的リテラシーや科学的リテラシーは OECD 加盟国中 1 位（PISA2015）であるなど我が国の 15 歳段階の子供たちは世界トップ水準の学習成果を示している」

「全国学力・学習状況調査においても、成績下位の都道府県の平均正答率は確実に上昇し、都道府県単位の成績の格差が縮小するなど『底上げ』も確実に進んでいる」

Society5.0 が登場した。Society5.0 に合った個別最適化の学習案をつくらなければいけない。普通科の在り方の見直しを含め、令和にふさわしい学校に生まれ変わることが希求されている。

今さら普通科という言葉がいけない理由がわからない。教育には個別に最適化された学びを実現するため、多様な学習の機会と場の提供が求められる。個別最適化された学びの資質や能力、意欲・希望に沿った教育を適時・適切に提供するだけでは、一歩間違えると広域通信制教育になってしまう。

広域通信制は一部を除いて社会性の涵養を重視しているとは思えないことがある。それは個別最適化ではない。私たちは社会性をしっかり身につけさせ、大学・社会に送り出している。

「働き方改革」に関しては私立学校の教師は頑張っている。ただ、「働き方改革」の名で休み時間や給食を外部のボランティアに任せようとする動きも出てきた。

私学には建学の精神に基づいた自分たちの教育がある。教育課程は決まっているが、その範囲で少しでも子ども一人ひとりに合った教育をしていきたい。



一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中川武夫 創立者の理想や思い、建学の精神の血肉化を目指して教育を実践

私立学校をバスに例えると、ハンドルを握るのは校長先生である。創立者の理想や思い、いわゆる建学の精神の血肉化を目指して教育を行っている。私立学校の創立者は理想の教育を求めて私財を投げうち、人生を賭して学校をつくった。どんなに時代が変わろうと、校長は、そこを目指してバスを進めていく義務を負っている。

バスには子どもたちも教職員も乗っている。子どもたちは、お客様だが、教職員はバスの乗務員である。乗務員がバスの行き先を知らないのは大きな問題である。ハンドルを握る校長先生と教職員は、どのルートを通して目的地を目指しているのか、常に対話し、情報交換していかなければいけない。

保護者や子どもたちは卒業後の進路、いわゆる「結果」に重点を置いて学校を選択している。どんな

に壮大な教育論を唱えても結果を出せない学校は誰も選ばないし、学校選択の際、建学の精神を吟味するケースは少ない。

確かに結果は大事だが、創立者の教えが自分の人生にとって、どんな意味を持つのか、子どもたちにも十分に考えてもらいたい。人生を支える座右の銘になるかもしれない。結果と建学の精神のバランスが取れたとき、はじめて私立学校といえる。当研究所の研修会、特に全国初任者研修では建学の精神の重要性を学んでもらっている。今後も続けていきたい。

「主体的・対話的で深い学び」は大きな課題である。学びの深さを、どのようにして判定すればいいのか。テストだけではわからないし、教員の主観で判断するわけにもいかない。パフォーマンス評価やeポートフォリオを駆使して、学びの深さを判定することが求められている。高大接続にも活用することになった。

子どもたちの学びをデジタル調査書に載せ、各大学に送る「JAPAN e-Portfolio」。ただ評定を送るのではなく、子どもたちの学びの状況を加味する。現実問題として高等学校の教員に大きな負担がかかる。一生懸命書いたとしても、受け取る側の大学が読むかどうかはわからない。細かいことは今後決まるが、私たちのスタンスとしては、できるだけ適切に簡潔に取り組むことだ。労力をかければ良いわけではない。

グローバル化への対応で、子どもたちにランゲージアーツ（言語技術）をしっかりと施さなければならない。自然に力が身につくわけではないといわれている。企業でも某航空会社のパイロットが各国の管制官と、また、某サッカー球団の選手が多国籍の選手とコミュニケーションをとるためにランゲージアーツの訓練を受けている。学校でも宮城県の聖ウルスラ学院英智小中学校や神奈川県森村学園などが取り組んでいる。今後、研修会などで積極的に取り上げていきたい。

学校という集団の中で、切磋琢磨することで子どもたちは成長

人工知能（AI）にはプラス面とマイナス面がある。学校現場では一人ひとりの子どもに合わせて課題・教材を提供し、指導する場面が増えてきた。AIが補助をすれば、子どもたちに細かく対応できる。たとえばAIで本人より学力的に少し進んだライバル役をつくり、学びの興味を深めたり、歴史の授業で武士のキャラクターが登場してナビゲートしたりすれば、楽しく面白いし、理解力も深まる。

ただし、この延長線上にはネット上で教育が完結してしまう懸念もある。施設型学校教育の崩壊も囁かれている。それを反映するように広域通信制の学校が台頭してきた。その一部の運営者はビジネスとして力を入れていることも多い。いじめなどが原因で不登校になった子どもや、なんらかの事情がある子どもにとっては有益な存在だが、勝手気ままに生活したいからという理由で広域通信制を選んだ子どもも少なくない。

私たちは学校という集団の中で、切磋琢磨させることで子どもたちを育てている。施設型学校でなければできない教育が厳然と存在する。ただ、時間も場所も自由に選べる学びを対極に置くのではなく、お互いの良いところを融合させるような努力が私立学校にとっては欠かせない。

最後に著作権の問題についてふれておきたい。著作権法第35条を中心に学校の授業の教材として使うのであれば、著作権は発生しない。あるいは入学試験に使うのであれば、フリーである。ところが、これを拡大解釈して「学校だから何に使ってもいい」と考えている学校もあるようだ。例えば、入試問題を次年度以降に過去問題として受験生に配布すると2次利用にあたり、著作権料も発生する。

従来、国語科の文学作品が主流だったが、昨今は数学、社会、理科などでも著作権の問題が発生するようになった。写真、グラフ、図表など、デジタル教材が発達すれば、問題が頻発することになりかねない。

許諾請求しないで無断で使った場合、裁判でも起こされれば大きなダメージを受ける。許諾請求するしかないが、学校が許可をとろうとしたら時間と手間がかかる。著作権者に行きつけないケースも多い。そこで、平成 16 年 5 月、「著作権利用に関わる教育 NPO」という団体が発足、2 次利用についての許諾請求を代行する活動を行っている。加盟校は 541 校であり、2019 年度だけでも現時点で 3,433 件の許諾請求を行っている。

日本文芸家協会や新聞社、さまざまな団体と提携している。学校が許諾請求する場合、著作権料なしで許可をもらうことができる。費用がかかったとしても 1 件あたり 1,000～2,000 円にとどまる。各学校でもご検討頂き、加入して頂ければありがたい。

全体集会 記念講演

「『人生百年時代』を生きる力」

名古屋外国語大学学長／東京外国語大学名誉教授・前学長 亀山郁夫

2022 年にドストエフスキーの五大長編の翻訳が完成

私は 50 代に入ってから、ロシアを代表するドストエフスキーという作家の翻訳と研究に携わってきた。ドストエフスキーには五大長編と呼ばれる長編小説があり、そのうちの 4 作を翻訳出版した。5 作目が『未成年』で、400 字詰め原稿用紙にして約 2,500 枚のものだ。ようやく 400 枚まで進んだ。2022 年までに完了させたいと思っている。



その次に取り組みたいのが『カラマーゾフの兄弟』の改訳である。2006～2007 年、私が翻訳した『カラマーゾフの兄弟』が出版され、その後 2 年間で 110 万部ほど売れた。ものすごいバッシングがあり、誤訳を指摘する記事がウェブ上に載った。批判で私もノイローゼになり、体重も激減した。

なおかつ『週刊新潮』に取り上げられ、激しくたたかれた。私自身は信念を持って翻訳に取り組んだ。最終段階では原文を見ずに、作家が意図した絵をどう伝えるかに苦慮しながら、ある意味では超越的な視点から翻訳した。ただ、いろいろな側面を持った作品だけに、別の視点からアプローチすることも可能で、もう一度、翻訳に挑戦したいと考えるようになった。

2007 年 7 月、『カラマーゾフの兄弟』第 5 巻が出版され、全 5 巻が完成。直後に選挙で東京外国語大学の学長に選ばれ、9 月から任期がスタートした。それとは別に翻訳に対して激しい批判があったことをきっかけに、「日本ドストエフスキー協会」を立ち上げた。

現時点で会員数は約 350 名、ドストエフスキー生誕 200 年の 2021 年には 500 人まで会員を増やしたい。2022 年には国際ドストエフスキー学会が名古屋外国語大学で開かれる予定で、そのときには 1,000 人を集めようと考えている。

2019 年 7 月、私は米国ボストンで開催された国際ドストエフスキー学会に参加した。3 年に一度、世界中のドストエフスキー研究者が集まる大きなイベントだ。ドストエフスキー生誕 200 年を控え、ロシアの内外で、その準備が進んでいる。国際ドストエフスキー学会も、どこことなくプレイベント的な趣があり、折にふれ 3 年後のことが話題にのぼった。

70 歳になる学会のザハーロフ会長は私が最も尊敬しているドストエフスキー学者で、1 週間に及んだ研究集会の締めくくりにデジタルドストエフスキー学の未来について語った。

会期中に開かれた総会で、次回の 2022 年の開催地は名古屋に決まった。ある老研究者が「これで 3 年間の生きがいが見つかった」と声をかけてくれた。そんな祝福がうれしかった。彼らが日本に来たとき、日本人のドストエフスキー愛の強さに目を見張るだろう。

情報テクノロジーの発達で地球と脳のレベルで劇的な変化が

2019 年 9 月の『朝日新聞』に『ホモ・デウス』などの著書で知られるユヴァル・ノア・ハラリ氏のイ

ンタビューが掲載された。その中に次のような一節があった。

「(AI とロボットによる) 新たな監視技術の進歩で、歴史上存在したことのない全体主義的な政府の誕生につながるでしょう」

「20 世紀のスターリンやヒトラーなどの全体主義体制よりもずっとひどい独裁政府が誕生する恐れがあります」

AI とバイオテクノロジーの力で、ごく一握りのエリート層が大半の人類をユースレスクラス（無用者階級）として支配するかもしれないという警告だった。この記事を読んだ新井紀子さんという数学者、AI の研究者が次のように語った。

もし、1989 年にベルリンの壁が崩壊せず、1991 年にソ連が踏みとどまり、今日の AI 時代を迎えていたなら、どうなっていたらうか。ソ連崩壊によって、すべてが壊れてしまったのだが、当時のソ連は AI とデータサイエンスにおいては最先端の国だった。1991 年の国家崩壊がロシア人にとって致命的だった。ロシア人は国家が崩壊してしまい、完全にグローバリズムに乗り遅れた。

新井さんは次のような結論を出した。ひとつは AI 技術が目指していること、つまりあらゆるデータを収集することで未来を予測するという誘惑の行き着く先が全体主義・計画経済に驚くほど似ているということだ。もうひとつは、幸せといった質に関わることを数字という量に換算できると考えることの危険性である。

かつて蓮實重彦元東京大学総長は入学式の式辞で、学問研究の質の評価を数で行うのは哲学的な誤りであると批判した。質を数学に置き換え、数字・数学を用いて分析しなければ近代科学にはならない。近代科学によりテクノロジーは発展したし、社会の矛盾は可視化された。確かに数値化と数学には効用がある。だが、それは手段でしかない。手段を目的化したとき、私たちは再び軍靴の足音を聞くことになるという予言をしている。

これに、どのようにして抵抗していくか。「人生 100 年時代」の我々は、どのようにそれを客観視しながら、その状況に応じつつ生きていくのが大事である。

この状態を実はドストエフスキーは五大長編で、かなり予言的に語っている。『罪と罰』には「全ての人間は凡人と非凡人に区別される」とある。多数派・多数者と少数派・少数者と言い換えてもいいかもしれない。いわゆる権力を持った人間の恐ろしさを指摘しているのだ。

『悪霊』にも、こんなことが書いている。

「問題の最終的な解決策として、人類を二つの不均衡な部分に分割することだ。その十分の一が他の残り十分の九に対する無制限の権利を獲得する。他の十分の九は人格を失って、いわば家畜の群れのようなものとなり、絶対的な服従と何回かの反抗を経た後、原始的な天真爛漫さに到達する」(趣意)

この原始的な天真爛漫とは何を意味しているのか。例えば携帯をずっといじって、携帯のみでコミュニケーションをしている人たちが人生 100 年を生きたときの最終段階として、どこに至るかという恐らく原始的な天真爛漫さだ。ドストエフスキーの怪奇な予言が現実化する。果たしてそれで良いのかという問題である。

もちろん、AI とインターネットは利便性ももたらす。高度に情報テクノロジーが発達した近未来を内閣府は「Society5.0」と表現している。Society5.0 はサイバー空間（仮想空間）と現実の空間を融合させることで、経済発展と社会的課題の解決を実現する社会とされている。

情報テクノロジーの発達で地球と脳のレベルで劇的な変化が起こっている。人間が人間ではなく、ポストヒューマンになろうとしている。ポストヒューマンの最も初期の段階はスマートフォンだ。私も授

業ではスマートフォンの使用を随時積極的に行っている。スマートフォンには画像投稿ソフトや「ウィキペディア」など、いろいろな情報メディアが装備されており、便利この上ない。人類の能力を2倍に拡大するかもしれないという予感を抱かせてくれる。

しかし、人間は常に自分が人間であるということ、つまりヒューマンであることの意味を問い続けなければならない。ヒューマンはラテン語の「フームス」(humus)に由来する。「フームス」とは「土」を意味し、なぜか人間に対して土という言葉が与えられた。大地に足をつけてこそ人間であるということだ。

ところが、人間がスマートフォンやAIを介することで、小さな神になろうとしている。そこに真の恐ろしさがある。今後、教師は、「人間は謙虚であることが大事だ」ということを児童・生徒・学生に徹底的に教えてほしい。

批判的な思考力を持たないとウソやフェイクを見抜けない

右脳人間と左脳人間という分け方が脳科学的に正しいのかどうか分からないが、私は完全なる感覚・感情優先の右脳人間である。論理的な能力を司る左脳は相当劣っている。だからといって、コンプレックスを持っているわけではない。右脳の記憶容量は左脳に比べると、すさまじく大きい。右脳で記憶することも可能で、イメージや音楽、音による経験が有効だ。

折口信夫氏は人間の思考能力を別化性能と類化性能に分けて考えた。今日でいう左脳と右脳にあたる。別化性能は、ものごとの違いを明らかにしていく能力で、類化性能は、ものごとの類似性を発見していく能力。AとBとの関係性・つながりを発見するのはインスピレーションの力であり、詩人の力である。

言い換えれば類化性能は古代人の脳で、別化性能は近代人の脳だ。別化性能の右脳が類化性能の左脳を、いかにコントロールするか。あるいは類化性能の左脳が別化性能の右脳を、いかに楽しさへ方向づけていくか。そこに人間の知性の真の創造的な発展がある。

私が名古屋外国語大学に着任した際、批判的思考と共感力を訴えた。人の心の中に入る力、人の心を知る力が人間にとって一番大事だが、共感力は危険な側面もある。なぜなら、現在はポストトゥルース時代で、フェイクニュースが溢れているからだ。共感力が強い人間はウソに騙されやすい。同時に批判的な思考力を、しっかりと持たないとウソやフェイクを見抜けない。

冒頭に『カラマゾフの兄弟』出版後、すさまじい批判にさらされたとお伝えした。ロシアに行った際、ドストエフスキー研究者に「ものすごい批判を浴びている」と話したら、彼はドストエフスキーの言葉を引用して励ましてくれた。「もしも君が目的地に向かって歩み出したとすると、途中で足を止めて自分に吠えかかる犬の一匹一匹に石を投げつけていたら、とても目的地にはたどり着けない」と。

ドストエフスキーは、この言葉を自分のクレド(誓い・信条)としている。大きな不安を抱えていた私は、この言葉に励まされ、ドストエフスキーの五大長編全部を訳して批判に答えていこうというところまで、たどり着けた。いわば、別化性能の左脳的発想だった。

もうひとつ、不安を打ち消すのに大きく役立ったのはヨハン・セバスティアン・バッハの音楽である。バッハを聴いているうちに不安は消え、かえって何かしら自信のようなものが生まれてくるのを感じた。類化性能の右脳的解決法だった。たとえ無用者であってもスマートフォンの使用は許されるはず。そうでないとAI社会そのものが成り立たない。

私が今聴き始めているのはバッハのBWV12番。得も言われぬ悲しみの表現が、そこにある。目の前に鎮座するCD55枚入りのボックスは「人生100年時代」の良き伴侶となってくれるだろう。

私学経営部会

私学は、各学校が建学の精神のもと独自の人材育成を行うことで社会の発展に貢献するとともに、社会的地位を確立してきた。しかし、現代は急速なグローバル化や科学技術の驚異的な発展により、予測不可能な時代と言われ、教育においても、これからの子供たちには基礎学力を前提とした思考力・判断力・表現力を育成することが求められている。さらに2020年には大学入試に新しい制度が導入され、新学習指導要領も年次進行で施行されるなど、日本の教育は大きく様変わりしようとしている。これまでも独自性を保ちつつ時代のニーズに応じてきた私学が、いまだかつてないこれらの変化にどのように対応すべきかを、今こそ真剣に考えなければならない。

当部会では、新たな時代に臨むにあたり、私学としてこれまで継承し、今後も大切に守っていくべきものと、時代の要請に応じて変革していかなければならないものを選び分け、進むべき道を模索する契機となるよう、建学の精神を柱に、働き方改革・カリキュラムマネジメントと私学のスクールリーダーシップに焦点を当て、これからの学校マネジメントのあり方を探っていききたい。

1 研究目標 新しい時代に求められる学校マネジメント

～多様化する教育と私学の独自性～

2 会場 ホテル東日本宇都宮 3階 大和東

3 日程

時間 月日	9 15	10 30	11	12	13	14	15	16 45
10月18日 (金)	開 会 式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	昼食		パネル・ディスカッション		閉 会 式

4 内 容

8:30	受 付 (舘野 弘行・土田 十)	機材担当：長岡 孝之・北川 嘉則 記録(写真)担当：舘野 弘行・小田 智巳 集録担当：中島 亨・星野 英雄
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員・客員研究員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：千代野 仁／記録：小田 智巳 私学経営部会運営委員長 青 木 一 男
9:15	講 演 Ⅰ	司会：土田 十／記録：舘野 弘行 講師紹介：大塚 晃
10:30	演 題 「人間力を育む私学教育と建学の精神」 講 師 船 田 元 作新学院中等部・高等学校 学院長・校長	

12:00	講演Ⅱ 司会：中島 亨／記録：舘野 弘行 講師紹介：小田 智巳 演題 「データに基づく学校改革 見える化からはじまる学校づくり」 講師 中原 淳 立教大学経営学部 教授（人材開発・組織開発） リーダーシップ研究所 副所長 大学院リーダーシップ開発コース 主査
	昼 食
13:00	パネル・ディスカッション 司会：土田 十／記録：舘野 弘行・小田 智巳 テーマ 「新しい時代に求められる学校マネジメント ～多様化する教育と私学の独自性～」 パネリスト これから求められるスクールリーダーシップを校長の専門職基準(日本教育経営学会)から考える 元 兼 正 浩 九州大学大学院人間環境学研究院 教授・副研究院長 私立学校の強みを活かしたカリキュラムマネジメントの展望 広 石 英 記 東京電機大学工学部 教授 学校法人東京電機大学 教育改善推進室長 日本PBL研究所 理事 間近に迫る第5世代情報環境大変革への理解と備え 上 野 憲 示 文星芸術大学附属中学高等学校 理事長・中学校長 文星芸術大学 前学長 コーディネーター 鈴 木 康 之 水戸女子高等学校 理事長・校長
15:45	閉 会 式 司会：千代野 仁／記録：小田 智巳 1. 開式の辞 2. 総 括 私学経営部会運営委員長 青 木 一 男 3. 専門委員長挨拶 私学経営専門委員長 長 塚 篤 夫 4. 閉会の辞
16:00	

5 講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

船 田 元	作新学院中等部・高等学校	学院長・校長
中 原 淳	立教大学経営学部	教授(人材開発・組織開発)
	リーダーシップ研究所	副所長
	大学院リーダーシップ開発コース	主査
元 兼 正 浩	九州大学大学院人間環境学研究院	教授・副研究院長
広 石 英 記	東京電機大学工学部	教授
	学校法人東京電機大学	教育改善推進室長
	日本PBL研究所	理事
上 野 憲 示	文星芸術大学附属中学高等学校	理事長・中学校長
	文星芸術大学	前学長
鈴 木 康 之	水戸女子高等学校	理事長・校長

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

青 木 一 男 國學院大學栃木中学高等学校 校長

副委員長

大 塚 晃 文星芸術大学附属高等学校 校長

委 員

長 岡 孝 之 文星芸術大学附属中学校 副校長

千代野 仁 文星芸術大学附属高等学校 教頭

舘 野 弘 行 文星芸術大学附属高等学校 教務部長

星 野 英 雄 文星芸術大学附属高等学校 教諭

土 田 十 國學院大學栃木中学高等学校 教務主任

中 島 亨 國學院大學栃木中学高等学校 教諭

小 田 智 巳 國學院大學栃木中学高等学校 教諭

北 川 嘉 則 國學院大學栃木中学高等学校 教諭

7 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長

長 塚 篤 夫 順 天 中 学 高 等 学 校 校長

副委員長

鈴 木 康 之 水 戸 女 子 高 等 学 校 理事長・校長

委 員

實 吉 幹 夫 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長

木 内 秀 樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長

梅 村 光 久 学校法人三重高等学校 理事長

摺 河 祐 彦 兵庫県播磨高等学校 理事長・校長

新 田 光之助 筑陽学園中学高等学校 理事長・高校長

菅 沼 宏比古 学校法人西海学園 理事長

客員研究員

野 原 明 文化学園大学杉並中学高等学校 名誉校長

真 城 義 磨 学校法人真宗大谷学園 専務理事

私学経営部会 講演Ⅰ

「人間力を育む私学教育と建学の精神」

作新学院中部・高等学校 学院長・校長

船 田 元

栃木県宇都宮市にある作新学院という学校を経営している。「作新」は四書五経の『大学』の「日々新たに、又日に新たなり。新しき民を作（おこ）せ」の一節に由来する。「毎日、世の中は変化している、変化する世の中に対応できる人をつくろう」という意味である。後段の「新しき民を作れ（作新民）」から「作新」を取った。

実は、もともとは黒羽藩の藩校名だった。江戸城無血開城の立役者である勝海舟が名づけ親で、廃藩置県で藩校がなくなった際、黒羽藩の藩士だった小山田辨助が私の曾祖父に「ぜひ『作新』という名前を継いでほしい」と依頼、曾祖父も気に入り、作新館という私立の学校に改名した。

ここで言う「新しき民」とは単に学校で新しい技術や知識を習得するだけではなく、自分でものごとを起こして、自分自身を新しくしていく能力を持った人間のことでないか。そうした人間をつくるのが本当の「作新民」と考え、アクティブ・ラーニングなどにも積極的に取り組んでいる。

私学は公の支配・管理から一定の距離を置いて独自の教育を行い、きちんと成果を出して公にも認められることが大事だ。栃木県では、先輩達が尽力して「栃木県公立高等学校協議会」という県教育委員会と栃木県私立中学高等学校連合会が協議する場がつけられた。

共通の課題について公開で議論しているほか、様々なことについて公私間で話し合う場となっている。近年では、県内の中学校において高等学校への進学率が下がっている問題を話し合った。

進学率が下がった理由は何か。県外に出たケースもあるが、県外から来るケースもあり、その数は、ほぼ同数で影響はあまりない。どうやら広域通信制に進学する生徒が増えているようだ。年々増加しており、看過できない状況になりつつある。

本日は「私学教育の外的事項」「内的事項」をめぐって、いろいろと申し上げたいことがあるが、ここでは「外的事項」のうち「教育の無償化の問題点」「働き方改革と部活動制限」に絞りたい。

教育の無償化が、よく聞かれるようになった。1つは幼児教育の無償化である。3～5歳児は所得制限なしで幼稚園や保育園の保育料などを無償にする。2つ目は大学で給付型の奨学金を大幅に出して実質的無償化を目指すもので、2020年4月からスタートする。3つ目は高等学校の場合、就学支援金を抜本的に充実させて、年収590万以下の世帯は平均の授業料の40万円弱を支給する。私立高等学校も実質的に無償化する。これも2020年4月からスタートする。

ただ、2つほど懸念がある。第1に幼児教育の無償化となると、さらに待機児童が増えることだ。第2に全体としてはモラルハザードの危険性もある。今まで父母からすると「自分たちのお金で子どもたちに、しっかりと教育を受けさせるんだ」と頑張ってきたのに、無償化が上から降ってくると、そうした気概・努力する心がそがれてしまう心配がある。

「働き方改革」にも、いくつか問題がある。働き方改革は国策として取り組まざるを得ないが、私学も含めた教育の分野は子どもたち、生身の人間が相手で、ある意味では24時間、対応しなければいけ



ない世界である。そういう気持ちで、われわれは日々過ごしている。

教育、特に私学の場合、一定の時間的なアローアンス・許容範囲を持たせてもらいたいと文部科学部会・委員会で訴えているが、なかなか理解を頂けない。厚生労働省からは「三六協定、あるいは教職員の代表者と協定を結んで、変形労働制で対応してはどうか」という提案もあるが、それで現場が対応できるのかどうか議論はしているものの、まだ結論が得られていない。

「働き方改革」によって部活動も制限される。指針がスポーツ庁と文部科学省から出た。練習時間は平日 2 時間、休日 3 時間に限定し、毎週 2 回休みの日を設けるという内容である。熱心な部活動の場合、すぐには合わせられない。

私学の多くが部活動の活躍によって成り立っている。甲子園や国立競技場などを目指すトップレベルの生徒たち、部活動での活躍を目指す子どもたちに入学してほしいと考えながら私学を経営しているわけで、多くの学校で部活動は金看板である。

そうした金看板である特色・強みを制限しようとするにつながるので、この問題についても、しっかりと対応していきたいと考えている。

私学経営部会 講演Ⅱ

「データに基づく学校改革見える化からはじまる学校づくり」

立教大学経営学部 教授（人材開発・組織開発）／リーダーシップ研究所 副所長

／大学院リーダーシップ開発コース 主査

中原 淳

データによって「見える化」をしていきながら、学校の教育改善、学校づくりができないかということについて述べたい。

今、教育現場や学校が危機だと言われているが、学校は時代の変化に対応するために健闘している。その上で、学校改善の一番のポイントは教員の努力だけではなく、組織全体で動くことだ。ところが、学校は組織全体で動くのが難しい。基本的にはフラットな組織でリーダーシップを発揮しづらい。専門職の信念があるが故に意見が対立してしまい建設的な議論に向かいにくく、現状維持を考える先生もいる。学校の組織作りは心理戦に近いと考えている。データで現状を「見える化」して学校の課題を見つけ出し、対話を通じて、自分達で自己決定していかなければ、学校は変わっていかない。

「カモメになったペンギン」というテキストには組織を変えるための秘訣が載っている。これはジョン・P・コッターというハーバード大学の先生の組織変革論をもとにした寓話だが、ポイントは次の点だ。組織を変えていくには、①調査する、②調査に基づく対話と合意形成を行う、③調査による説得を行う、④問題解決のたたき台をつくる、⑤ビジョンの提示・解決策を講じる、⑥情報交換の繰り返しをして、最後は⑦制度化していく。

組織で起こっている変化を「見える化」をしていきながら、対話をしていくことが大切だ。私はいつも「イメージできないものはマネージできない」と言っている。何らかの形でイメージできないものに対して、対話を行うことや変化させることは難しい。まず、最初にやるべきことはイメージをつくることだ。

前述の組織変革は難しいので、学校改善は「学校づくりの4ステップモデル」で行う。①学校の課題を「見える化」する、②意識合わせをしていく（管理職、副校長、学校のキーマンで意識合わせを行う）、③一般の教員を巻き込んで対話を行う、そして、④実践していく。組織作りはデータを使った「見える化」をしていきながら組織の体制を整えることが重要だ。

一般的に大学生達は、リーダーシップは偉い人のもので自分には関係ないと思っている。その他にもリーダーシップはワンマンで人を引っ張るものだとか、生まれつきのものだと思っていて、他人事だ。私が教鞭を執っている立教大学経営学部ではそう考えていない。私達の行っている教育の特徴を挙げると、1つ目は、リーダーシップは、権限がなくても誰もが発揮できるものであると教えていることである。皆で合意し、声を掛け合って助け合うもので、後天的に身に付けることのできる、「あなたのためのもの」だと伝えている。

2つ目は、学生の教育機関から仕事領域への橋渡しだ。企業での課題解決は出題範囲がなく、職場のメンバー全員でコミュニケーションを取りながら、使えるものを使い、分からない時は先生やフィードバックをくれる人を自分で探しながらか行。ところが、教育機関の学びは違っていることが多い。教育機関と大人のリアル社会の間には大きな「段差」がある。この「段差」の激しさの中で社会に出て困難を感じる学生もいる。私達は、企業とコラボレーションを行うことで、学生が上手く社会へ移行できるようプログラムを組んでいる。

3つ目は、リフレクションとフィードバックによりリーダーシップを発揮できる人材を育成している。学生には360度のフィードバックを行っている。自己評定などを通じて自分の弱み、強みを発見する。さらに、自分としては気が付かなかったことを、他の人から強みとして誉められることが結構ある。フィードバックを通じて、自分を発見する教育だ。

そこで、立教大学経営学部 BLP データアナリティクスラボを立ち上げ、教育成果の見える化を徹底的に行っている。ここで収集された様々なデータは、教育改善、入試やカリキュラムの改革に役立てる



ため、授業担当者、事務局、教授会に渡し、今後の組織のあり方を常に議論の材料にしている。学生にもフィードバックして、自分のあり方を考えるよう促している。良い点や課題も「見える化」して共通のイメージを持たないと議論ができない。

「見える化」を通じてカリキュラム・マネジメントも行っている。2校（A校、B校）の事例を紹介する。カリキュラム・マネジメントは、カリキュラムの改善に資するような実態の把握を行いながら、学校の未来を変えることだと思う。一番大事になることは「見える化」することだ。

A校では、まず「授業評価」を生徒と教員に評定してもらい、授業者の先生方には厳封して渡す。こちらでは評価をしない。更に、ホームルームや学習参加の雰囲気等様々なことを可視化して、データを先生方に渡している。すると、先生方がやり方を変えなければならないと思うようになる。皆が感じていることが数字になって現れる。「見える化」して同じものを見ているから、対話や他の先生へのサポートができる。

B校は、データに基づく振り返りや今後の学校の方針づくりをやりたいという学校であった。ワークシートを使いデータを先生方に渡した。データを元に何をするかは先生方に決めてもらう。学校全体での振り返りについても分析を行った。こちらも、先生方が常に思っていたことが、「見える化」され、組織ぐるみでこれからどうするかを皆で話し合うきっかけになった。

これらの「見える化」は、評価ではない。変化するための手段、成長の鏡だ。その他の学校や企業でも同様のことを行ってきたが、「先生、意外でした」と言われたことはほぼない。口に出せなかったことがデータになったことで話題に出せるようになった。行っていることは、先程の4ステップモデルと同じだ。学校で年に1度の振り返りを行う、意識合わせをする、そして、教員研修の時間を設け、話し合っ、て、未来の学校はどうあるかを決める。非常にシンプルなステップだがこれを通じて、カリキュラムの改善を行った事例だ。

次は、働き方改革で長時間労働是正の話をする。学校での長時間労働是正のプロジェクトを行うと、その後、必ず自分達の学校の特色を出すために、何をやらなければいけないかという議論になる。長時間労働について、業務の時間は減らしたいと思っているのだが、子どもや保護者に対してためらいがあるという先生が横浜市では全体の3割もいた。罪悪感やためらいといったものが企業の人から語られることはほぼない。逆に言うと、学校の中で長時間労働是正のプロジェクトを行っていく時には、先生方の心理というものに配慮する必要がある。時間制限を業務の見直しや減少を行わずに行うことは非常に危険だ。恐らく逆効果になる。横浜市では1校選んでコアチームを設定し、様々な取り組みを行って、データを集める。次に80校が参加した校長研修会でその内容について話し合い、自校で取り組んでもらう。次は500校で行う。段階を踏みながらどのように全校を変えていくかというプロジェクトを我々は行っている。しかし、働き方改革のプロジェクトは「見える化」までが大変難しい。先生が今までやってきたことがデータに否定されたと思ってしまうからだ。どのように現場にフィードバックしていくのが鍵になる。では、どう返していくのか。それは、労い・感謝から始める。先生方の頑張りを認めるということから始めないと、いきなり変えようとするとうと反発を受ける。その後、耳の痛いこともフィードバックしていく。その際に非常に大事なことは、自己否定されたと感じさせるネガティブ・ワードを言わないことだ。先生方が今まで頑張ってきたことを、持続可能にしていけないと駄目ではないかと話す。何故ここまで気を遣うかというと、先生方に罪悪感やためらいがあるからだ。「将来の子ども達のために少し働き方を見直しませんか」、という様に話す。このプロジェクトの事前ヒアリングで年代が上の先生と、若い先生にかなりズレがあることが分かった。このズレをデータにして、問題と向き合い、考えていく。考えていく時に大事なことはヒントを提示することだ。そして、最終的には自分で決めるということが大事だ。

大学でのプロジェクトも学校でのプロジェクトも働き方改革のプロジェクトも全て、学校づくりの4ステップのモデルのシンプルな形で進めている。

教員の個人的な努力だけではなかなか解決できない組織ぐるみの学校づくりを行っていく際に、非常に大事になってくるのが「見える化」だ。教育の未来というのはデータとセットにあると考えている。もちろんデータには限界があり、全てを数字では表現できない。そして、データが正解を教えてくれるわけではない。大事なことは納得解を出すのはデータに基づいて対話する教員であり、自分達だ。データは対話の前提を作るためのものだ。「見える化」をきっかけとして対話を通じて、自分達で未来を作る学校、そういったものが私は躍進していく学校なのではないかと考えている。

私学経営部会 パネル・ディスカッション

「新しい時代に求められる学校マネジメント

～多様化する教育と私学の独自性～

九州大学大学院人間環境学研究院 教授・副研究院長

東京電機大学工学部 教授/学校法人東京電機大学 教育改善推進室長/日本PBL研究所 理事

文星芸術大学附属中学高等学校 理事長・中学校長/文星芸術大学 前学長

水戸女子高等学校 理事長・校長

元 兼 正 浩
広 石 英 記
上 野 憲 示
鈴 木 康 之

鈴木：先日、令和元年台風第19号で被災した本校の卒業生のお見舞に伺った。その卒業生は私に「先生、3年間で鍛えられていますから、こんなじゃあ負けませんよ」と笑顔で言ってくれた。私は本大会のテーマ「人間力」を感じた。私学の教育は「人間力」を高めている。それが、発揮されたのではないか。一方、この部会のテーマ、新しい時代に求められる学校マネジメントは避けては通れない課題だ。「人間力」と「学校マネジメント」の両面を見据えて、パネル・ディスカッションを進めていきたい。



学校組織におけるトップマネジメントの7つの役割

元兼：学校も組織である以上、やはりマネジメントが非常に重要である。ただし、専門家集団である学校組織では企業と同じようにマネジメントすることは難しい。

そこで日本教育経営学会では専門職としての校長に、どのような力量が必要かを検討し、「校長の専門職基準」をつくった。7つの専門基準からなる。本日は、この基準に沿って、校長のリーダーシップを皆さんと考えていきたい。リーダーの唯一最大の武器は言葉だ。言葉で人を動かしていく。つまり法律や規則で動かそうとしても本当の意味では人は動かない。



専門職基準の1つ目はビジョンをつくること。ビジョンはシェアされないと意味がない。ビジョンは旅の目的地に例えられる。2年後、3年後、どのような学校になっているのかを示し、教職員とシェアしていく。みんなが「いいね」「行きたいね」とワクワクを共有できるような目的地を指し示す必要がある。

2つ目が教育の質を高めるためのカリキュラムマネジメントが必要である。単なるカリキュラムづくりではなく、リーダーは適切な教科指導・生徒指導などを実現するためのカリキュラム開発を提唱しリードする必要がある。



3つ目は人材育成の問題である。学校の規模が大きくなればなるほど、校長と教職員の距離が遠くなる。人事評価を、どんなに精緻化してもダメで、やはり一人ひとりの先生を見て、声をかけていく。そこからしか人は育たない。

4つ目は危機管理である。基本的には課題のない学校はないので、みんなが課題を共有することが大事である。やはり教職員とのコミュニケーションの密度が問われる。

5つ目はステークホルダーといわれる保護者、地域とどう向き合っていくかである。たとえば保護者や地域から信頼されたいと考える。しかし、逆に保護者や地域を、どれほど信頼しているか。信頼もしていないのに「信頼してくれ」では都合がよすぎる。



6つ目はリーダーシップである。講演Ⅱの中原先生から「リーダーシップは天賦

の才能ではない。スキルとして磨いていくものだ」というお話があった。校長のリーダーシップスタイルとしては「教師の中の教師」教育的リーダーもいれば、文化変革型のチェンジングリーダーもいる。自分のスタイルに安住するのではなく、常により越えていくことが大事だ。

7つ目は学校を取り巻く社会的・文化的要因を理解することである。ビジネスの世界では経営者は未来を予測しないと社員を路頭に迷わせてしまう。学校の経営者も同じである。先行き不透明な時代、10年先は全然見えない。しかし、子どもたちに10年後に生きる力を身につけさせるためにはアンテナを張らざるを得ない。

○ディスカッション

広石：今、公立の学校を「ひな型」として提示されたが、私立の場合、公立と違う面があれば、教えて頂きたい。

元兼：私立のほうがビジョンはつくりやすい。公立はビジョンの前提となる校訓が似たり寄ったりで、あたりさわりのないものが多い。ビジョンをつくるのは意外に難しい。私立の場合、迷ったら建学の精神や創業者の考えに戻ることができる。そこに私学の強みがある。

広石：理事長が創業家系の私学で、公立学校の校長先生をヘッドハンティングして、いきなり校長に据える場合がある。これでは私学の強みが発揮できない。学校の歴史、建学の精神、ユニークな取り組みなどを十分に理解させた上で校長に登用しないと、せっかく持っている強みが寸断される。

元兼：公立も同じだが、そういう校長先生には就任1年目には徹底的に「見る」ことを大事にせよ、と訴えたい。現場にいたら見えてくるわけではない。やはりアンテナを張っていないと見えない。ただ、どんな学校にも組織の課題があり、外部から呼ばれたからこそ前例に囚われずできることがある。組織の課題に手をつけられれば、本格的な学校改善につながるかもしれない。

建学の精神を現代風の資質能力へと読みかえることで、いろいろな挑戦が始まった

広石：私学には建学の精神があり、長い伝統に裏打ちされた教育理念・目標がある。これがカリキュラムづくり、一つひとつの授業設計、全体のカリキュラムマネジメントの軸になるべきと考える。ただ、建学の精神は創立時の時代状況を反映しており、仏教系・キリスト教系の学校の場合、その宗教の教えに基づいている。

そういう意味では建学の精神は、やや抽象的で難解である。そのまま今の生徒や保護者、地域社会に訴求することは難しい。現代風の資質能力、いわゆるコンピテンシーや社会人基礎力などを援用し、今の子どもたちにも理解できるように読みかえていく必要がある。

そうした教育可能な資質能力へと読みかえ、その資質能力の優先順位や組み合わせを理事長、校長らの経営者・管理職と中堅の主任クラスの先生方が検討することが重要だ。こうした作業をすることで、フォロワーだった中堅教員がリーダーへと化ける可能性もある。

建学の精神の読み直しを経て、再創造された資質能力の育成を基軸としてカリキュラム全体を再構成する。それが私学のカリキュラムマネジメントのあるべき姿である。簡単なイメージでいえば建学の精神を、どのように見える化するのか。中堅教員、管理職の先生方が十分議論し、共有された方向性を、学校行事や特別活動、総合学習などのプランニング、さらには一つひとつの授業設計に落とし込んでいく。そうした組織的なマネジメントが求められる。

私が日本私学教育研究所の研修で訪問した京都市の東山中学高等学校の建学の精神は「摂取不捨」だった。「誰も見捨てない」というSDGsにもつながるような言葉だが、一読しただけでは高校生も保護者も理解できない。また、誰も見捨てないで済む「土台力」という考え方もあった。

そこでこの学校は、建学の精神の読み直しを行った。さまざまな土台力をつくるためには自分をコントロールし、夢や目標を達成する力「セルフ・リーダーシップ」が必要だと考え、この読み直した資質・能力を教育目標に置いた。仏教系の言葉から21世紀型の資質能力に転換したわけだ。

そこから、いろいろな取り組みが生まれた。例えば、10年後の夢を書かせて、そこからバックフォワードして自分の10年間の歩みを考え、「あなたが自分の人生のリーダーになるのだ」と10年の歩みを見える化したカレンダーをつくった。「歴史をつくる3年日記」という日記を生徒につけさせ、先生方がチェックしてアドバイスするという自律的調整力を育む仕組みもつくりあげた。

建学の精神の「摂取不捨」だけでは、ここまで具体的な教育改革はできない。建学の精神を教育可能で検証可能な資質能力に落とし込む作業をすることで、はじめて先生方が生徒を具体的にサポートする手段を手に入れたと考えられる。

○ディスカッション

元兼：建学の精神の読み直しは非常に刺激的である。ただ、具体的には、どのようなイメージで考えておられるか。

広石：建学の精神の読み替えは先程、元兼先生が述べられたビジョン作成の前提となるものである。学校の方向性を定めることだ。その方向性を具体化する際は、いろいろなマイルストーンを示すべきで、それが中・長期的なビジョンとなる。

上野：建学の精神を生かしたカリキュラムを組むとしても、一方では進学を意識したカリキュラムも組まざるを得ない。

広石：多くの私立大学が推薦比率を上昇させている。推薦では必ず面接があり、自分が高校時代に何をしたかを、きちんとプレゼンしなければならない。私立の自由さや強みを生かし、「自分は高校時代に、こういうことをやった」と胸を張って言える子どもたちを育てることが長い目で見れば進学実績にも反映すると思う。

先ほど、鈴木先生が、先生の教え子が今回の台風の被災の後で「先生に3年間鍛えられたから、こんなじゃ負けません」と言ったエピソードを紹介されたが、これこそが私学の強みだと考える。建学の精神に軸を置いた人間力を鍛える独自の取り組みが、私学ならではのたくましい人材を育成できる。私学の本当の強みは、進学実績や偏差値というよりも、ユニークな教育である。お姉ちゃんがこの学校に行って「人として優しくなった」、お兄ちゃんがこの学校に行って、「人としてたくましくなった」という人間力を育てる独自の私学教育に魅力を感じ、妹や弟も是非、この学校で教育を受けさせたいという気持ちになる、これこそが私学の本当の強みだと考える。

日本私学教育研究所の中川所長は、『公立学校が、誰でも飲める安全で無味無臭の水道水だとするなら、私立学校は、好きな人には好まれる個性豊かな天然水だ』といわれているが、私も全くその通りだと考える。私学の個性的教育を後回しにして、進学実績ばかりを追いかけるのは、私学の取るべき道でないのではないか。

正門にサイネージ機器を置き情報発信するなどデジタル化・電子化に注力

上野：情報第5世代は①高速大容量②低遅延③多接続性が特徴だ。2020年の東京オリンピック・パラリンピックにあわせて整備が進んでいる。医療分野における僻地医療や自動運転などに活かされる。企業に比べて、学校は情報化が遅れているのが現状だ。

文星芸術大学附属高等学校の正門には小型のサイネージ機器が置かれている。また、玄関口設置のモニターは85インチで、相当に迫力がある。学校行事や部活の活躍などのニュースを流し、生徒や先生方、来客への情報発信をしている。

具体的には、女子校が「まんが甲子園」でグランプリを獲得、ちばてつや先生が文星芸術大学の学長なので大いに喜んで頂いた。同校の将棋部の全国優勝や短大の文星コラボ弁当なども紹介した。

Skypeを使った通信教育には古くから取り組んできた。女子校ではノートパソコン、タブレットなどを使ってオーストラリアの現地の生徒たちと交信を楽しんでいる。同校ではフィリピンの英語の先生方と1対1で会話し、英語力を高めている。大学、短大では中国人留学生を受け入れており、渡日前の入試相談

を Skype で行っている。

中学校、高等学校では早くから電子黒板を採用した。先生方が多面的な使い方を考案し、効率的・効果的な授業を行っている。ただし、電子黒板は明るいところでは見えにくいのが欠点だ。

書類のデジタル化も進めている。かつては光ディスクに入れるなど成績簿などの保存に苦労したが、今では簡単に電子書籍が作成できるようになった。PDF に落とし込めば、どの端末からでも読むことができる。ただし、成績簿などは個人情報のため、限られた人間しかアクセスできないようにしている。

大学には漫画専攻、アニメ専攻などがあり、地方自治体と連携協定を結んで PR 動画を制作している。静止画漫画をベースにして、その一部をコンピュータで動かし、割合に安価でアニメーションを制作できる技法を NHK と協力して開発した。

NHK と共同制作したアニメ「TRY」は筋萎縮症のお父さんを持った息子が家族愛に目覚めるというストーリーである。NHK 総合放送で全国放映された。宇都宮市の隣の鹿沼市の PR 用動画サイトも制作した。天狗の天ちゃんが偉大なマスター守護天狗を目指して奮闘する「いいもんめっけ！鹿沼」3 部作が公開されている。

ドローンについても本格的な利用が可能になった。ただ、最近、軍事目的に利用され、大きなニュースになったこともあり、技術的には、かなり進んでいるものの、周囲にご迷惑をかけない形で取り組む必要があると慎重を期している。空中撮影は従来、ヘリコプター会社に依頼してきたが、ドローンで簡単にできるようになった。

○ディスカッション

元兼：情報第 5 世代になると、学校はどうなっていくのか。

上野：情報第 4 世代だと画像が荒れていたり、小さかったりする。情報第 5 世代になると巨大サイズのテレビ画面もしくは仮想空間で授業が視聴できる。別段、学校へ行かなくても予備校の名物講義が目の前で展開される。「学校へ通うのはどういうことか」ということを見直す必要がある。

鈴木：情報第 5 世代によって授業は、どのように変わるのか。

上野：新しい展開がどんどん出てくる。一番大きいのは距離の壁を超えること。実際に同じ空間にいるかのような交流が可能になる。ただ、逆に人と人とのリアルなつながりを大切にしたい、温かみのある教育も大事で、その双方を織り交ぜていくことになる。

鈴木：様々な教育改革や制度改革、高度情報化社会が進む中で、学校も変わってくるだろう。しかし、それぞれの学校の建学の精神に基づいて、本大会のテーマ「人間力」とは何かということを各学校が考える良いチャンスを得たと私は感じている。それぞれの生徒、卒業生が幸福になれるという総合的な人間力を考え実践していきたい。



私学経営部会

「総括」

國學院大學栃木中学高等学校 校長

青 木 一 男

時代が大きく変わり、それに対して教育も大きく変えなければいけません。その中で乗り越えなければならないものや課題が山積みという状況の中で、私たちが考えること、やるべきことがたくさんあるわけですが、当部会でその大きなヒントを頂きました。そして、先生方のお話には実践的なものも多く、明日からやってみようというようなことが多くあったと感じています。多くの先生方がそのように感じられたのではないかと考えております。

振り返ってみると、最初の船田先生の講演「人間力を育む私学教育と建学の精神」では、作新学院の歴史を話されましたが、1つの私学の歴史の重さを感じました。やはり私たちは、強調していく面、戦っていかなければならない面があります。そのようにして私学は進んでいくということを改めて感じました。船田先生の中の教育論、すなわち建学の精神ではありますが、生徒に寄り添っていく、そして生徒に様々なことを経験させて、感動を与えることが大切であるということでした。そのため学校は多くの引き出し、ポケットを持っているべきだということは、本当に素晴らしい示唆に富んだ言葉であると思います。

次の立教大学経営学部教授の中原淳先生の講演「データに基づく学校改革 見える化からはじまる学校づくり」では、「イメージできないものはマネージできない」という言葉が印象に残っています。新しいリーダーの姿を提示して頂きました。見える化、データ化して、皆さんの意識を合わせて、そして対話してビジョンを実践していき、学校を改革していく。まさにその通りであると思います。幾つかの学校の実践例があり、私にとっては大いに参考になりました。最後にお話しになった働き方改革がありますが、このことも経営者または学校を運営していくものとして考えていかなければいけないことでもあります。中でも、「先生方を労い、感謝から始めよう」ということは、すぐできることだと思います。元兼先生も「人材育成では、先生方に働きかけ、フォローしているか、声をかけているか、見ているということを示していかなければいけない」と話されました。このこともすぐに実践できることだと思っています。

午後のパネル・ディスカッションのテーマは、当部会の研究目標となるものです。校長として私が感じたこととして、元兼先生のお話の中で7つの校長の専門職基準がありましたが、1つ1つを自分に問い掛けて、実践できているかを考えていきたいと思っています。広石先生のお話は大変勇気づけられました。私学ならではの教育ということが話されていたと思います。特に建学の精神、これを大事にしていく、これが私学の根本となるものだ。その中でも、「読みかえ」ということ。私どもの建学の精神も非常に古い言葉で表していますが、これを読みかえて、実際に、受験生、生徒達に示していきたいと思っています。また、上野先生にお話し頂いた新しい機器の活用は、すでに実践されていることであり、今すぐに取り入れられることだと思っていますので、学校に帰って検討したいと考えています。

最後になりますが、先生方のお話の中で、頻繁に使われた Society5.0 の話の中での、AI の時代の話ですが、少し心が痛いというか、「えっ」と思ったことがありました。AI を駆使した人たちに、これは言葉のあやとか、仕事の部分においてということなのかもしれませんが、「不要な人間」ができるということでもあります。私たち教育者としては、絶対に「不要な人間」というものはあり得ないわけであります。そういう人間を作ってはけません。船田先生の「自分で考え、自分で行動する、AI に取って代わることでできない人間を育てていこう」という言葉が非常に身に染みました。こうした新たな覚悟を持って、また明日からしっかりと教育していきたいと思っています。

最後に、この大会、当部会を開くに当たり多くの方々にご指導ご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。総括とさせていただきます。



教 育 課 程 部 会

グローバル化・高度情報化の進展、人工知能の飛躍的な進化、少子高齢化と人口減少の本格化など、生活環境や社会構造が急激かつ大きく変化する時代を迎えている。この激しい変革の時代に、自らの主体性を堅持し、多様な人たちと価値観を共有し、生涯にわたって学び続け、ともに未来を力強く生きていく人間を育てる教育が求められている。

そして、文部科学省では新学習指導要領において、義務教育段階から一貫して「学力の3要素」である学びに向かう力・人間性の涵養、生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成を掲げ、高大接続や大学入学者選抜、大学教育にいたるまで一体的な改革を推し進めている。

これまで、私立学校は「建学の精神」に基づき、個性豊かな教育を実践し、多くの有為な人材を世に送り出してきた。新しい時代に向かい、私学ならではの特色ある「社会に開かれた教育課程」と魅力ある学校づくりに取り組んでいかなければならない。

当部会では、2022年度実施に向けて具体化される高等学校学習指導要領改訂を踏まえ、より良い社会を作るという目標を掲げた学校教育の軸となる教育課程の意義や役割を再認識し、生徒一人ひとりの資質・能力を育むことを目指しての講演や実践発表を行う。部会プログラムを通して、なお一層の私学教育の充実が図られ、生徒が未来社会を切り拓く一助になれば幸いである。

1 研究目標 未来社会を切り拓く私学教育の実践

2 会 場 ホテル東日本宇都宮 3階 大和西

3 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15		45					45
10月18日 (金)	開 会 式	講演 I	講演 II	昼食		実践発表 I・II・III		閉 会 式

4 内 容

8:30	受 付 (橋本 昭司・斎藤 雅之 ・三田 敏子)	機材担当：福本 晴彦・三根 直長 記録(写真)担当：近藤 靖男・山本 晴一郎 集録担当：近藤 靖男
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員・客員研究員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 教育課程部会運営委員長 五味田 謙 一
9:15		

9:15	講演 I 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 講師紹介：岡島 一浩 演 題 「新学習指導要領・大学入試改革を踏まえた教育課程編成」 講 師 水 原 克 敏 尚絅学院大学 特任教授
10:45	講演 II 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 講師紹介：岡島 一浩 演 題 「大学入試改革を踏まえた主体的・対話的で深い学びを実現する授業と評価のすがた」 講 師 益 川 弘 如 聖心女子大学現代教養学部教育学科 教授
12:00	昼 食
13:00	実践発表 I (千葉県) 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 テーマ 「『アクティブ・ラーニング×ICT×HR=?』 ～3年間の研究・実践から見たもの～」 (13:50) 発表者 笹 尾 弘 之 市川中学高等学校 教諭
(14:00)	実践発表 II (東京都) 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 テーマ 「学びへ向かう力を育てる探究学習～高校生の卒業論文作成～」 (14:50) 発表者 齋 藤 祐 中央大学附属中学高等学校 教諭
(14:55)	実践発表 III (栃木県) 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 テーマ 「アクティブラーナー育成～人生を切り開く『力』を手にするために～」 発表者 岩 崎 浩 士 佐野日本大学高等学校 教諭
15:45	閉 会 式 司会：山崎 武／記録：近藤 靖男・山本 晴一郎 1. 開式の辞 2. 総 括 教育課程部会運営委員長 五味田 謙 一 3. 専門委員長挨拶 教育課程専門委員長 清 水 哲 雄 4. 閉会の辞
16:00	解 散

5 講師・発表者・指導員（順不同）

水 原 克 敏	尚 絅 学 院 大 学	特任教授
益 川 弘 如	聖心女子大学現代教養学部教育学科	教授
笹 尾 弘 之	市 川 中 学 高 等 学 校	教諭
齋 藤 祐	中 央 大 学 附 属 中 学 高 等 学 校	教諭
岩 崎 浩 士	佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校	教諭

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

五味田 謙 一 矢 板 中 央 高 等 学 校 校長

副委員長

岡 島 一 浩 足 利 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 校長

委 員

橋 本 昭 司 矢 板 中 央 高 等 学 校 副校長

山 崎 武 矢 板 中 央 高 等 学 校 教頭

斎 藤 雅 之 足 利 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 教頭

福 本 晴 彦 矢 板 中 央 高 等 学 校 教諭

三 根 直 長 矢 板 中 央 高 等 学 校 教諭

近 藤 靖 男 足 利 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 教諭

三 田 敏 子 足 利 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 教諭

山 本 晴一郎 足 利 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 教諭

7 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長

清 水 哲 雄 学 校 法 人 鷗 友 学 園 理事長

委 員

鈴 木 弘 香 蘭 女 学 校 中 高 等 科 校長

北 村 聡 京 都 外 大 西 高 等 学 校 校長

大多和 聡 宏 開 星 中 学 高 等 学 校 理事長・校長

客員研究員

助 川 幸 彦 蒲 田 女 子 高 等 学 校 校長補佐

山 本 与志春 学 校 法 人 青 山 学 院 院長

教育課程部会 講演Ⅰ

「新学習指導要領・大学入試改革を踏まえた教育課程編成」

尚絅学院大学 特任教授

水 原 克 敏

従来の学習指導要領では関心・意欲・態度を重視する「構成主義」という学習・教授理論が採用されていた。「構成主義」というのは、一人ひとりの子どもの主観的な認識が形成されるに従って、それに沿って知識が獲得されるという理論である。それぞれの認識・体験を自分なりに構成する過程で、人は知識・技能を自分の中に取り込んでいくので、まずは、児童生徒の関心・意欲・態度に拠らなければいけないという理論である。いじめ問題や不登校など「生きる力」に欠けた問題が生じていたので、一人ひとりの内面形成を重視したカリキュラム政策が採られていたのである。



ところが、新学習指導要領では「構成主義」ではなく、コンピテンシー基盤型カリキュラムの理論が採用されることになった。この背景には、大学や高校を優秀な成績で卒業しても、実社会ではあまり有能でない人が多いという実態が問題になり、学校内だけでしか通用しない知識・技能ではなく、「学校以外でも通用する汎用的能力」を育成する方針が採用された。この方針変更を決定的にしたのは、第4次産業革命・Society5.0の時代の中で「生き抜く力」が必要とされてきたからで、その力を測定するという「PISAテスト」への対応が迫られていたからである。

「PISAテスト」では学校外でも通用する汎用性のある能力が測られる。そのためにはアクティブ・ラーニングや「主体的・対話的な深い学び」に取り組む必要があるとされた。「汎用性のある」とは端的な例を挙げれば、学校内の教科書だけでなく、社会一般の新聞・雑誌、いろいろな解説書・説明書を読むことである。今までは、数学の学力を測定するなら、単純に数式や図形を使った問題を出して、いわば真空状態で数学そのものだけを測る仕方がとられてきた。国語・理科・社会・英語も同様であった。ところが、学校外の世の中では、混然とした現象の中に数学的なそれが存在し、配慮すべき幾つかの観点から吟味して判断するというのが一般的である。そういうわけで、これからは、取扱説明書など、よくある社会の現実を反映した文章を出題して、その中から数学や理科・社会・国語の問題を取り出させて解かせる試験に変わった。学校外の産業社会でも使える能力にしなければいけないということが背景にある。

こうした影響を受けて、新学習指導要領では「何ができるようになるか」が重視されるようになった。新学習指導要領改訂の考え方としては、新しい時代に必要な資質・能力として「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」、そして「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」の3点が示されたが、一言でいえば、第4次産業革命・Society5.0の時代の中で「生き抜く力」である。そのために、新学習指導要領のカリキュラム原理は、「構成主義」からコンピテンシー基盤型に転換されたのである。

学校内で教えた知識・技能は、未来の産業社会でも使える知識・技能になっているのか、思考力・判断力・表現力を発揮できるのか、学びに向かう力・人間性は本当に機能するのか、ということが問われるようになった。関心・意欲・態度など一人ひとりの自己形成を重視した従来の路線は転換され、日本が21世紀に発展し成功するための、社会的に通用する汎用的能力の育成が目指され、その意味で、学習指導要領では、「何ができるようになるか」を求めている。

幼稚園から小学校、中学校、高等学校、そして大学に至るまで、これに取り組むことになり、大学入試は、その徹底を求める関所の役割を果たすことが期待されている。小中高の成果、とりわけ高等学校教育の教育課程編成が大学入試によって、上記の3つの資質・能力が検証され、その成績しだいでは合否が決定される。従来と違う点は、思考力・判断力・表現力をみるために記述式の問題を課すこと、また、学ぶ意欲・態度等を調査書によって評価するということである。高等学校側は、これに対応するためのカリキュラム改革が進行中で、授業ではアクティブ・ラーニングやSTEM教育を採り入れつつある。STEMとはScience、Technology、Engineering、Mathematicsの頭文字をとったもので、もうひとつ、Artも入れてSTEAM教育が広がっている。この種の総合学習、総合探究学習を行うことで、暗記暗唱に傾斜している受験学力を変革しようというのである。これはアメリカを中心に世界的に流行している教育である。

改めて、3つの能力を高等学校版に直すと、1番目は基礎となる「知識及び技能」の習得、2番目は知識・技能を活用して自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な「思考力、判断力、表現力等」の育成。3番目が主体性を持って多様な人々と協働し学ぶ態度（「学びに向かう力、人間性等」）である。3番目は、一般的には学ぶ態度となっているが、主体性・多様性・協働性などの人間的資質が評価されるので、高等学校は調査書にいろいろ盛り込み、少しでも良い評価を得るよう工夫している。思考力・判断力・表現力についても、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等が表現できる能力を評価するための教育課程編成と授業方法の改善が進められている。他方、大学入試の作問でも様々な努力が重ねられているが、それを具体化する問題作成と調査書・面接などの評価は大変に難しい。

大学入学共通テストを作成する際の方針として、「国語」では多様なジャンルの文章問題で構成され、情報を比較検討し統合する力が求められる。従来の国語とは違って、「PISAテスト」で問われる読解力では、「あなたは、どのように読み、考えたか」が問われる。それは日本の私たちが進めてきた「読解力」とは異質である。従来は、文章を構造的に解析できる能力が読解力であって、それに対する見解を求めることはなかった。「世界史」では会話文、文章、資料、グラフ、地図など多彩な複数の資料を基に多面的・多角的に構成することが、問題作成の方針となっている。そして、「物理」では日常生活での物理現象を題材に、実験・観察を重視したものを会話文とグラフから分析する力が求められるなど、複雑な日常の中から物理学の問題を取り出して、その問題を解くことが求められている。これまで、「あなたは、それをどう評価するのか」、「どういう提案をするのか」ということを教科学習で問われることはなかったが、これからは国語でも世界史でも数学でも、そうした問題解決を含めた出題が目指されることになる。以前から、「新学力観」の入試を模索した経緯があり、必ずしも成功していないが、その蓄積を生かした良問作成が望まれる。

今回、実際に試行した共通テストでは、そのような方法で試験がなされた。書かれたテキストを理解し、見つけ出した情報を多面的・多角的に吟味し、情報と自分の知識力を結びつけて考えをまとめていく力、すなわち、読解力が求められている。全ての教科において、この種の読解力が求められることになる。

さらに、新テスト「高校生のための学びの基礎診断」の活用が始まる。この基礎診断テストは、義務教育段階の学習内容の定着度合いを測定する「基本タイプ」と、高校段階の共通必修科目の学習内容の定着度合いを測定する「標準タイプ」とがある。対象教科は当面、国語・数学・英語の3教科である。多くの高校にとっては共通テスト以上に重要で、各高等学校が、目標に向けて教育課程を改編すべき課題を分析する役割を担うことになる。その分析結果は、報告書や予算獲得など、様々なエビデンスに使われるに違いない。

以上のように、高等学校は、大学入試共通テストと「高校生のための学びの基礎診断」テストの動向を踏まえ、かつ生徒が受験する関係大学の入試動向をふまえて、教育課程を編成することが必要となるのである。

参考文献：水原克敏『増補改訂版 学習指導要領は国民形成の設計書』 2017 東北大学出版会

「大学入試改革を踏まえた主体的・対話的で深い学びを実現する授業と評価のすがた」

聖心女子大学現代教養学部教育学科 教授

益 川 弘 如

OECD は今の中高生が、社会人になって活躍する 2030 年を見据えたラーニングコンパスという枠組みを発表した。資質・能力を育み、見通し、行動、振り返りを行いながら、社会をよりよくするために学ぶことを教育目標として掲げている。新学習指導要領での資質・能力も幅広い意味の学力だ。それらを教育課程全体、特に教科の中で育てていく。ところが、汎用的な力をテストで測るのは難しい。文脈のない普遍の人間力、資質・能力等を測るテストがあるわけではない。例えば思考力といっても、国語では素晴らしい思考力を発揮するが、理科では発揮できないこともある。様々な資質・能力は、各領域の知識に支えられている。問題解決、批判的読解等の方法を生徒に教えても実際の行動には移せない。専門領域、各教科の中の学習の中で、資質・能力を発揮する学習活動をデザインし、知識を学びながら、それらを使用する経験をさせることで、身につけていくことができる。そのための方法が、アクティブ・ラーニングであり、主体的・対話的で深い学びだ。育てたい能力を意識して伸ばすようなカリキュラムを作り、各学校が目指そうとしている子供に近づいているかを見ることによって評価できていくと思う。



2020 年度から始まる大学入学共通テストでは、作問者に以下の文脈のいずれかを入れるよう要請がなされている。①授業によって生徒が学習する場面の設定、②社会生活や日常生活から課題を発見し問題解決をする場面設定、③資料やデータを元に考察する場面の設定の 3 つだ。そして、2024 年に再度大きく改革されることが決定している。変化・改良されていくテストに対し、高等学校は先読みをして対策をしていく必要がある。ところで、センター試験は知識と思考力を同時に測定できていたのかについて、国語の問題を研究チームで検証した。高校生にセンター試験の問題を解いてもらい、なぜその答えを選んだのかを聞いた。ある生徒は文書を読み、正解問題について選択肢の文章に違いのある部分を見直して、消去法で回答したと、答えた。他にも登場人物の性別を読み間違っていたが、正解になっていた例もある。本文を全文読まず、傍線部まで読み進め、問題文、選択肢を読み回答している生徒が被験者の 3 分の 2 いた。検証から、被験者が読解力ではなくテストの設問から効率良く正解を導く力（テストワイズネス）を発揮している可能性があることが指摘できる。更に、この同じ問題を選択肢問題から記述式問題にし、話し合いを行い、発話分析をあわせて行ったら、被験者は全文を理解した上で回答し、話し合いでも、本文を踏まえた議論をしていた。更に、国立大学法人東京大学（以下、東大）の入試問題でも同じ作者の文章から出題されていたので、センター試験と東大の両方の問題を解かせ、発話分析を行った。そうすると、同じ生徒でも東大入試の方が問題全文を読んだ上で、深い読解力を発揮し問題文を深く解釈してきた。東大入試とセンター試験で条件は異なっているが、出題される問題によって発揮される思考力が異なるということだ。この結果から、普通の授業指導でその生徒の受ける入試が選択問題中心だからと指導すると、テストワイズネスだけが育ち、育てたい本来の力が育たない可能性がある。そこを見据えて、受験対策では指導と評価の一体化を考え、力を十全に伸ばした後に、選択肢問題を解かせるということができないのではないか。

先生が生徒は基礎的なことを教えないと探求などの豊かな展開はできないという考えを持っていたら、授業は必要な基礎学力や基礎スキルの訓練になり話す事が中心になる。そうではなく、生徒は元々、能動的に学ぶ存在で有能なのだから、その力を伸ばして磨く事が必要だ。持っている能力を使わせる環境と問が大切だ。問とは教科の中で探求したいこと、見方・考え方を働かせたいことだ。これらの質が低いと生徒は遊んで終わりになる。また、知識が無いと考えられないので良質な教材が必要だ。資質・能力を育む上で、先生

の教科の専門性・指導力が重要だ。

生徒の立場から考えていきたい。コミュニケーション能力は色々なテクニックがいわれるが、「私には伝えたいことがある」という自覚が大事だ。コラボレーション能力にしても、話し合うと自分の考えが良くなるという自覚が必要になる。先生が「話し合って」と言ったから話し合う程度のアクティブ・ラーニングだと、単に話し合って終わりになる。自分の考えがよくなるという自覚が生まれないと、アクティブ・ラーニングは意味がない。創造力についても、ある人がある物を生み出したというのは結果論だ。色々な情報を取り入れて考える過程がある。アクティブ・ラーニングの文脈で考えると、そのクラスの色々な意見を自分の中に取り込むと新しい答えが生み出されるという体験を教科や探求活動で体験させることが大切だと思う。使う必然性が生徒にあれば、使いながら伸ばせる。この必然性を持たせるために教科の追究、教材研究が重要になる。

次に、アクティブ・ラーニングを行う上で、単にグループにすると、できる生徒だけが、一人で解決して、他の生徒に教えて終わりになるのでは意味が無い。調べたことをグループで発表して終わりでも意味がない。一人では十分な答えが出せない課題を皆で答えを出そうとする課題、生徒がその課題に対して、考えを出し合うことでより良い答えを出すことができるという期待感を持たせる。そして、答えは先生に教えてもらうものではなく、自分達が作り上げていくものだという自覚させる。また、現在、学んだことが、終わりではなく、まだ、その先にも学ぶ事があるのだというのが当然だという自覚を持たせる。学ぶ力を発揮する必然性のある学習環境をデザインすることで、資質・能力を使って、主体的・対話的に学ぶことを通じて、教科等についての深い学びを支えるとともに、資質・能力も伸びて行くことになる。今回体験してもらう知識構成型ジグソー法は色々な力を子どもたちが使わざるを得ない状況にすることで、自分はその学び方をすればより深く学べると体験し、これを体験した子どもは普通の授業でもより深い学びができるようになっていくとされている。ただし、この型だけをやれば上手いくというものではない。その背景には先生方の教材研究が欠かせない。今回の問は、日本史の授業で実践されたもので、「あなたが戦国大名ならどこにお城を築きますか」というものだ。教材研究に基づいて、生徒が城を建てた人の立場に立って考えることで、歴史の深い理解につながると同時に、築城する場所によるトレードオフの難しさについても深く考えられるようにデザインされている。

話し合うことで理解が深まるのかについて、理解の社会的構成モデルを紹介したい。最初に子ども達は自分なりに知っていることや経験則、間違った素朴な理論を持って授業に臨んでいる。それに対して教員は事実だけではなく様々な原理原則や概念も学び取ってほしいと願っているが、それらは子どもにとっては難しい内容だ。そのため、従来の授業では如何にわかりやすく、かみ砕いて伝えるかに重きを置いていた。かみ砕いた説明では、子どもたちはわかったつもりになるが、自分の知識とつながらないため定着しない。ところが、自分の知識は生徒の中にしかないのだから、学習内容と生徒の知識をつなげる活動は、生徒自身にしかできない。その生徒の活動を促すところに、アクティブ・ラーニングの価値がでてくる。自分で考えて、学んだ内容を自分の知識とつなげて、言葉という道具を使って文章化し、誰かに発信・提案する作業だ。自分の考え方が肯定されれば、自分の知識とつながられて定着する。否定されれば、相手の知識のつなげ方を聞き、改めて自分の知識を探してつなげて、学びを深めていくことができる。しかも、これは自宅ではできない活動で、学校の教室だからこそできるものだ。アクティブ・ラーニングは対話を通して、一人一人が自分の知識の間違っているところを見つけて知識を作り直したり、新たに作ったりすることだ。先程のジグソーの型だけをやっていても、話し合いが空回りすることが起きる。授業の最初に投げかける問は、資質・能力を高めてほしいのであれば、教科の中で一番考えて欲しい学習内容を提示する。そのための教材研究がアクティブ・ラーニングの質に深く関わってくる。色々なアクティブ・ラーニングの手法があるが、何かの手法を行えば、何かの力が育つと考えるのは考えが甘い。それぞれの型の中に、授業で育てたい本質をどう埋め込むか、そこで、子どもがどのような学びを発揮するのかを見ながら授業を作っていく、その積み上げが次につながると共に、全体の教育課程の中で育みたい力を育む事につながる。

1. はじめに

近年、生徒の主体的・能動的に学ぶ力を養うために、アクティブ・ラーニングが広く行われている。

私の勤める市川中学高等学校では、ALICE プロジェクト(Active Learning for Ichikawa Creative Education)を立ち上げ、ICT(Information and Communication Technology)ツールを使用して様々な授業でアクティブ・ラーニングを研究し、私もそのプロジェクトチームの一員として中学校・高等学校で授業を行っている。アクティブ・ラーニングや ICT 教育の研究を行う中で、一つの疑問が生じた。それは、「授業以外でアクティブ・ラーニングを行っている実践例はあるだろうか」ということだ。学校生活の柱は、授業・ホームルームを中心とした学校行事・部活動である。今盛んに行われているアクティブ・ラーニングは、教科の授業での主体的・能動的学びが主である。この学びを、授業だけでなく HR でも行えるのではないかと考え、2017 年度に ICT を使ったアクティブ・ラーニングの実践を行った。その詳しい内容については日本私学教育研究所紀要(第 54 号)を参照して頂き、今回はこの実践が学校にどんな影響を与えたか、さらに現在市川学園で行われている新しい生徒主体のアクティブ・ラーニングの実践を報告する。



2. 2017 年度の実践を終えて

2017 年度、市川中学校 3 年生 1 クラスを対象に、学校貸与(一人一台)の第五世代 iPad(LTE モデル 32GB)、各種アプリケーション、Classi(Benesse)、デジタルカメラ、IC レコーダーを使用し、検証を行った。生徒アンケートを 2 回実施し、生徒が主体的・能動的に学ぶ力を養うクラス運営は可能であることが分かった。同時に、生徒が主体的に活動するためには教員が学校の状況・規模・目指す方向など、必要に応じた「しかけ」を提供する必要があることも分かった。

3. 検証から 2 年

検証翌年の 2018 年度、私がクラス単位で行っていた ICT を使ったアクティブ・ラーニングが、学年全体に広がった。例として、学年主任が Classi を使って生徒タブレットに伝達事項を連絡することで、朝の HR を短縮するとともに、情報は先生が HR で教えてくれるという受け身の姿勢から、情報は自分でタブレットを確認するという自発的な行動が、学年全体の生徒に浸透した。

そして 2019 年度、生徒の主体的・能動的な活動をより活発にするために 2 つの活動を行った。1 つ目は、学年を越えた課外活動の充実化を図るための ICT を使った情報共有である。学校には、年に 300 種類以上のコンテスト情報や課外活動のお知らせが届くが、職員室前の掲示板に貼ることにとどまり、生徒全員の目に触れる機会は少なかった。また、教員が申込み等を行うことが多いため、教員の負担も大きかった。しかし、外の世界を知り、見分を深めてほしいという気持ちは多くの教員が持っている。そこで Classi の掲示板機能

を使い、iPad を持っている生徒全員(中 3～高 2)をグループとした「課外活動連絡版」という掲示板を作成し、学校に送られてくる課外活動やコンテストの資料を PDF で載せ、情報を共有することを行った。このように、学校全体で生徒の課外活動を推進した結果、2019 年度の生徒課外活動数は過去最高の数となった。自分の興味関心のある活動を自分で選択できるため、今後は大学出願時に必要とされるポートフォリオを作成する時にも役立つと考えている。

< 掲示板の一例 >

校長 先生
2019/10/03 08:39

文部科学省・環境省が共催で「環境に特化したプレゼンコンテスト」を募集しています。
未来の環境リーダーを発掘、育成することを目的とした「Green Blue Education Forumコンクール」

本コンクールは、若い世代が、未来に残したいと考える自然環境について自発的に課題を探し出し、課題の解決に向けた方法を考え、そのアイデアを自分たちの言葉で伝えるコンクールです。
子どもたちが3人1チームとなり、「未来に守り、残したい自然や環境、創りたい未来」について、それぞれの考えを短い動画にまとめ、持続可能な社会づくりに必要な視点を共有します。
小学生から大学院生（6～25歳）（社会人でも）までの世代別3部門に分かれ、大切にしているモノや思い出の場所など、これからも守っていききたい、新しく生み出していきたいという想いを、数分の動画に込めて応募いただき、審査をします。
文部科学省、環境省との共催のコンクールとなっており、最優秀チームの中から【文部科学大臣賞】【環境大臣賞】が選出されるだけでなく、副賞として国内外のフィールドでの体験ツアーも用意されています。
【共催】文部科学省、環境省
【協賛企業】ANA、アサヒロジスティクス(株) ほかに
【コンクール審査員】養老孟司、C.W.ニコル、富永 愛 ほかに
<https://gb-ef.org/>

2 つ目は、教員だけが情報を発信するのではなく、生徒の情報発信を活発化させたことだ。文化祭の各団体のアピールの場、部活動の紹介といった情報発信に加え、様々な活動を行った生徒の外部イベントや課外活動に参加した生徒が、学年を越えて仲間を増やすことにもつながっている。

< 掲示板の一例 >

生徒名△△
2019/06/20 08:13

～おつり募金～
世界には、まだ水すら十分手に入らない人がいる。
今の世界では、2500円で一生分の水が確保できるのに、水が十分に確保できない国だってある。
だから、おつりで世界に水を届けよう！

目標金額 2500円 = 一生分の水

本日6/20から審査最終日の7/5まで、校内でおつり募金を実施します。
生徒向けに購買(文具、食品両方)のレジ横、教職員向けに職員室のリフレッシュルームに募金箱を設置しました。

みなさんのご協力をお願いします。

市川ユネスコサークルより

追伸: ユネスコサークルに入りたい、もっと活動について知りたいと思っている方、 **5年5組の△△** まで！



4. 2020 年度以降の活動に向けて

ICT を利用した生徒の課外活動が目に見えて拡大したが、中学 1 年時から生徒の主体的・能動的な活動をさらに充実させていくにはどうしたらよいかと考えた。そこで私の所属する教育研究部では、2020 年以降、中学 1 年からの課外活動推進のために 3 つの事業を計画している。まず 1 つ目は、学校に送られてくる 300 を超える外部コンテスト・イベントなどの課外活動をリスト化し、実施時期、対象、主催、形式などをまとめて、生徒にどんな時期にどのようなイベント・活動があるかを知らせることだ。自分の興味ある活動を知ったり、どんな形式の活動なのかを知ることで、外部のイベントへ参加しやすくなると考えている。

<リスト化の例>

通番	イベント名称	実施時期	締切	対象	主催	場所(2018年度)	形式
171	埼玉大学 工学部 応用化学科 サイエンススクール	10月上旬	9月中旬	中1～	埼玉大学工学部	埼玉大学工学部	体験
172	缶ワット 甲子園	10月上旬	9月上旬	高1～	理教が楽しくなる教育実行委員会	千葉工業大学習志野キャンパス	コンテスト
173	中央大学 体験授業	10月上旬	9月下旬	中1～	中央大学	中央大学後援会・多摩キャンパス	講座
174	私のまわりのOとX～環境フォトコンテスト～	10月上旬	10月上旬	中1～	環境省		コンテスト
175	ヤングリサーチャーコンファレンス	10月上旬	10月上旬	中1～	Tokyo Academics		コンテスト
176	慶應義塾大学 矢上祭	10月中旬	10月上旬	中1～	慶應義塾大学	慶應義塾大学日吉キャンパス	文化祭
177	京都大学体験型研修	10月中旬	8月上旬	中1～	京都大学ELCAS	新丸の内ビル	体験
178	インターナショナルロボットハイスクール	10月中旬	定員になり次第	高1～	日本ロボット学会	東京ビックサイト	コンテスト
179	天文宇宙検定	10月中旬	9月中旬	中1～	天文宇宙教育振興協会	東京近郊	コンテスト
180	ビジネスプラングランプリ	10月中旬	9月中旬	高1～	日本政策金融公庫		コンテスト
181	国連英検	10月中旬	9月下旬	中1～	日本国際連合協会	各会場	試験
182	衛星設計コンテスト	10月中旬	5月中旬	中1～	衛星設計コンテスト委員会	福岡市久留米	コンテスト
183	国公立大学医学部医学科説明会	10月下旬	10月下旬	中1～	駿台予備校	駿台予備校市谷校舎	大学紹介
184	京都大学野生動物研究はナニ？(遺伝子で何が分かる?)	10月下旬	10月下旬	中1～	京都大学野生動物研究センター	京都アカデミアフォーラムIn丸の内	講座
185	ジョニ・ニッセル杯(英語弁論大会)	11月上旬	8月下旬	高1～	上智大学言語教育センター	上智大学四谷キャンパス	コンテスト
186	風力発電コンペ	11月上旬	11月上旬	中1～	日本大学生産工学部	日本大学生産工学部	体験
187	人類はどこへ向かうのか	11月上旬	11月上旬	中1～	総合研究大学院大学	東京大学駒場キャンパス	講座
188	はやぶさ2最新報告と小惑星の科学	11月上旬	11月上旬	中1～	千葉工業大学	千葉工業大学スカラーキャンパス	講座
189	サイエンスダイアログ	11月上旬	11月上旬	高1～	国立理化学研究所	市川学園	講座
190	グローバルリーダーズ・プログラム	11月上旬	11月上旬	高1～	筑波大学		研修
191	Science Agents	11月上旬	11月上旬	中1～	科学技術振興機構	テレコムセンター(お台場)	講座
192	生物分類検定検定	11月上旬	10月中旬	中1～	自然環境研究センター	東京近郊	コンテスト
193	科学の甲子園	11月中旬	学校で募集	高1～	千葉県教育委員会	千葉県総合教育センター	コンテスト
194	全国中学高校Webコンテスト	11月中旬	7月上旬	中1～	学校インターネット教育推進協会		コンテスト
195	数学とコンピュータを組み合わせてできること	11月中旬	11月中旬	高1～	城西大学	城西大学紀尾井キャンパス	講座
196	人工知能がノーベル賞を獲る日、そして人類の未来	11月中旬	11月中旬	高1～	ICU大学	ICU大学	講座
197	周期表と物理学	11月中旬	11月中旬	中1～	科研費	東京大学本郷キャンパス	講座
198	高校生けんくコンテスト	11月中旬	11月中旬	高1～	日本工学院×AUTO DESK		コンテスト
199	高校生いすゞデザインコンテスト	11月中旬	11月中旬	高1～	日本工学院×ITOKI		コンテスト
200	ものづくり川柳コンテスト	11月中旬	11月中旬	高1～	日本工学院×武蔵工業大		コンテスト

2 つ目は、一貫校の特性を生かし、先輩が行った活動を後輩へ紹介することを計画している。2019 年 9 月に中学 1 年生から高校 2 年生約 1900 名へ課外活動に対するアンケート調査を行い、「これまでどんな課外活動を行いましたか?」「どんな内容でしたか?」「後輩へのおすすめ度は?」といった項目を聞いた。その結果をリスト化し、特に中学生が興味関心のある活動に既に参加・実施している高校生とマッチングを行うことで、興味はあるけれど活動に参加する仲間がいない生徒や情報を得たい生徒への情報提供ができる。さらに自校の先輩と後輩をつなぐことで、部活動という教員がある程度管理する活動ではない新たなコミュニティが生まれ、後輩は自分の興味関心のある活動に参加しやすくなり、先輩は同じ関心を持つ後輩に自分の経験を語ることができるようになると思った。

<高校 2 年生の活動履歴>

5	5	19	西日本豪雨ボランティア						
5	5	20							
5	5	21	個人留学(オーストラリア)	SSH研修(慶応大)					
5	5	22	WSC						
5	5	23	CANADA						
5	5	24	GEO(アントレプレナーシップ)	WSC	バーバメントディベート	白神山地学習			
5	5	25	OXFORD						
5	5	26	CAMBRIDGE						
5	5	27	フローレンスインターン	市川アカデミア	CANADA	BOSTON	白神山地学習	ハゼ釣り女子会講座	
5	5	28	個人留学(ビタテ:ガーナ)	次世代才能スキルアップ講座	医師体験	ボランティア(インターアクト)			
5	5	29	BOSTON						
5	5	30	OXFORD	学童ボランティア	高校生法律討論大会	ビジネスプラン	ボランティア(インターアクト)	高校生模擬裁判選手権	
5	5	31	NZ	SSHディ研修	ボランティア(インターアクト)				
5	5	32							
5	5	33	市川アカデミア	模擬国連	裁判傍聴				
5	5	34	個人留学(ビタテ:イギリス)	市川アカデミア	GEO(アントレプレナーシップ)	WSC	ジュニアアカデミー	ユネスコ活動	WSC
5	5	35	OXFORD	次世代才能スキルアップ講座					
5	5	36	市川市英語発表会	ボランティア(インターアクト)	ジュニア数学オリンピック	ビジネスプラングランプリ			
5	5	37	NZ						
5	5	38	CANADA	HLAB	SSHタイ研修				
5	5	39	BOSTON	児童ボランティア	薬剤師体験				
5	5	40	個人留学(留学ジャーナル:カナダ)						
5	5	41	保育園ボランティア	SSH千葉工大研修	女子高生のための東大セミナー				
5	5	42	個人留学(ビタテ:ケニア)	Camp Rising Sun(アメリカ)	市川アカデミア	GEO(アントレプレナーシップ)			
5	6	1	フローレンスインターン	京都大学ELCAS					
5	6	2	高校生模擬裁判選手権						
5	6	3							
5	6	4	個人留学(エマソン大:アメリカ)	個人留学(ブラウン大:アメリカ)	市川アカデミア	GEO(アントレプレ)	WSC		
5	6	5	エンパワーメントプログラム						

3 つ目は、活動をした後の記録・発表を行う機会を増やすことを計画している。現在市川中学高等学校では、課外活動の発表の場として毎年 3 月に口述発表会を全学年対象に行っている。そこで ICT 機器を使ってプレゼンテーションを作成し、発表活動の振り返りをさせている。基本的には生徒主体で口述委員会を立ち上げて生徒が運営しているが、ここで良い発表をするための事前準備やより良いポスターの作成、発表の添削を教員が行うことで、生徒のより良い振り返りができると考えている。

5. おわりに

2017 年度に 1 クラスで始めた ICT を利用したアクティブ・ラーニングは、学年、学校と広がり、現在は学校外の活動の推進という流れに変化している。ただし課外活動がゴールではなく、外の世界を知ることによって大学受験勉強まで時間がある学生に、なぜ英語や数学を学ぶのか、なぜ本を読んで教養をつけなければいけないのか、という意識付けをするとともに、自分の進路選択や将来を考えるために勉強だけではない活動をすすめてほしい。

「学びへ向かう力を育てる探究学習～高校生の卒業論文作成～」

中央大学附属中学高等学校 教諭

齋 藤 祐

今回は、文部科学省認定のSSHとして取り組んでいる課題研究「コンピテンシーベースの観点別評価体制の開発」を踏まえ、探究学習を通じて、生徒のコンピテンシーを測定し、育んでいく方法について報告する。



学力の3要素とChufu-compass

新しい学習指導要領において、学力の要素は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3点にまとめられている。コンピテンシーとは、学力の要素の1つ、「学びに向かう力」として体现され、生徒の学びを駆動するための学びのエンジンに他ならない。

そこで、コンピテンシーを測定する仕組みとして、“Chufu-compass”（チュウフ・コンパス）を開発した。“Chufu-compass”は、アンケートへの回答を通じて、資質・能力としてのコンピテンシーを、振り返りながら自己評価できる仕組みである。

“Chufu-compass”の全容は以下にまとめられている。

<http://chu-fu.ed.jp/topics/wp-content/uploads/2019/01/6d7424708078f66ef6202548e92abbbb.pdf>

【中央大学附属高等学校 Chufu-compass 行動特性（コンピテンシー）評価項目一覧】

2018年に行った第1回調査結果の概要については、以下にまとめられている。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/rrie/1/0/1_8/_pdf/-char/ja

【「学びに向かう力をどうハカるか？-コンピテンシー自己評価アンケート分析-」】

今回の発表は、2019年に行われた第2回目の調査結果を踏まえた内容である。2018年7月から2019年2月にかけての回答傾向の変化を学年別にまとめた。その結果、高校1年生は、自己評価としてのコンピテンシーにほとんど変化が見られなかった。

ここから、既存の教科教育は高校生の自己評価としてのコンピテンシーに何の影響も与えていないということがわかる。一方、高校2年生においては、すべての項目においてレベル3、自主的行動の回答率が上昇した。この理由を、高校2年時に設定された学校設定科目に求めることができる。

本校では、高校2年時の学校設定科目として、教養総合Ⅰを設けている。国内・海外の研修旅行を組み込んだPBL型の探究学習である。そこで、コンピテンシーアンケートの結果と教養総合Ⅰの講座別名簿を組み合わせると、講座ごとに、全く違った回答傾向になっていることが判明した。教養総合Ⅰのような探究学習によって、生徒のコンピテンシーの伸長を測ることができるということを、“Chufu-compass”によって「見える化」することができたのである。

探究学習は、問いを掘り下げていく醍醐味を体感することによって、楽しく知の探索を行うことができる。これこそが、学びに向かう力の本質に他ならない。生涯学び続けていこうとする意欲を生徒

に獲得させることこそ、本来の中等教育機関の使命のはずである。ひとりでも多くの「問い」が作れる人を育てたい。

探究マップLightの開発と実践

探究学習において高校生が苦手なのは、テーマ選びそのものではなく、選んだテーマにどのような「問い」を立てればいいのか、ということに尽きる。狭義の調べ学習で終わらせないためにも、テーマそのものを自分事として落とし込んで、具体的な問題提起まで持っていくことが必要だ。

そこで、探究マップの登場である。考える道具としての探究マップ自体は、10年ほど前に開発したものがある。長文の論文やレポート作成において、生徒の作るものは必ず序論と結論がねじれる傾向があり、これを防ぐことが開発のねらいだった。

今回、これまでの成果を引き継ぎつつ、もとの探究マップに複数あった論点を1つに絞り、さらに「問い」を掘り下げていけるように作ったのが探究マップLightである。

探究マップLightのPDFデータは以下にある。

<http://chu-fu.ed.jp/topics/wp-content/uploads/2019/12/f20d8d11671da501c6c8b7d520120ddc.pdf>

探究マップLightは、付箋を使って論証を整理しながら、左のフェーズで課題を抽出し、右のフェーズで解決方法を模索するつくりになっている。これによって、ほとんどの社会科学的なテーマを網羅することができるばかりでなく、実験を要する理系のテーマでも扱うことができるようになった。加えて、定期試験後の振り返りや大学進学に向けた志望理由書の作成などにも活用することができる。

文章をいきなり書き出す前に、一度「問い」自体を掘り下げてみるのが大切なのである。現在私は、高校生のコンピテンシーを高めていく方策として、まずは中学2年生に探究学習を施すという試みを実践している。国語の授業として、生徒が自身で設定した研究テーマを4,000字の論文にしてみようというものである。つい先日行われた、序論内容についての口頭発表の後、生徒はこんな振り返りを残している。

>探究マップLightを文章にしてつなげると、書いた内容が人に伝えるためのものになった。

>探究マップLightと自分の口頭発表原稿を見比べながら推敲するとわかりやすい文章になった。

「問い」を立て、更新すること。この営みを継続することによって、生徒は自身の資質・能力（コンピテンシー）を高めていけるはずである。学びに向かう力を測定しつつ、生徒のメタ認知を促していく授業実践をこれからも重ねていきたいと思っている。

「アクティブラーナー育成～人生を切り開く『力』を手にするために～」

佐野日本大学高等学校 教諭

岩 崎 浩 士

1. 本校の現状と課題

本校は日本大学の付属高等学校であるため、付属高等学校特有のおおらかさを持っており、与えられたことはまじめにこなすが、自主性に欠ける等の課題がある。また、現在都内私立大学の定員厳格化の波を受け、内部推薦も難化傾向にあるため、自ら学ぶ力を育み、確固たる学力を養成することが急務となる。



2. アクティブ・ラーニング導入の目的

本校でアクティブ・ラーニングを取り入れる目的は「自ら学べる生徒を育てる。」

「仲間と切磋琢磨し合いながら共に伸びる力を育てる。」「激動の時代を生き抜き、豊かな人生を創造する力を養う。」の3点である。

3. 研修会の実施

アクティブ・ラーニングを教員に浸透させるため、全教員対象の研修会及び若手教員対象の研究会を通年で実施した。

◆教員対象アクティブ・ラーニング研修会

信州大学学術研究院の三崎隆先生をお招きして「学び合いライブ授業」を実施。全教員参加で、概論の講義と演習によってアクティブ・ラーニングの基礎について学んだ。

◆若手教員対象のアクティブ・ラーニング研究会を通年で実施

年間8回、各教科、勤続年数の少ない教員2名を対象に実施。ファシリテーターとなる若手教員を3名選出し、運営を任せた。監修者として東京福祉大学の成田成先生及び宇都宮大学の石井和也先生にご協力頂いた。年間の流れは次の通りである。

①導入 ②演習1 ③講義1 ④演習2 ⑤講義2 ⑥講義3 ⑦演習3 ⑧まとめ

講義内容は、「アクティブ・ラーニングの定義」「アクティブ・ラーニング型授業の作り方」「目標設定について」「1時間の組み立て、発問について」「評価について」等。

演習については、「授業の悩みの共有と解決法に関する討議」「各自の教育観と理想とする教師像について」「小説『こころ』を使った深い心情理解について」等のテーマで実施した。

4. アクティブ・ラーニングによる授業実践

目標実施回数としては、5回の授業に1回程度を推奨している。まずは時間ではなく回数を意識してもらう。

●国語科の実践事例を示す。

オープン・クエスチョン型

小論文、ディベート、創作などオープン・クエスチョンを対象とする方法が最も実施しやすい。自由度が高く、生徒の意欲も高い。単元のまとめとして使用。

○実践事例①「海沿い、山沿い、平地といった地理的特徴を生かして 100 人規模の村を作ろう」というテーマでワールド・カフェを実施した。

○実践事例②「多角的ものの見方を身に付ける」ことを目標にフォトランゲージを実施した。

○実践事例③「以下の写真から 3 枚選んで、ショートストーリーを作ろう。」というテーマで写真を使ってイメージを広げて、創作練習を行った。

クローズド・クエスチョン型

評論の読解を、グループワークを通して行った。

①各自で解答を作成する。②ペアになって修正する。③グループで解答を作成し、板書する。

④他の班の解答の分析を行う。(◆分析の観点(1)解答の方向性の違いで分類。(2)解答の段階の違いで分類。)

⑤各グループで最終解答案を作成して口頭で発表する。⑥教師による解説を行う。

5. 評価について

学習活動に対する評価として、客観的評価については、河合塾の PROG・H テストを使用し、併せてループリックを使用した自己評価を実施する。また、e ポートフォリオも定期的に作成させる。

6. まとめ

もちろん、教員による温度差はある。それを解消するには、研修を通して、教員に関してもアクティブラーナーを育成していくしかない。また、なんでもいいからやればいいわけではなく、目的—実施方法—評価を意識して実施することを徹底したい。一方で精度や時間にとらわれすぎることなく、まずは、実践することが肝要であることは言うまでもない。

何よりも「生徒の明るい未来のために」という意識を持って取組んでいきたい。

教育課程部会
「総 括」

矢板中央高等学校 校長
五味田 謙 一

当部会に 100 名を超える多くの先生方にご参加を頂き、また専門委員の先生方、客員研究員の先生方にはご指導を賜り、感謝申し上げます。

当部会は「未来社会を切り拓く私学教育の実践」を研究目標として実施しました。まさに登壇された先生方にこのテーマに沿って、講演、実践発表を頂きました。改めてお礼を申し上げます。

まず、尚絅学院大学特任教授の水原克敏先生の「新学習指導要領・大学入試改革を踏まえた教育課程編成」を演題とした講演では、示唆に富んだお話を頂きました。各学校に持ち帰って頂き、是非、実践に移して頂ければと考えております。

続いて、聖心女子大学現代教養学部教育学科教授の益川弘如先生の「大学入試改革を踏まえた主体的・対話的で深い学びを実現する授業と評価のすがた」を演題とした講演では、学びの 3 要素を意識した思考力・判断力・表現力等の育成を目指すための授業についての具体的なお話を頂きました。早速、先生方ご自身の授業に活かすことができるのではないかと考えております。

午後の実践発表では、市川中学高等学校の笹尾弘之先生、中央大学附属中学高等学校の齋藤 祐先生、佐野日本大学高等学校の岩崎浩士先生の 3 名からアクティブラーニングや探究学習等、まさに直近の話題になっている学習テーマについての最新の実践例を発表頂きました。これからの学習指導の基軸となる取り組みで参考になることが多かったと思います。

それぞれの講演、実践発表は、これからの中等教育、授業改善につながる、大きな示唆に富む内容であったと思っています。参加された先生方には大いに刺激になったことと思います。

最後に、私どもの私学教育は、建学の精神に基づいて、これからも特色ある教育を展開して、生徒、保護者から信頼される学校として認知されてきたと思っています。新しい時代を迎えて、そして、変革の激しい時代に当部会で先生方の示唆に富んだお話や、取り組みを参考に、これから各学校で実践し、ますますの私学の発展につなげていくことをお願いして、総括とさせていただきます。



法人管理事務運営部会

日本の教育は今、大きな転換期を迎えている。それは生徒達の日々の教育に関わる大学入試改革や ICT 教育の導入だけでなく、現場で働く教職員の働き方に関わる大きな変革の流れである。2019 年 4 月に働き方改革関連法が施行され、社会全体で働き方の見直しが進められており、学校現場もその例外ではない。部活動等により長時間化する教職員の勤務の見直しとその管理や ICT 導入による事務の省力化なども含め、さまざまな改革が必要となる。教職員はワーク・ライフ・バランスを保ち、個人の時間をより充実したものとし、人間力を高め現場に生かしていくことが求められている。これからの教育現場における優秀な人材確保のためにも、全国から集まった参加者が叡智を出し合い、働き方改革に向けた取り組みに関する情報や考え方を共有し、私学から学校教育における教職員の働き方改革を発信していくことを目指したい。

- 1 研究目標 私学から発信する働き方改革
- 2 会 場 ホテル東日本宇都宮 3階 大和南
- 3 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
	15		45	45	15		30	30
10月18日 (金)	開 会 式	講演 I	事例発表	昼食・ 情報交換会		講演 II	報告	閉 会 式

4 内 容

8:30	受 付	機材担当：篠原 孝文・遠藤 浩史 (馬場 友治・嶋森 広樹・福田 英子 記録(写真)担当：荒木 敏幸・丹野 隆史 ・佐藤 美由紀・島田 真理子)	集録担当：長島 正志・宮下 智紀
9:00	開 会 式	司会：竹村 憲夫／記録：五月女 行典	
	1. 開式の辞		
	2. 運営委員長挨拶	法人管理事務運営部会運営委員長 上 野 一 典	
	3. 運営委員・専門委員・客員研究員紹介		
	4. 日程説明		
	5. 閉式の辞		
9:15	講 演 I	司会：竹村 憲夫／記録：五月女 行典 講師紹介：上野 一典	
	演 題 「私立学校教員の労務管理～専門職とブラック化のジレンマ～」		
	講 師 坂 田 仰 日本女子大学教職教育開発センター 教授		
10:45			

10:45	事例発表 （栃木県） 司会：船渡川 重幸／記録：中島 史子 テーマ 「デジタルキャンパス構想」 発表者 安藤 昇 元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT推進担当室長
11:45	昼食・情報交換会 司会：関 英一 記録：中島 史子・佐藤 美由紀 ● 8グループに分かれて、情報交換を行います。指定されたグループのテーブルにご着席下さい。各グループの司会進行は下記の通り、運営委員・専門委員が行います。 グループA 司会：上野 一典 グループB 司会：小倉 宏明 グループC 司会：竹村 憲夫 グループD 司会：船渡川 重幸 グループE 司会：馬場 友治 グループF 司会：嶋森 広樹 グループG 司会：五月女 行徳 グループH 司会：野尻 富太郎
13:15	講演Ⅱ 司会：船渡川 重幸／記録：中島 史子 講師紹介：小倉 宏明 演題 「これから求められる運動部活動とは —『運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン』を受けて—」 講師 嶋崎 雅規 国際武道大学体育学部 教授
14:30	報告 司会：竹村 憲夫／記録：五月女 行典 報告者紹介：上野 一典 テーマ 「働き方改革～わが校の実践例～」 報告者 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長
15:30	閉会式 司会：竹村 憲夫／記録：五月女 行典 1. 開式の辞 2. 総括 3. 専門委員長挨拶 法人管理事務運営部会運営委員長 上野 一典 4. 閉会の辞 法人管理事務運営専門委員長 工藤 誠一
16:00	解散

5 講師・発表者・指導員（順不同）

坂田 仰	日本女子大学教職教育開発センター	教授
嶋崎 雅規	国際武道大学体育学部	教授
工藤 誠一	聖光学院中学高等学校	理事長・校長
安藤 昇	元佐野日本大学中等教育・高等学校	ICT推進担当室長

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

上 野 一 典 宇 都 宮 文 星 女 子 高 等 学 校 校 長

副委員長

小 倉 宏 明 佐 野 日 本 大 学 中 等 教 育 学 校 校 長

委 員

竹 村 憲 夫 宇 都 宮 文 星 女 子 高 等 学 校 教 頭

舩渡川 重 幸 佐 野 日 本 大 学 中 等 教 育 学 校 教 頭

馬 場 友 治 宇 都 宮 文 星 女 子 高 等 学 校 事 務 長

嶋 森 広 樹 学 校 法 人 佐 野 日 本 大 学 学 園 法 人 事 務 局 次 長

五月女 行 徳 学 校 法 人 宇 都 宮 学 園 法 人 事 務 局

関 英 一 佐 野 日 本 大 学 中 等 教 育 学 校 総 務 課 主 任

中 島 史 子 佐 野 日 本 大 学 中 等 教 育 学 校 教 諭

佐 藤 美 由 紀 宇 都 宮 文 星 女 子 高 等 学 校 教 諭

7 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長

工 藤 誠 一 聖 光 学 院 中 学 高 等 学 校 理 事 長・校 長

委 員

服 部 泰 啓 学 校 法 人 信 愛 学 園 理 事 長

川 島 英 和 学 校 法 人 川 島 学 園 理 事 長

野 尻 富 太 郎 学 校 法 人 芝 学 園 常 務 理 事・事 務 局 長

客員研究員

正 村 幸 雄 学 校 法 人 鹿 児 島 学 園 理 事 長

法人管理事務運営部会 講演Ⅰ

「私立学校教員の労務管理～専門職とブラック化のジレンマ～」

日本女子大学教職教育開発センター 教授

坂 田 仰

本講演の講演要旨につきましては、都合により、掲載を差し控えさせていただきます。ご了承下さい。

法人管理事務運営部会 事例発表
「デジタルキャンパス構想」

元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT 推進担当室長
安 藤 昇

開発者がいれば大幅なコスト削減が可能になる

私は、もともと佐野日本大学高等学校で、入試のマークシートリーダー（マークシートを読み取るシステム）を自作して入試を効率化したり、校内の伝達システムや LMS（ラーニング・マネジメント・システム）を構築したりしていた。

校内伝達システムを外注すると、年間 100～200 万円のコストがかかる。学校に開発者が在籍していれば無償のソフトを使うことで、大幅なコスト削減が可能になる。こうした仕組みづくりを内製化できる人材が求められている。

外部にちょっとした修正を頼んでも、すぐには対応してくれないことが多く、1 行直すのに数万円から数十万円かかることも少なくない。システム業界の内情を知っている身からすると、知識を持った先生・職員をたった 1 人置くだけで、スピードと機動力、コスト面で大きなメリットがあり、この人件費を惜しむべきではないと考える。

タブレットを導入しても、何かを配信するためには月々一定の料金を支払う必要がある。学内で人材を 1 人育てることで、維持コストを抑えることができるのだ。

私が提唱した「デジタルキャンパス構想」も「いかにコストを削減するか」から出発した。最初は佐野日本大学高等学校のホームページの内製化に取り組んだ。大半の学校はホームページの制作と運営を外注し、多額の費用をかけている。佐野日本大学高等学校では 1990 年代半ば頃からホームページの内製化を進めた。

最初は業者に任せていたが、トップページを作成するだけで数十万円の費用がかかった。予算の関係で、2 ページ目以降は、すぐには作れず、トップページしかないホームページができあがった。これではいけないと、試行錯誤しながら現在のホームページの原型を作り上げた。専門家がいなくても、知識を持った先生・職員が 1 人いれば、こうした予算も削減できる。

佐野日本大学中等教育学校のウェブサイトは手づくりである。緊急連絡システムも以前は無償でやっていたが、現在は生徒から年間 1 人 10 円程度、負担してもらっている。

教員用のグループウェアは現在も使っている。企業が開発した物と、ほぼ同等の機能を備えているが、自家製で、お金は出ていかない。大きなコスト削減を実現した。

私が昔から目指していたのは「いつでも、どこでも学べる環境」の実現である。少子化の進展もあり、優秀な教員の確保も、なかなか難しい。世間で知られている講師陣、例えば、大手予備校講師の授業が動画で配信されたら、知識を詰め込むだけの教員は要らなくなる。

今の教育の欠点は記憶力が偏差値の基準になっていることだ。記憶力が良い人間が頭も良いとされてきたが、これからの社会に求められるのは想像力や自ら考える力である。もしかしたら、記憶する分野に関しては動画で済むのではないかと思う。

私は学習用の動画を制作し、合計で 1,400 本の動画をアップした。いろいろな分野に渡っており、生徒がコメントを書いてくれることもある。うれしくてコメントとして寄せられた質問や疑問に答える動



画をアップしている。

佐野日本大学高等学校での「いつでもどこでも学べる環境づくり」への取り組みは、平成 25 年度に全職員へタブレット端末を配布したことで始まった。

「佐野日大の特徴」という更新率の高いページがある。生徒が修学旅行先でタブレットやスマートフォンを使って撮った写真を載せるなど、頻繁に更新している。週単位・日単位ではなく、時間単位・分単位で更新している。これだけ頻繁に更新する学校は多くはない。即時性を非常に重視して取り組んでいる。

情報発信・配信の機動力を上げることで、生徒募集にも好影響を与える。「頻繁に更新しているから、この学校は活気がある」と判断するようだ。外注して更新が遅いサイトより、機動力があり、素早く更新するサイトのほうが多少見栄えは悪くても、好まれる傾向がある。

令和元年 10 月に上陸した台風 19 号のため、佐野市では秋山川が決壊し、市内に水があふれ、いまだに佐野日本大学中等教育学校・高等学校は休校状態である。ようやく、3 年生と 6 年生が通学できるところまで復旧した。

休校中、どのようにしていたかと先生達に聞いたところ、クラウドでプリントをデータ配信し、学習を続けていた。ここで即時性と機動力が生きたわけだ。学校が休校になったとしても、授業の進行は妨げられなかった。生徒全員にタブレットを持たせたことが生きた。台風や地震などの災害時、タブレットは連絡・掲示・自宅学習などに威力を発揮する。

文部科学省は 2025 年までに ICT を整備するよう、学校に求めている。ICT を活用した授業に取り組まざるを得なくなる。

先生方への導入教育をしっかりと行わないと、先生が使いこなすことができない。導入に旗を振った先生はタブレットの利用に長けていても大半の教員は、そうではない。想像力を発揮した、きめ細かなフォローが求められる。

法人管理事務運営部会 講演Ⅱ

「これから求められる運動部活動とは

—『運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン』を受けて—

国際武道大学体育学部 教授

嶋 崎 雅 規

学校は教育の場であって、競技活動の場ではない

日本の部活動は遊びを否定する。競技志向で道を究めることが求められる。私も昔は「遊びでやってるんじゃないんだ」と言っていたが、それは間違いであった。スポーツは遊びだ。遊びだから、とことん真剣にやる。だから楽しい。そこを間違っただけではない。

中学校では全国大会をやめたほうが良い。地方大会やブロック大会にとどめるべきである。小学校は都道府県内で良い。高等学校の甲子園や花園をやめるのは難しいが、基本は地域のリーグ戦でいくのはどうだろうか。

実際、サッカーの場合、東京はTリーグで、T1～T4のグレード別のリーグになっている。その下には各地域ごとのリーグが組織されている。Tリーグには、Jクラブの下部組織や民間のクラブチームも参加する。参加資格も緩やかで、文京区の中学校選抜なども出場する。部員の多いクラブは4チームが出ることもある。リーグ戦で勝ったり負けたりを楽しめば良い。高校3年生で受験を目の前にしていても、週1回、地域のリーグに出場すればストレス発散になる。部活動は、それで良いのではないかな。

みんなが日本一を目指すという構造を改革しないと、ガイドラインを出して規制したとしても、やはり勝ちたいがために隠れて練習する人が出てくる。そういう話をする、「日本の競技力向上はどうするのか」という反対意見が出るが、部活動は教育活動である。アスリートを育てるという競技の論理は教育とは別の論理で、切り離して考える必要がある。学校は教育の場であって、競技活動の場ではない。

OBやOG、地域の人も学校の部活動に参加すれば良い。3年生の夏に部活動を退くという慣習があるが、それだと引退後、スポーツに取り組む場が失われてしまう。運動部活動にOBやOG、地域の人を巻き込んでいけば、少人数で活動が成り立たないこともなくなる。OB、OGの中には指導力のある人もいるから、指導者がいないという問題も解決する。

生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備を進めている事例をいくつか紹介する。最初に筑波大学附属高等学校の蹴球部。サッカー部、フットサル部、女子蹴球部の3つの部門で構成されており、サッカー部は勝ちにこだわる姿勢に基づいた、競技志向の部員が集まったチーム。フットサル部は楽しく勝てるフットサルを目標にしており、女子サッカー部は主にフットサルの技術向上を目指している。

普段、活動は別々に行っているが、部としては蹴球部1つしかない。校内フットサル大会の運営、文化祭への参加などは3つの部門が一緒になって取り組む。人数が多ければ、ひとつの部活の中で競技志向のチームと楽しみ志向のチームと分けることも考えられる。

曜日ごとにいろいろな種目に取り組む総合スポーツ同好会

2つ目は総合スポーツ同好会。ある都立高校では、生徒の要望を聞くと「いろいろな種目に挑戦したい」「スポーツをしたいが、大会出場を目指すほどではない」「アルバイトが忙しく、部活に入れない」



「毎日は無理だが、週に 2～3 日なら参加したい」「フットサル、3on3 など新しいスポーツをやりたい」といったニーズがあった。

そこで考えられたのが総合スポーツ同好会。活動は週 5 日で、月曜日はフットサル、火曜日はバスケットボール、水曜日はソフトボールといった様々な種目に取り組んでいる。同好会の会員は原則週 1 回以上参加しなければならない。ソフトボールだけをしたい人は、その曜日だけ参加する。フットサルとバスケットボールをやりたければ両方に参加すれば良い。

3 つ目は世田谷区立東深沢中学校の体力向上部。平日週 4 日、朝の 45 分間だけ、馬跳びをしたり、校庭を走ったり、ミニハードルを使ったり、要するに体を動かしている。大人がフィットネスクラブに通う感覚で取り組んでいる。

4 つ目も、どちらかといえばフィットネス系で、神奈川県立厚木北高等学校のヨガ同好会。月に 1 度、外部から講師が来校し、みんなでヨガに取り組んでいる。月 1 の同好会があっても良い。

5 つ目は季節限定の部活動。甲州市立勝沼中学校ラグビー部の選手は普段はサッカーや野球、剣道部などで活動している。ラグビーは秋から冬のスポーツで、この時期は他の部活は大会などもない。そうした生徒が集まってラグビーを練習し、大会に出場する。

部活動の在り方として、様々なことが考えられる。柔軟な対応も求められる。そのためには負けたら終わりのノックアウト方式のトーナメント大会をやめて、勝ったり負けたりリーグ戦方式に変えていくことだ。そこが出発点ではないかと考えている。

整理すると、部活動は教育活動である。競技志向の活動は競技団体が考えれば良いことで、学校の外で行えば良いのではないか。そこへチャレンジしたい人は多少の時間とお金がかかっても仕方がないのではないか。スポーツを楽しむ場としての部活動が学校に残れば良いと考えている。

私立学校の場合、例えば、私がいた帝京高等学校でも野球とサッカーで名声を高め、偏差値を急上昇させた。戦略的に、そうした方針をとることを否定はできないが、一般的な学校・部活動が目指すべき方向性を述べさせて頂いた。

「働き方改革～わが校の実践例～」

聖光学院中学高等学校 理事長・校長

工 藤 誠 一

Google Suite for Education を活用、ほぼ完全にペーパーレスを実現した

働き方改革の川柳に「ペーパーレス、偉い人にはペーパーです」という句があり、偉い先生はペーパーレスを実践できないと皮肉っている。確かにペーパーレス化は容易ではないが、本校は Google Suite for Education というフォームや、その他のオンラインアプリを活用し、ほぼ完全にペーパーレスを実現した。本日は、その一部をご紹介します。

最初に紹介するのはフォームを使ったアンケート調査である。私学への進学理由を尋ねるアンケートを取った。

手書きのアンケートに比べると、格段に手間と時間がかからない。返信が来ると自動的に集計・処理し、棒グラフを作成する。自由記述欄も自動的に集計してまとめてくれるから、私たちは何もする必要がない。結果から、いろいろなことを読みとれば良いわけだ。

自由記述を読むと、「学校見学や文化祭などでの生徒の紳士的な対応に親子ともに魅力を感じた」「校長先生が校内で声をかけて下さり、直に接することができて感動した」といった指摘があり、受験生と、その保護者が何に注目したのかがわかる。

教職員のスケジュールも一目で確認できる。先生方はスケジュールのページを開けば、その日に休んでいる先生の名前が出ている。よく職員室の黒板に書かれているが、それが Google Suite に移行したと考えて頂ければ良い。職員室の廊下にもディスプレイが置いてあり、生徒も、それを見れば「今日は〇〇先生が休みだ」と確認できる。

学校の月次・週次のスケジュールも Google Suite 上で公開している。生徒が「今日は、どんなことがあるかな」と、その日のページを開けば、「中 3、高 1 は試験」「芸術鑑賞会の希望調査」といった情報を見ることができる。

同時に、今日はクラスメイトの誰が休んでいるのかもわかる。保護者は休みの連絡をスマートフォンやパソコンを使って学校へ送る。そうすると、一覧になって画面に表示される。本日、私は宇都宮市にきているが、スマートフォンを見るだけで誰が休んでいるか、誰が遅刻したかが、ひと目で分かる。学校の様子も分かるから、本日に限らず、出張などをした場合、時折スマートフォンを見て、必要なら学校に連絡を入れるようにしている。

教員が休日出勤する場合は「来月の休日業務報告」というところに記載フォームがある。やむをえず休日出勤する場合、あらかじめフォームに記入して届け出るようになっている。氏名、日曜日・休日に出勤する理由、日程、業務開始は何時か、業務終了は何時かといった情報を入れなければいけない。

休日出勤だから振り替え休日を、いつ取るかも書き込む必要がある。先生方には常々「振り替え休日が取れないのだったら、休日に仕事をするな」と命じている。私どもの学校では月曜日、木曜日、土曜日を研修日にしており、日曜日に出勤した場合、月曜日が自分の研修日であれば月曜日に休んでくださいと必ず振り替えをとるよう指導している。

夏休みの「日直日誌」も該当するページに打ち込む。氏名を書き、チェックを入れ、必要があればコメントを書く。入れた瞬間に処理され、他の先生も見ることができる。一覧も作成される。紙の日直日



誌は使わないことにした。

ペーパーレス化を進めることで、先生方の負担を減らせる

なぜペーパーレス化を進めてきたのか。こうしたコンピューターソフトを使うことによって、先生方の負担を減らすことが一番の目的だ。事務作業などの業務を減らすことで効率化・業務改善を進めたいと思ったからだ。先生たちを事務作業から解放し、その時間を教育の充実に使ってもらいたいと考えた。

本校の場合、保護者も生徒も全員アドレスを持っている。アドレスを見るだけで、どの生徒の保護者であるかが、すぐに判断できる。保護者のアドレスから来れば、すべて署名付きの文書だと見なしている。欠席や遅刻の届けも保護者のアドレスから来れば、それで良いとした。電話連絡ではない。

私どもの学校では紙の欠席届などは必要が無いので廃止した。その他の参加同意書や承諾書なども保護者のアドレスから来たものであれば、保護者が出したものとして認めている。先生方も事務作業を合理的・効率的に進めることができる。

昔、下校時に渡していたプリントも、こちらに移行させ、「インフルエンザの予防接種のお知らせ」等もメールで配信する。

Google Suite は教育機関が使用する場合、無料となる。保護者のアドレスを何件取得しても費用は、まったくかからない。私は今ここにいるが、同時に 1,350 人の生徒と、その保護者、百数十人の教職員に、一斉にメッセージを送ることができる。しかも一瞬で。こうした便利な「道具」を使いこなせば、教育機関にとって大きなメリットが得られる。

法人管理事務運営部会

「総 括」

宇都宮文星女子高等学校 校長
上 野 一 典

当部会での講演や事例発表については充実した内容であったと考えております。

午前は、日本女子大学教職教育開発センター教授の坂田仰先生の講演、元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT 推進担当室長の安藤昇先生の事例発表を行って頂きました。

坂田先生の「やりがい搾取」の話には、先生方のやりがいに乗じて、経営者が胡座をかいているという感じがして、これからは外部に出しても恥ずかしくないような教育環境、労働環境を作っていかなければならないと感じました。



安藤先生の事例発表では、生徒募集にまで話が及ぶような深い内容をお話し頂きましたが、ICT に関しては、遅れるわけにはいかないと感じました。特に小学校からタブレット等を自由に扱っている子ども達が中学生、高校生になって、先生方がついていけないような状況になりつつあります。本校でも昨年からは教職員全員にパソコンを持たせて、授業でも使うようにしています。Classi も導入しました。しかし、定年間近な教員もいて、戸惑っている状況であります。

昼食時に行われた情報交換会でも活発な議論が行われたようです。先ほど参加された先生に、もっと早く情報交換会を行ってくれば、親密になれて、語気が深まるのではないかという話をお聞きしました。今後の課題として頂ければと思います。

午後からは部活動の現状について、国際武道大学体育学部教授の嶋崎雅規先生から、具体的なデータを使った講演を頂き、聖光学院中学高等学校理事長・校長の工藤誠一先生からは学校の深い実情も含めた内容のお話を頂きました。いずれも、有益な内容で、たいへん感謝しております。

当部会で参加された先生方が得た知識・情報をそれぞれの学校にお持ち帰り頂き、是非、私学からの教育改革と働き方改革を進めて頂ければと思います。

進路指導部会

新学習指導要領では、『主体的・対話的で深い学び』が明確に示され、コンピテンシーが重視されている。コミュニケーション能力の必要性がさらに進み、高い次元での『対話力』が教師にも生徒にも、求められる。また、国立大学での推薦・AO入試枠の拡大や、「大学入学共通テスト」での外部英語検定試験の導入等の高大接続改革は、高校での進路指導のスケジュールに大きく影響し、「低学年での希望進路の明確化」に重点を置いた指導が求められている。

一方で、AIの発達は我々の想像をはるかに超えて進化を続け、生徒は、将来の社会を予想することが困難になっている。そのため、従来の学習指導、職業研究を重視した進路指導から、「学びたい学問」を重視した進路指導への転換が求められている。

そこで、当部会では、Society5.0とも呼ばれる新たな時代を担う生徒たちを育むキャリア教育や、情報化・グローバル化の時代の進路指導を、ベネッセコーポレーションによる最新の教育事情とともに、日本最古の大学である足利学校の教えの中からヒントを見つけることで考えていきたい。

1 研究目標 主体的・協働的学習からの人間力育成を目指す進路指導

2 会 場 ホテル東日本宇都宮 2階 羽衣

3 日 程

時間 月日	9 15	10 45	11 45	12 15	13 30	14 45	15 45	16 45
10月18日 (金)	開 会 式	基調講演 I	事例発表 I	昼食	基調講演 II	事例発表 II	閉 会 式	

4 内 容

8:30	受 付 (青木 凡枝)	機材担当：野澤 隆幸・武藤 幸祝 記録(写真・集録)担当：永井 美帆・太田 貴宏
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：須藤 敏哉／記録：永井 美帆・太田 貴宏 進路指導部会運営委員長 岡 部 宣 男
9:15		

9:15	基調講演Ⅰ 司会：須藤 敏哉／記録：永井 美帆・太田 貴宏 講師紹介：岡部 宣男 演 題 「教育・入試改革に向けた進路指導ストーリー～全国学校実践事例より～」 講 師 渡 邊 慧 信 株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育情報センター長
10:45	事例発表Ⅰ （栃木県） 司会：須藤 敏哉／記録：永井 美帆・太田 貴宏 テーマ 「探究を軸とする進路指導～SSHを生かして～」 発表者 青 木 凡 枝 白鷗大学足利高等学校 指導教諭
12:00	昼 食
13:00	基調講演Ⅱ 司会：熊倉 誠一／記録：永井 美帆・太田 貴宏 講師紹介：萩原 俊和 演 題 「足利学校の教育について」 講 師 市 橋 一 郎 史跡足利学校 研究員
14:30	事例発表Ⅱ （栃木県） 司会：熊倉 誠一／記録：永井 美帆・太田 貴宏 テーマ 「文部両道によるA0入試対策の指導」 ☆「部」は部活動の意 発表者 岩 崎 陸 宇都宮短期大学附属高等学校 指導教諭
15:45	閉 会 式 司会：熊倉 誠一／記録：永井 美帆・太田 貴宏 1. 開式の辞 2. 総 括 進路指導部会運営委員長 岡 部 宣 男 3. 閉会の辞
16:00	解 散

5 講師・発表者・指導員（順不同）

渡 邊 慧 信 株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー教育情報センター長
 市 橋 一 郎 史 跡 足 利 学 校 研究員
 青 木 凡 枝 白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校 指導教諭
 岩 崎 陸 宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 指導教諭

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

岡 部 宣 男 白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校 校長

副委員長

萩 原 俊 和 宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校 教頭

委 員

須 藤 敏 哉	白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校	教 頭
青 木 凡 枝	白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校	教 諭
武 藤 幸 祝	白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校	教 諭
太 田 貴 宏	白 鷗 大 学 足 利 高 等 学 校	教 諭
熊 倉 誠 一	宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校	教 諭
野 澤 隆 幸	宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校	教 諭
川 井 英 太 朗	宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校	教 諭
永 井 美 帆	宇 都 宮 短 期 大 学 附 属 高 等 学 校	教 諭

進路指導部会 基調講演 I

「教育・入試改革に向けた進路指導ストーリー～全国学校実践事例より～」

株式会社ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
渡 邊 慧 信

教育改革・新課程に向けて、「評価」の改善は大いに議論していかねばならない。評価を改善する際に、生徒の考え方・学び方を大きく変えるポイントになるのは、定期テストの評価の工夫である。高校生が最も重視し、学びに対してモチベーションが上がるのは定期テストである。模試に向けて勉強する生徒より定期テストに向けて一生懸命勉強する生徒のほうが圧倒的に多いと思われる。定期テストの評価を変えることで、生徒の学び方が大きく変わった例として広島県のある学校の取り組みを紹介したい。



この多面的な評価の取り組みはこの学校だけではなく、今や広島県の公立高校の多くで広がっている。こちらの学校では ICE ルーブリックをもとに、「I 考え・基礎知識」「C つながり」「E 活用・ひろがり」を単元を貫く問いとして設定した授業案を作成している。授業で育成した「E 活用」の力を測定するために、活用力問題を定期テストに 10 点分含めるようにした。3 年前、管理職の先生方と協議しながら定期テストに活用力の問題を入れ込んでいこうという話になったとき、ベテランの先生から「こんな問題を入れると、授業のやり方を大きく変えなければいけない」と不満まじりの声があがった。校長先生、教頭先生は、そうした意見を聞いて、「しめた」と思ったそうだ。まさに評価を、方向性を持って変えていくことで、授業が大きく変わる転機となったと担当の先生は話していた。

しかも活用力問題 10 点分を含めることで、生徒の学び方も大きく変わった。今まで定期テストでは授業での問題が出た。ところが、今では授業でやった『更級日記』ではなく、多くの生徒が初見の『蜻蛉日記』が出題される。

先生が一生懸命板書して、生徒は自宅で板書を丸暗記して、定期テストの日には忘れないように学校に来て、それをアウトプットした。ところが、暗記では活用力問題は解けない。学校の授業の中で、どのように学べば力が身につくか・読解ができるようになるかという姿勢が変わった。生徒の考え方・学び方に大きな変化をもたらした。評価を変えることで、授業や生徒の学び方が変わっていく。

青森県のある学校では評価の規準を「習得」「活用Ⅰ」「活用Ⅱ」で設定している。この段階に合わせて、授業の構成、評価をするためのテストの問題の割合を決めている。「授業で、どこまで教えるのか」「内容は、どうするのか」といったことを、きめ細かく決めているわけだ。この学校の生徒たちの授業が終わった後の感想もすごい。「今日は活用Ⅱのところの話が自分は腹落ちしなかった」など、生徒の普段の会話の中に「習得」「活用Ⅰ」「活用Ⅱ」という規準・ルーブリックが浸透し、学習の目標となっている。

これは先生方がルーブリックをイメージしながら、しっかりと授業を実践しているからで、定期テストや校内模試についても問題ごとに「活用Ⅰ」「活用Ⅱ」と、どの規準の問いかが記載されている。評価の際にも生徒に意識させているから、日常会話に「活用Ⅰ」「活用Ⅱ」といった言葉が出てくるのも当然といえる。

カリキュラム・マネジメントを実践しはじめた学校で、育成したい力と評価のポイントを作成したという

学校も多いが、大事なことは生徒自身が「どこまで到達できているのか」「どのような力を伸ばすべきなのか」ということがわかるような仕掛けづくりがなされていることだ。

授業改善で、「思考力・判断力・表現力」の育成に力を入れている学校は多々あるが、とりあえず各教科の先生方に任せるかたちで試行的に始めた学校が多く、評価の視点まで行きついていない。評価の規準を持ち、生徒自身が「今自分は、どの力を伸ばすべきなのか」がイメージできるようになったら、評価が機能しているといえるのではないか。

もう一つ、多面的な評価について大きな一歩を踏み出した学校の紹介をする。2019年度から大阪府のある学校が「観点別評価」に挑戦し始めた。私が訪問したのは2019年10月で、ちょうど前期が終わり、生徒に観点別評価を返し始めるタイミング。推進されていた先生の第一声は「生徒が3Dで見えるようになった」だった。今までは平面的、定期テストの結果が、生徒の評価の100%であったこの学校が、観点別評価を加えることで、生徒が立体的に浮かび上がって見えるようになったというのが先生の感想だった。「知識・理解」や「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」の割合については各学年各科目に裁量権を委ねているが、内規では、いくつかの決まりがあり、知識・理解は全体の評価の半分以下とし、バランスよく4観点を評価するようにしている。また定期考査による点数は8割未満、つまり2割以上は定期テスト以外の部分を評価対象に含めなければならない、ともしている。

この次期指導要領に向けていち早く観点別評価の導入にチャレンジしている該当校が、伝統校且つ、多くの難関大への進学者を輩出しているトップ校であることも注目点である。この学校の観点別評価への取り組みは、次期指導要領に対応するためではなく、日本のリーダーとなる子どもたちに、しっかりとした表現力を身につけさせたいという想いから出発した。定期試験では計りきれない表現力を、どのように評価、育成していくのかを念頭に置きながら、観点別評価に踏み切った。次期指導要領への対応ではなく、あくまでも新課程を機会点として、生徒の将来のために指導改革を推進したわけだ。

入試改革が目前に迫り、新入試への「対応」が求められるとネガティブに一般的には言われるが、あくまでも、新入試や新課程は、機会点としてとらえ、生徒の将来を創るための指導へと前向きに考えていきたいものである。

進路指導部会 事例発表Ⅰ

「探究を軸とする進路指導～SSHを生かして～」

白鷗大学足利高等学校 指導教諭

青 木 凡 枝

本日は、「探究を軸とする進路指導 ～SSHを生かして～」というテーマで発表する。教育改革をふまえ、総合的な学習の時間が総合的な探究の時間へと変わることから、探究学習と進路学習を組み合わせることで、少ない時間を有効に使って生徒たちに役に立つような時間にしたいと思った。そこで、SSHの経験から、進路学習に探究学習を取り入れることで、生徒たちが進路目標実現にむけて主体的に取り組むようになり、社会で求められる資質・能力も身につくのではないかと考え、新たに探究を軸とする進路指導計画をたて、取り組んだ内容についての発表である。



本校は足利市にあり、JR 足利駅の近くに本校舎、足利フラワーパークの隣に富田キャンパスがある。この2つの校舎は、ほぼ独立した形で教育活動を行っている。今回の発表事例は、富田キャンパスの事例となる。それでは、1.沿革について、2.教育目標とモットーについて、3.コース編成について、4.進路状況について、5.3年間の進路指導ストーリーについて、6.今後の課題についての6項目で発表する。

1. 沿革について

本校は、1915年（大正4年）、上岡長四郎が生徒17名で、足利裁縫女学校として創設した。1952年に足利学園高等学校となり、1961年（昭和36年）中学校を新設、1984年（昭和59年）英語科を設置するとともに、富田キャンパスが開校した。そして、1986年（昭和61年）小山市に白鷗大学を創設し、1994年（平成6年）白鷗大学足利高等学校・白鷗大学足利中学校に校名変更し、現在に至る。2015年（平成27年）に、本校は100周年を迎え、本年度で104年の歴史をもつ高等学校である。栃木県小山市に大学と幼稚園、足利市に高等学校と中学校のある学校法人となっている。

2. 教育目標とモットーについて

本校には、個性を伸ばし、国際的な視野を持つ人を育てるための3つの教育目標がある。“1.自立の精神の涵養、2.責任と義務の会得、3.豊かな良識と個性の伸長”この教育目標のもと、社会で活躍できる人材の育成を目指して3年間の教育活動を行っている。そして、これらの目標とともに、本校のモットーとして、「PLUS ULTRA」がある。「さらに向こうへ」という意味のラテン語である。これが、「Challenging Spirit, Pioneer Spirit」を持って世界を舞台に自己の人生を切り開いていく人間を育成するというHAKUOH SPIRITを象徴する言葉となり、本校のモットーとなった。

3. コース編成について

本校舎は、一人ひとりの個性を大切に文理進学コースと総合進学コースの2つのコースがある。富田キャンパスは、個性を伸ばし、希望する進路実現を目指す特別進学コースと進学コースの2つのコースがある。2つの校舎を合わせて、47クラス1,396名の生徒が学んでいる。

4. 進路状況について

表 1 は、本校の過去 5 年間の大学・短大などの合格状況をまとめた表で、2 つの校舎の合計になる。

次に、2017 年度入試から 2019 年度入試において、合格した主な大学を、国公立大学と私立大学にわけて、まとめたものが表 2 となる。

さらに、グラフ 1 は国公立大学の合格者のうち現役で理系大学に進学した生徒のグラフである。グラフ 1 の色のついているところが SSH の活動を 3 年間行った生徒の進学率である。少しずつだが、増加傾向にあり、SSH で行った探究活動が影響していたのではないかと考える。

5 進路状況について

	2015	2016	2017	2018	2019
国公立大学	44	63	71	43	58
大学校	1	0	2	2	2
白鷺大学	190	204	199	129	114
私立大学	221	264	244	164	207
短期大学	4	1	2	4	5

HAKUHO Univ. Ashikaga

【表 1】

5 進路状況について

2017～2019年度入試の主な合格校

国公立

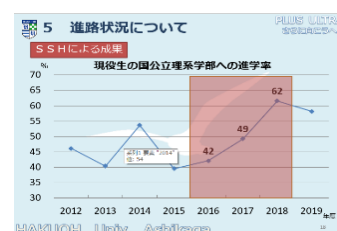
一橋大学・東京工業大学・東北大学・北海道大学・筑波大学・秋田大学（医）・富山大学（医）・横浜国立大学・電気通信大学・千葉大学・金沢大学・埼玉大学・宇都宮大学・群馬大学・茨城大学

私立

慶応義塾大学・早稲田大学・国際基督教大学・上智大学・東京理科大学・明治大学・青山学院大学・立教大学・中央大学・法政大学・学習院大学・同志社大学・立命館大学・獨協医科大学（医）

HAKUHO Univ. Ashikaga

【表 2】



【グラフ 1】

5. 3 年間の進路指導ストーリーについて

ここからは、本校の進路指導についてお話していく。本校の進路実践目標は、「生徒一人ひとりが、主体的に進路目標を実現できるように、学校全体でサポートする」である。進路実践目標を踏まえ、本校の進路指導の取り組みを、以下の 3 項目にまとめ、お話していく。

- (i) 進路指導ストーリー表
- (ii) 手帳を利用した学習サポートの取り組み
- (iii) 進路探究学習について（総合的な探究の時間に行う探究活動を、進路指導にも生かす取り組み）
- (i) 3 年間の進路指導ストーリー表について

進路指導ストーリー表とは、進路目標を実現させるために、学習と進路に関することをまとめたもので、学年ごとに作成した。本校の進路指導の中心となるものである。図 1 が、進路指導ストーリー表のイメージ図で、各学年目標とその学年目標を実現するための 4 つの実践目標があり、これを実現することで学年ごとに求められる学力と能力が身につくように作成した表である。表 3 が生徒配布用の表である。



【図 1】

6 3年間の進路指導ストーリー

★ 3年間の進路指導ストーリーの概要

実践目標を実現するためのツール

- ・手帳によるものはうすい青色
- ・探究活動によるものは黄色

HAKUHO Univ. Ashikaga

【表 3】

1 年生では、手帳を利用して学習習慣や学習スタイルの確立をすることで、学力の向上をはかること、進路基礎探究講座を通して、一步踏み込んだ深い学習を意識するとともに、基礎知識と技能を身につけ、生徒一人ひとりが主体的に文理選択できるようにすること、それらを導けるように考えた。

2 年生では、進路探究講座を利用して、学習では探究型学習へと移行し、進路学習では学部で学ぶ内容を知るための学部研究ができ、思考力・判断力・表現力も身につけられるよう指導したいと考えている。また、進路目標実現にむけて、学びの質を向上させることで、入試の基礎学力もつけてほしいと考えている。

3 年生では、様々な活動や進路探究学習などの経験を、学習や進路選択に生かして主体的に物事に取り組むことと、多くの人と学びあいを通して、人間力の向上を図るとともに、学びの計画書、受験のための学習計画を作成し、目標実現できるよう指導したいと考えている。

進路指導ストーリー表を生徒たちに配布し、目標の実現にむけて、生徒それぞれが主体的に取り組め

るよう指導するとともに、職員間では進路指導の指針として、共有したいと考えている。

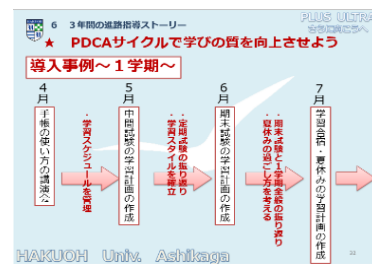
(ii) 手帳を利用した学習サポートの取り組み

「手帳で PDCA サイクルを身につけて学びの質を向上させよう」

学習習慣の確立と学びの質の向上を図ること、さらに成功体験を通して自己肯定感を高めることで自己の向上を図ること、この 2 つを目的とした手帳の利用についてお話しする。私の経験で恐縮だが、担任をしていた生徒たちには、必ず手帳でスケジュール管理をするように指導してきた。管理がしっかりとできている生徒は、時間の使い方がうまく、学習バランスも良いため、効率的な学習をしていた。そして、学力向上にむけて試験ごとの振り返りも的確にできおり、着実に実力をつけていた。このような成功体験を重ねたことで自己肯定感が高められ、目標を実現できたのではないかなと思う。

これまでの経験や大学入試改革などを考慮し、本校では、日記を書くようなイメージで自主的に手帳の記入に取り組んでほしいと考え、1・2 年生全員に手帳を持たせた。計画から達成までのプロセスを認識し、自己肯定感を得ることで、PLUS ULTRA（更なる向上）を図るためのツールとして活用してほしいと考えている。PDCA サイクルを回す学習活動について、定期試験や模試などの日程に合わせて、1 か月ごと 1 週間ごとの Plan をたて、Do 実行したことを記入し、Check & Action 振り返りを行うように指導している。計画をたてる時期や学習内容、時間の使い方などについて、自主的に見直し、改善ができるようになることも期待している。図 2 が、導入事例になる。このように試験の日程に合わせて、計画をたて学習したことを実行し、振り返りをするように指導している。

まだ、始めたばかりの取り組みで、自己の日々を記録する習慣のない生徒も多く、試行錯誤しながら支援を行っているところである。また、生徒に手帳の記入を習慣化させるために、進路指導ストーリー表に、1 から 7 の数値をつけた 7 段階の自己評価欄をつくった。



【図 2】

評価内容は、「計画をたてられたか」、「計画をたて実行したことが記入できたか」など簡単な項目である。この自己評価を試験ごとに行い、1 年間の自己評価の推移や平均を算出し、学年比較をすることで自分の成長を認識し、自己肯定感も得られるため、手帳の活用を促進できるのではないかと期待している。職員間では、この 7 段階の自己評価を定期試験や模試の結果以外の学習成果として、また、多面的評価などの参考として共有したいと考えている。

(iii) 進路探究活動について

ここからは、進路サポートの一つ、進路探究活動についてお話しする。探究学習では、生徒自身による問題解決的な学習活動が、発展的に繰り返されていくことで、深い学びへとつながる学習が求められている。本校で SSH の活動をしているときに、私は、生徒たちに、この探究学習で求められているような深い学びへとつながる学習をさせたい、その学習を進路指導にも活かしたいと考えていた。本校では進路学習のプロセスに探究活動を取り入れた独自のループをつくり、「KAMOME 進路探究ループ」と名付けた。1 年生は「学問研究ループ」、2 年生は「学部研究ループ」、3 年生は「進路実現ループ」という名称をつけ、1 年・2 年・3 年とつながっていくループをつくった。それぞれのループにおいて、進路学習のプロセスに探究活動を取り入れた講座に取り組むことで、生徒の進路目標を実現できるように意図した。入試制度が変わる現 2 年生の入学時からの取り組みであるため、今回は学問研究ループと学部研究ループの発表となる。最初に、進路基礎探究講座を中心とした学問研究ループについてお話しする。学問研究ループは、「教科の学習で学んだ知識・技能の定着を図ることや文理選択のための学問研究

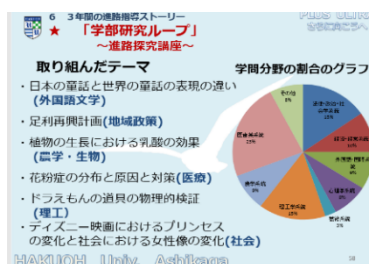
となるように」と考案した。本校の学問研究についての取り組みは、進路に関する冊子を活用したワークシート学習、大学見学やオープンキャンパスへの参加の奨励などである。2018年度は、これに加えて進路基礎探究講座として、総合的な学習の時間に数学科と協力してデータ分析のレポート作成を学年全体で実施した。学年全員163名が、1グループ3～5名で、クラスに関係なく興味のある分野で42グループを作り、レポートを作成した。提出されたレポートを、数学科で検討し、内容が良かった4グループに発表してもらうことにした。写真1は生徒発表の様子である。

データ分析は様々な分野の学問にも対応するため、生徒たちはこの取り組みを通して、幅広い分野の学問を知るきっかけになったのではないかと自負している。これらの活動後のアンケート結果から、自主的に学習することの意義や協働して学ぶことの大切さに気づき、様々な視点で課題を発見し、自分の立てた仮説を検証し、結論を導き、考察することで、新たなものの見方やその分野の学問にも関心を持てたことが窺われる。また、進路基礎探究講座は、知識・技能を身につけ、探究型学習を意識させるきっかけとなり、学問研究として文系理系選択の指針になったと、生徒アンケートから立証できたのではないと思う。

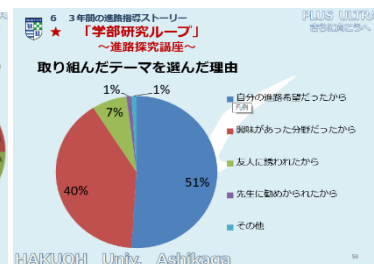


【写真 1】

次に、進路探究講座を中心とした「学部研究ループ」についてである。学部研究ループでは、これまでの学問研究を生かして、学部についての探究学習をすることで、思考力・判断力・表現力を身につけることを意図した。進路探究講座として、2019年度の2年生全員162名を、文系理系に分けて進路希望の学部ごとに分け、1グループ3～5名の、39グループに分けた。各グループの課題は、大学で学ぶ内容から選んでもらうことにした。図3が、取り組んだテーマの一部と学問分野の割合のグラフである。図4は、テーマを選んだ理由である。



【図 3】



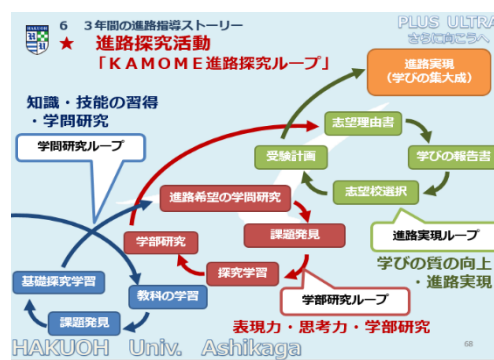
【図 4】

将来に役立てたいと考えた生徒が多数を占める一方で、目指す学部がはっきりと決まっていなかったために、教師からすすめられた課題に取り組んだ生徒もいた。

「進路基礎探究講座の活用について」のアンケート集計結果から、昨年の進路基礎探究講座の経験が役に立ったという生徒が多くおり、昨年の探究のプロセスを実践的に生かせるようになっていることがわかる。また、レポートの内容についても1年生の時のものと比較すると、一歩踏み込んだ内容となっていたものも多くあった。「この研究内容を将来に活かすかどうか」のアンケートの結果から、「かなり活かした」生徒の割合が増えたことは、意識的に進路選択をしている生徒が増えたことが窺える。一方、「活かすつもりがない」が増えたことは、「自分のやりたいこととは異なっていた」ということをはっきりと認識した生徒の存在を意味している。今回の「進路探究講座」は、生徒の進路選択に対して有意義であったと言えると思う。次は、自分が選んだ分野の研究をしてみて、どのように意識は変わったかというアンケートにおいて、多くの生徒が課題分野に関して大変興味が増したという結果を得ることができた。これらの結果からも、進路探究講座は学部研究としての意義をはたしているといえる。指導した担任教員からは、「生徒たちが、今回の進路探究講座を通して、学部で学ぶ内容を確認し、他の学部につ

いての知識も獲得した様子が見られた。学部の研究にとっても役に立ったのではないかと」という声が聞かれた。今後は、生徒の自己評価や先生方の評価だけでなく、客観的な評価も導入することで、進路探究学習の充実をはかり、学習指導や進路指導に活かしていきたいと考えている。さらに、学力の3要素を身につけるためのツールの1つとして、位置付けたいとも考えている。

今後は、「KAMOME 進路探究ルート」に沿って、進路探究活動を行うことで、生徒の進路目標が実現できるような進路指導をしていきたいと考えている。進路基礎探究講座と進路探究講座では、SSHの課題研究と発表会のノウハウがとても役に立った。SSHの課題研究のような深い内容にまでは到達できなかったが、探究活動を通して得られた学びは、今後の学習や進路選択に活かせるものと確信している。以上が、本日の演題である「探究を軸とする、進路指導」の2年生までの実践事例となる。今後は、これまでの、KAMOME 進路探究ルートに沿った、学問研究ルート・学部研究ルートに引きつづき、学びの報告書、自己の強みを活かした受験計画書を作成する進路実現ルートを実施する予定である。図5に示したKAMOME 進路探究ルートでは、1年生の学問研究ルートで、知識・技能の習得と学問研究を、2年生の学部研究ルートで、表現力・思考力の育成と学部研究を、3年生の進路実現ルートで、学びの質の向上と進路目標実現を、このように学年ごとのルートを実施していくことで、進路実現つまり学びの集大成へと導くことが、本校の進路指導方針である。



【図 5】

6. 今後の課題について

(1) 進路指導ストーリー表について

計画立案直後で、準備不足で実施できていないものもあるため、各学年との連携をとりながら内容を精査して、生徒たちが目標実現に向けて主体的に取り組めるような表にすることで、生徒たちにとっても教員にとっても活用しやすいものへと改善をしていきたいと考えている。

(2) 手帳の運用について

手帳の利用については、「手帳を書かない」、「手帳を利用しているが記入しているだけになっている」などの課題がある。これについては、生徒が自主的に活用できるよう、先ほど述べたような自己評価の充実や効果測定の結果を反映させることで、改善をはかっていきたいと考えている。

(3) 進路探究学習について

アンケート結果なども考慮し、他のグループの発表を聞くことやアドバイスをうけることで、新たな気づきや、さらに深い学びへの結びつくよう改良を重ねていきたいと考えている。

以上が、本校の進路指導の取り組みとなる。

中世足利学校の再建

足利学校としてある程度明確になるのは、永享 11 年（1439）に関東管領上杉憲実が、衰退した学校を再建してからである。なお、それ以前にも足利荘内に学校が存在するといわれているが足利学校という名称の学校なのか、足利荘に所在する学校であったのかは、不明である。上杉憲実が学校に関与した内容は、以下のとおりである。

①学校の責任者として、円覚寺僧・快元を足利学校の庠主として招聘。憲実と快元の関係は明確でないが、憲実の菩提寺である臨済宗伊豆・国清寺が鎌倉円覚寺の末寺であることから、円覚寺僧である快元とつながりがあったとする。また、既に当時易学で著名であった快元を漢学校である足利学校に相応しいとして招いたとする説もある。

②永享 11 年（1439）に五経注疏本（周易を除く）・唐書が憲実により寄贈されている。何故憲実の寄贈とわかるのかは、「野州足利学校置五経疏本条目」による。憲実が五経疏本を足利学校に寄贈した時に、取り扱い注意書を遺したものである。また、寄贈した書籍に「此書不許／出學校閫外憲實（花押）」などの憲実の識語があることからわかる。

③上杉憲実は文安 3 年（1446）に学校の校則ともいえる「学規三条」を定めている。たとえば、第 1 条は足利学校で講ずべき書籍の列举などが記載されている。

④運営基盤の確立。上杉憲実は土地を寄進することで、その土地の税分を学校の運営資金となるようにした。



中世足利学校の教育内容

足利学校の学問内容を知るには、「学規三条」がある。第一条では学習すべき科目が列举している。それらは「三註四書六経列荘老史記文選」であり、仏典・国典を排し、儒学を中心とした漢籍の教育内容であったことを知ることができる。しかしながら戦国期に入ると、占筮・兵学・医学など戦国の世が要求している学問内容になっていった。即ち実学中心の学問となり、それゆえに多くの学徒が集まったという。いわゆる軍師育成の学校であるが、ほかに学校で学んだ学識を故郷や出身の寺院に戻り、地元の子弟に教えた学徒も多いのではないかとする研究者もいる。教育者の育成、いわば師範学校の役割である。また、数は少ないが学徒の入学前後の経歴を見ると臨済宗の僧で外交関係の仕事をしているものがある。所謂外交僧である。より広い知識を求めて必要な漢籍のある学問施設へ遊学することが行われ、その一施設として足利学校もあったと考えられる。

中世足利学校の学習形態

永正 6 年（1509）8 月に足利学校を訪問した連歌師柴屋軒宗長が著書『東路のつと』で以下のように述べており、その学問的崇高な環境を垣間見ることが出来る。

「足利の学校に立ち寄れば、孔子・子路・顔回、この像をかけて、諸国の学徒かうべを傾け、日ぐらし居たる体は、かしこく、かつあわれに見え侍れり」（一部読み易いように原文を改変）

学徒が自学自習の学習をしているところを描写していると思われる。自学自習とは読書（教科書を読みその内容を会得する。重要な箇所は自分のノートに引き写す。）や書写等の学習形態である。書写という学習形態とは、教師からあたえられた教科書を、一字一句間違えないように、自分のノートに正確に写し取る学習方法である。自学自習の根本である。書き写していくので、一字一句を丁寧に読むことになり、文字や語句

を深く理解でき、書き写しが完了すれば、貴重なテキストが新たに一部増える。ほかにも講義、輪読、素読などの学習方法があったと思われるが、書写は優れた学習方法である。第七世席主九華の時代（今から 450 年位前）に生徒が解らない文字があると紙に書いて結んでおくと、次の日に読み方や意味が書いてあった、ということから「字降松」（かなふりまつ）と呼んでいる。現在の松は、黒松で 5 代目か 6 代目である。

また、学徒数は、3,000 人とも、800 人ともいわれている。室町時代後期造立の孔子像の体内墨書には「学徒八百余人」と記述されている。入学条件としては、学徒に対しては入学時に僧形になることを求めたが、それ以外の身分的な規制は無いようであり、かなり開かれた教育機関であったと想定できる。

何故、足利に足利学校が作られたのか

第 1 に、足利は交通の要衝である。古代から足利は東山道駅路の駅家が置かれた土地で、武蔵国の国府へ向かう武蔵路とも接し、近くに渡良瀬川や利根川の水上交通も利用できる土地であった。そうした利便性は中世に引き継がれていた。全国からの学徒が参集しやすい。第 2 に、すでに学園都市であったので、学問的環境があった。足利学校の前身となる教育施設をはじめとして、寺院の学問所・談義所などが足利荘内に散在していたのではない。東国では足利学校のような漢学専門学校を設立するのに必要な漢学教授の識者は、禅僧以外にはいない。それには鎌倉の地が便利であるが、周囲の有力な禅学機関に影響を受け、同じような儒禅併学の学校になる恐れがある。そのため鎌倉五山の地から離れる必要があった。第 3 に、治安のよい土地であった。足利將軍直轄の地でありその後関東公方が支配し、周辺の武将たちが手出ししにくい土地である。即ち聖域とまでは言えないが比較的安全な土地であった。第 4 に、この地・足利は主人源姓足利氏の本貫地であり、名字の地である。しかも憲実が関東管領として、鎌倉公方と室町將軍の和解のために奮闘し、その証として鎌倉府が横領していた土地を幕府へ返還させた地であり、当人にとっても思い入れのある土地であった。そして、何よりも平和のシンボルともいえる教育機関を足利に再建することで、権力争いに敗れ、自分の手で死に追いやった主人鎌倉公方足利持氏の供養になると思ったのではない。また、比較的安全な場所に学校を建てることにより、末永く継続することを期待し、かつ大切にしてきた漢籍が末代まで残るようにと願ったのであろう。さらに、席主・学徒たちを無防備な僧形にさせることにより、周辺の領主たちに無害であることを示させ、学校の安全を図った。

衰退する近世の足利学校、明治 4 年に廃校、そして現在の足利学校

戦国時代末期には関東の領主層が豊臣秀吉の小田原攻めで混乱する中、天正 19 年（1591 年）には足利学校の書籍が第 9 代席主三要とともに豊臣秀次によって京へ運び去られる事件が起こる。その後、秀次が文禄 4 年（1595 年）に追放されると、三要は徳川家康を頼り、書籍を足利学校へ戻すことに成功する。以降、足利学校は家康の庇護を受け、江戸時代の足利学校は 100 石の朱印地を与えられ、徳川幕府の保護を得るが、その代償として自由な活動に制限が生じ、しかも幕府の文教政策や宗教政策の流れに乗り切れず、衰退していく。江戸時代末には、官軍に恭順した足利藩主戸田忠行は、明治元年（1868 年）学校再興のため管理を委任されるよう朝廷に嘆願し託され、藩学求道館を足利学校に併置したが、明治 4 年（1871 年）廃藩置県で藩知事が廃され、学校事務は足利県へ次いで栃木県に引き継がれたが事務は行われず、学校は事実上廃校になった。

現在は敷地の西半分には江戸時代前期に建てられた大成殿・三門があり、旧図書館などの新しい建物もあるが江戸時代からの様相をよく残している。一方、東半分は明治時代からの小学校敷地を全面発掘調査して、江戸時代中期頃の方丈・庫裏・書院や庭園、堀土塁などを平成 2 年（1990）に復元している。平成 23 年（2011）には復原 20 周年記念行事などを開催し、ほかに新しい行事・文化活動として足利学校アカデミー、教養講座、各種の論語素読会、書初め会、百人一首かるた会、絵画大会、クイズラリー、お茶席などを行っている。また、江戸時代から続く孔子を祀る釈奠や曝書（古書籍の虫干し）などの年中行事も継承しており、これらの行事は足利の町の風物詩となっている。年間参観者は 18 万人ほどである。

「文部両道による AO 入試対策の指導」

宇都宮短期大学附属高等学校 指導教諭
岩 崎 陸

1. 発表の背景

本校は 1900 年に創設され、創設者が築いた建学の精神である「全人教育」に基づき、一人ひとりの個性を重んじ、それぞれに優れた能力・特性を伸ばしていくことを重んじている（図 1）。その中で運動部活動は、本校を志望する生徒の重要な志望理由の一つであり、生徒の約 4 人に 1 人が所属している。生徒が主体的に活動に関わり、日々仲間と共に研鑽を積み、対外試合に挑むことなど多様な活動を通して、本校の「一人は一校を代表する」生活目標を実現する場となると共に、思考力・判断力・表現力を磨き、「主体的、対話的で深い学び」に通ずることができる。そして、運動部活動生がリーダーとして模範的な存在となることで、クラス経営への貢献も期待される。さらに、2020 年東京オリンピックを契機として、スポーツ産業の更なる活性化も期待されており、スポーツに関わる職業も今後増えていくことから、運動部活動に取り組むことで、生徒の進路を切り開く要因となっていくことも想定される。そこで、本校では、教科学習と部活動を一体とした「文部両道」を推進している。



図 1 本校の概要と建学の精神

2. 文部両道と AO 入試

一方で、高大接続改革に伴い、大学入学者選抜もこれまでの知識偏重の選抜方式から、受験生を多面的・総合的に評価する従来の AO 入試に比重が移ることが想定されている。このような入試においては、大学研究に基づいた志望理由や、生徒が高校時代に主体的に取り組んだ活動を、小論文、プレゼンテーションによって表現する能力が必要となる。本校においては、既に生徒のポートフォリオを一元的に管理する Classi の導入や、国語科の小論文学習・模試、社会と情報の授業におけるプレゼンテーション実習などの取り組みが行われている。しかし、難関大学の AO 入試は高度化しており、このような入試に挑戦する生徒をサポートしていくには、担任と連携し、より組織的、計画的な体制・取り組みが必要である。

生徒が運動部活動に取り組むことで、24 時間の生活をデザインし、学習・スポーツという「1 日完結

型」のサイクルを積み重ねることが、運動部活動においても、本人の進路の実現、人間的成長においても、高い成果をもたらすと考えられる。だが、生徒が運動部活動に取り組むことで、時間的、身体的な負荷が高くなり、本分である学習に影響をきたすという課題がある。また本校の生徒の学習習慣や、学習熟度には、入学時点で差があり、授業での理解を積み上げていくためには、一人ひとりにきめ細かい学習サポートが必要である。

3. 具体的な取り組み

上記の背景、課題を鑑み、本校では、運動部活動生を対象に、「文部両道」の取り組みを推進するため、以下のような活動を行っている。今後はより「文」「部」の連携を深める活動を継続していく予定である。

I. 対話型 e ラーニング教材「すらら」を用いた自主学习

一人ひとりのペースや学力に合わせて学習できる e ラーニング教材である「すらら」により、授業の予習を行うとともに、学習習慣の定着を促している。一人ひとりの進度に応じて、課題を掲げ、担当教員からは、取り組みに対してのコメントを行っている。

II. 部活動横断で行うフレッシュマン研修

運動部に所属する 1 年生から希望者を募り、学習や進路について語り合うグループワークなどに定期的に取り組ませる特別活動を行っている。「すらら」の学習進度を全体で確認するとともに、生徒に大切にしてほしい様々なテーマを設定し、年 8 回、基本的に放課後、講義及び生徒間のディスカッション・発表を行っている（図 2）。



【図 2 部横断で行うフレッシュマン研修】

III. スポーツを切り口とした海外研修旅行

スポーツを通して体験学習や各国の伝統文化に触れることにより高い見識と技能を磨く場として、海外研修旅行を実施している（図 3）。国際的な視野を広げ、欧州の学術・スポーツ・伝統文化の神髄を学ぶ機会となっている。



【図 3 ドイツサッカー海外研修旅行】

進路指導部会
「総 括」

白鷗大学足利高等学校 校長

岡 部 宣 男

(宇都宮短期大学附属高等学校 教頭)

(教頭 萩 原 俊 和)

それぞれの先生方、基調講演、事例発表、学ぶものがたくさんあったと思います。特に印象に残っているものは、青木先生、渡邊先生のお話の中にもあった「自己肯定感」です。日本の場合はどうしても自己肯定感が低いということが知られていますが、誉めて伸ばす教育というものが苦手で、欠点や弱点を直す教育が盛んなため、どうしても自己肯定感が低くなるのではと思っています。私も生徒の面接をします。ベネッセの Classi や模試の結果、推移、ポートフォリオを利用しながら面談をしていますが、保護者の方々になかなか理解を頂けなくて、進路が決まらないから一緒に相談しようとする、「先生には愛がない」などと言われて、困っていました。私はその生徒が将来について何も見つからないということで、「あなたはすごく眼鏡が似合うし、元気の挨拶をするから、視能訓練士の資格を取って、眼鏡屋さんやあるいは病院等に勤めればどうか」といったその生徒の強みを考えてアイデアを出しました。すると、保護者の方に「眼鏡屋に勤めるために育てたのではない」と言われて理解して頂けませんでした。保護者の方々への対応は先生方もご苦労されているとは思いますが、やはり、私たちは生徒の強みを知らせて、本人を伸ばしていけば、自信を持った子どもになっていくと思っています。私自身の話で申し訳ないですが、素直に謙虚になってもらいたいと思って実行しているのが、挨拶をしようということで、朝の1時間程で1日1500回、「おはよう」と言っています。その「おはよう」も、「〇〇さん、おはよう」と名前を付けて「おはよう」を入れて、もう一言付けています。本校の生徒には500名くらいしか言えません。後の1000名は、本校の校舎前は広い歩道があって、たくさんの人が通るので、出勤する人、お爺さん、お婆さん、保育園児、小学生、他校の生徒たちで、中には名前も覚えている子どももいます。その朝の挨拶で、まだ大きな変化はないのですが、1つだけ変わったのが、私のそばに来ると、特に高校生が、イヤホンを外してくれて、私が何を言うか聞いてくれるようになりました。



本校は中学校と高等学校を併せて2,800名の生徒がいます。クラス数も80クラスあります。私は毎朝、1クラスずつホームルームに登場します。1つのクラスに1年間で3回くらい登場します。その時に今の時期なら、台風の話や卒業生の話をするとか、その時に感じた事を話すようにしています。本校の先生にも3年生のクラスに毎日、順番に行って、進路指導の話をしてもらっています。なぜそのようなことをしているかというと、渡邊慧信先生の基調講演の中でもお話が出ましたが、先生はいろいろな顔を持っており、すなわち、様々な荷物を持っています。生徒指導が得意な先生、進路指導が得意な先生等、全部得意という先生はいないので、できるだけ先生方の荷物を減らそうということで、学校全体に関しては私の方で、進路に関しては別の先生、生徒指導はまた別の先生等、1クラスに大勢の先生がホームルームに行くことによって、「進路の話ならこの先生に相談すればいいな」というような分散化を今、行っています。将来的には1年1組の担任は〇〇先生というような固定担任制というものを廃止していき、新しい学校づくりをしていこうかと考えています。

全国の私学は、当部会の中でも話が合ったように、建学の精神に基づいて、素晴らしい教育を行っています。ご参加頂いた先生方の学校から当部会で蒔かれた種を育てて頂き、大きくしていけば日本の教育も変わっていくことと思っています。

生徒指導部会

高校では、人間として調和のとれた育成を目指して、生徒の心身の発達の段階や特性に応じて教育活動を展開している。その中で、学級担任をはじめ教科担当や部活動顧問など、生徒に関わる教員は個々の生徒の状況に応じた指導方法の工夫をしてきた。また、校務分掌の各組織も専門的な知識を背景に生徒に働きかけを行ってきた。

しかし、学校単独では解決が困難な課題が増えている現状がある。心に問題を抱えた生徒へのスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーによる働きかけ、引きこもりがちな生徒への自立支援、ネット利用に起因したいじめや犯罪被害など、外部との連携が不可欠である。

当部会では、人間力を高めるために学校と家庭・地域・関係機関が緊密に連携を図り、組織的、継続的に生徒の支援に取り組んでいく生徒指導のあり方を考えていきたい。

1 研究目標 学校を取り巻く関係機関との連携による生徒指導

2 会 場 ホテル東日本宇都宮 2階 福寿

3 日 程

時間 月日	9 15	10 30	11	12	13	14 30	15	16 45
10月18日 (金)	開 会 式	基調講演Ⅰ	講演Ⅰ	昼食	基調講演Ⅱ	講演Ⅱ	閉 会 式	

4 内 容

8:30	受 付 (近田 達規・久保 暢雄)	機材担当：西牧 宏之 記録(写真)担当：石渡 隆二 集録担当：芥川 至
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：村松 宏教／記録：芥川 至 生徒指導部会運営委員長 菅 井 康 政
9:15	基調講演Ⅰ 演 題 「スクールカウンセラーとの連携」 講 師 丸 山 隆	司会：馬場 敏彦／記録：芥川 至 講師紹介：佐山 泰朗 栃木県カウンセリング協会 理事長
10:30		

10:30	講演 I 司会：馬場 敏彦／記録：芥川 至 講師紹介：村松 宏教 演 題 「不登校ひきこもり支援における教育機関との連携」 講 師 中 野 謙 作 栃木県子ども若者・ひきこもり総合相談センター 「ポラリス☆とちぎ」 センター長
12:00	昼 食
13:00	基調講演 II 司会：馬場 敏彦／記録：芥川 至 講師紹介：佐山 泰朗 演 題 「スクールソーシャルワーカーとの連携」 講 師 土 屋 佳 子 日本社会事業大学 客員准教授
14:30	講演 II 司会：馬場 敏彦／記録：芥川 至 講師紹介：村松 宏教 テーマ 「高校生のネット利用の現状と官民連携によるトラブル防止」 発表者 福 田 恭 広 株式会社スキット 営業部営業1課 課長
15:45	閉 会 式 司会：村松 宏教／記録：芥川 至 1. 開式の辞 2. 総 括 生徒指導部会運営委員長 菅 井 康 政 3. 閉会の辞
16:00	解 散

5 講師・発表者・指導員（順不同）

丸 山 隆	栃木県カウンセリング協会	理事長
土 屋 佳 子	日本社会事業大学	客員准教授
中 野 謙 作	栃木県子ども若者・ひきこもり総合相談センター	「ポラリス☆とちぎ」 センター長
福 田 恭 広	株式会社スキット 営業部営業1課	課長

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

菅 井 康 政 足利大学附属高等学校 校長

副委員長

佐 山 泰 朗 佐 野 清 澄 高等学校 校長

委 員

馬場敏彦	足利大学附属高等学校	教頭
村松宏教	佐野清澄高等学校	教頭
鈴木昇	足利大学附属高等学校	教諭
西牧宏之	足利大学附属高等学校	教諭
芥川至	足利大学附属高等学校	教諭
近田達規	佐野清澄高等学校	教諭
久保暢雄	佐野清澄高等学校	教諭
石渡隆二	佐野清澄高等学校	教諭

1. “学校の異物”から脱却するために必要なこと

私は高校教員として人生の3分の2くらいを過ごした。生徒の話を、いろいろと聞くうちに「相談」というものに目覚め、臨床心理士になり、スクールカウンセラーをやるようになった。高等学校のカウンセラーがメインだが、中学校を見たこともあるので、両方の立場を理解できるのが私自身の「強み」とであると自負している。

最初は、「栃木県精神保健福祉センター」で病理性の高いタイプの子どもや大人を面接する人がスクールカウンセラーとして来ていたが、そのカウンセラーが急に勤められなくなった。「誰か行けないか」というので、「私が行きましょう」と手を挙げた。実際に行ってみて、学校組織の中でスクールカウンセラーは「異物」であることを実感した。

実はそれが文部科学省の「狙い」なのかもしれない。学校という「かたまり」の中に外部の知見・視点を入れること、いいかえれば教員がつくった「枠組み」の外から、提言したり考えたりしてくれることを期待して、スクールカウンセラーという仕組みが導入されたのだと考える。

しかし、「異物」であるだけに、教員との接触はままならない。初めて行ったとき、職員会議に呼ばれても紹介だけされて退室させられる場合が少なくない。会議に参加することは、まずない。

結局のところ、教員にとってスクールカウンセラーは、学校の一員ではなく「週に一度、外から学校に来る人」という認識でしかなかった。職員会議でなくても、教員とちょっとした打ち合わせをする機会くらいあってもいいと私は思ったのだが。

過去に1例だけ、職員室に私の机と席を設けてくれた中学校があった。先生方が寄ってきて、世間話をするようになった。お互いに次第に打ち解けて会話しているうちに、自然と「実はウチのクラスに、こういう生徒がいるのだが」という話が出てきた。

教員と日常的な接触ができると、彼らの声が聞けるようになる。私は飲み会にも積極的に参加して先生方と仲良くなるようにしている。「連携」などと難しい言葉を使うまでもなく、要は「やあ先生」「あ、おはようございます」と言い合える関係になることが一番であるからだ。教員にとってスクールカウンセラーが「身内」のような存在になり、心の専門家として信頼してもらえれば、若い先生方から頼られる存在にもなれるだろう。



2. 一次援助、二次援助、三次援助、それぞれにおける連携が必要

スクールカウンセラーの仕事には「一次援助」「二次援助」「三次援助」がある。

一次援助は、すべての児童・生徒を対象にした援助で、たとえば「構成的グループエンカウンター」という、ゲームなどを使ってクラス全体が早く打ち解けるように促したりすることだ。

クラスを組んだ後の早い時期に、開放的な雰囲気にしてやるのがよい。これが得意なスクールカウンセラーは多いので、自身のクラスのホームルームなどで実施してもらえないか相談するとよい。クラス

づくりにスクールカウンセラーを大いに活用してほしい。

二次援助は「サイン」が出始めた子どもへの対応を指す。例えば、連休や夏休みのような、長い休みが明けると不登校が始まりやすい。1学期に人間関係がうまくいかなかった子は特に危ない。だから、1学期の欠席状況を見ておくのは重要だ。

そして、夏休みの最後あたりに、危なそうな生徒に顔を見せておくと、その後が全然違う。それでも、始業日に頑張って登校したが、「やっぱりダメだった」という場合はある。だから、私は教員時代には9月初めに3日続けて欠席したら、必ず家庭訪問をするようにしていた。学校によって事情はいろいろだろうが、職員室にカウンセラーの席があると、そうしたこともやりやすくなる。

三次援助は学校を休み始めた子どもを、どのようにして復帰させるかの対応のことだ。復帰プロセスについて「別室登校から始めようか」「一度面接してからにしようか」などと話し合う。それがスクールカウンセラーの仕事であるわけだが、そのためには教員と気楽に話し合える場があることが重要だと感じている。

子どもとの面接はコーディネーターの教員を通した上で行われることが多い。コーディネーターには教員としての能力に長けた人、他の教員から信頼が厚い人を充ててほしい。そうすれば間違いなくスムーズに進む。「連携」を重視するなら、そういうことまで考えて頂きたい。

今は担任するクラスの生徒のことを教員1人が抱え込む時代ではない。いろいろなタイプの子どもがいるが、指導における大前提は、ひたすら子どもの気持ちをわかってあげようとするところである。

叩いたり、怒鳴ったりしたりしては絶対にダメである。そうはいっても、心は目に見えないから難しい。だから、何かあったらすぐに対応できるよう、ふだんから教員、管理職、スクールカウンセラーの間で「報・連・相」を密にして、役割を分担することが重要だと思う。

生徒指導部会 講演Ⅰ

「不登校ひきこもり支援における教育機関との連携」

栃木県子ども若者・ひきこもり総合相談センター 「ポラリス☆とちぎ」 センター長

中 野 謙 作

私は25年前に栃木県に来て塾を開いた。そして2人の生徒に出会った。

一人は、高等学校入学後、挫折し、生活態度が荒れ、家出した。私はその頃から気にかけていたが、結局救い出すことはできず、ついには違法行為を行って少年院に送られた。出所後、真正面から向き合うようにした甲斐あって、更正している。実生活ではいろいろあったが、今も時々連絡を取っている。

もう一人は暴走族に入っていた中学生で、同じく違法行為で少年院に送られた。出所後、高等学校入学の意志を見せたので学習支援して合格した。高等学校は結局途中で辞めてしまったが、現在は某会社で頑張っている。

私はこの2人との出会いをきっかけに、子ども・若者の支援活動に携わるようになった。さまざまな取り組みを経て「一般社団法人 栃木県若年者支援機構」を立ち上げ、今に至っている。

当法人の取り組みとしては、まず「ポラリス☆とちぎ」（栃木県子ども・若者・ひきこもり総合相談センター）の運営がある。宇都宮市中心部にあり、あらゆる相談を受ける支援の「入口」としての役割を担っている。

0～39歳の子ども・若者の面倒を見る「子ども・若者総合相談センター」（内閣府が設置を促進）と「ひきこもり地域支援センター」（厚生労働省が設置を促進）が一体になった、全国でも先進的な施設である。「出口」となる就労については「とちぎ若者サポートステーション」や「中間的就労」を紹介する「しごとや」で支援している。

塾を開いていたので、学習支援には特に力を入れている。発達障害児に特化した学習塾「ANDANTE」と、生活困窮者の学習や高等学校中退者に高卒認定試験の学習を支援する「寺子屋」がある。基本レベルから教えているが、学ぶ機会を逸した困窮世帯の子どもや高等学校中退者は実は学習に飢えている。「教える・教えられる」の関係は信頼を築きやすい。

「キッズハウスいろどり」という施設も運営している。子ども食堂、外国をルーツとする子ども対象の日本語教室、寺子屋、「居場所」の提供といったプログラムを実践しており、子どもだけでなく、親や地域の人も来る。ここで皆と食卓を囲んだ体験が、新たな「縁」を結ぶ。母親の「居場所」になっていることも意義が大きく、重要性を実感している。

ここはスクールソーシャルワーカーや高等学校の先生、済生会宇都宮病院のメディカルソーシャルワーカー、ケースワーカー、宇都宮市の生活保護課や国際交流協会と連携している。特にソーシャルワーカーの協力は大きく、連携の“鍵”になっていると感じている

一人の主人公を囲む横の連携が必要

子ども・若者支援の最終的なゴールは「就労」である。とはいえ、精神発達の遅れ、ひきこもり、対人関係の不得手など、働く上での障壁がある子ども・若者が一般就労をすることは難しい。「ならば私たちが、ワークシェアなどで、彼らにできる仕事をつくろう」。そう考えたことが、9年前に当法人を立ち



上げた一番の動機である。

先ほど「中間的就労」について触れたが、これは「一般就労と福祉就労の中間」ということで、単なる就労訓練ではなく、報奨を伴う。国は一般就労できない人を中間的就労につなげようとしているが、私は中間的就労から一般就労につなげるほうが重要だと考えている。

当初は法人内部の仕事を与えていたが、できたことを誉めても反応が希薄だった。しかし、協力を得て地元の農家や企業の仕事を与えてみると非常に反応がよく、やりがいを感じていた。

もともと彼らは誉められたり認められたりすることが少ない。それだけに、内部のわれわれより外部の人から誉められ認められるほうが、心に響いて職業意欲や継続につながることを実感した。それで、地域のいろいろな企業・農家との連携を強めるようになった。

子ども・若者支援は横の連携が必須である。教育、福祉、労働、地域、場合によっては司法まで含めて情報を共有する。ひとつの機関で抱え込んでダメということは強調しておきたい。そして当人を主人公として、必要なのは生活支援か、学習支援か、自立支援か、就労支援かをきちんと見極め、それに見合うステージに上げていくことが必要である。

子どもの問題行動には必ず理由がある。しかし、理由がわかったところで、結局は処罰され排除され孤立する。ひきこもりも周囲との関係性を失った孤立である。ただし、孤立した子は「つながり」を求める。関係を切らず守り続けるには、継続的に話をするなどしてつながりを保つことが必要である。

それに、地域内にさまざまな居場所や学ぶ場所、話す場所、生活支援や就労につながる場所が求められる。その広がり子ども・若者支援につながる。昔はそうした場所がたくさんあった。これらを再構築して連携することが必要ではないか。

「スクールソーシャルワーカーとの連携」

日本社会事業大学 客員准教授

土 屋 佳 子

困った子は困っている子—スクールソーシャルワーカー導入の意義

私が教育相談の世界に入ったのは、今から20年近く前である。最初に登壇された丸山隆先生が関与する、栃木県カウンセリング協会で学び、中学校の相談員となった後、中野謙作先生が栃木県高根沢町に立ちあげた、不登校の子どもたちのための支援施設「ひよこの家」のスタッフとして勤務するなどしてきた。その傍らスクールソーシャルワークを学び、国で制度化される前に高根沢町のスクールソーシャルワーカーとなった。結果として県内初となったわけだが、当時はスクールソーシャルワーカーが現在のように認知される存在になるとは、まったく思っていなかった。



国がスクールソーシャルワーカー活用事業を公教育に導入したのが2008年、現在で10年ほど経過したところであるが、私学において配置している学校は、未だ少ないと思われる。2012年の「日本私学教育研究所紀要」第48号所収の「私立中学校における教育相談活動への取り組み」には、スクールカウンセラーの配置率が86.6%である一方、スクールソーシャルワーカーは1.6%とある。7年前のデータなので現在では増えていると思うが、私学に特化した詳細な調査は行われていないのではないだろうか。

ところで、現代の子どもたちをめぐる問題には、例えば貧困や地域内での孤立、多文化共生、LGBTQ、ジェンダーギャップ、DVや虐待など、社会的な課題や多様な価値観の変化が複雑に絡み合っている。ソーシャルワークとは、人が生活上抱える課題を個人の問題のみに限定せず、社会と人間との間の不適合状態と広く捉え、社会の制度や仕組み等を活用しながら援助活動を行うことである。この考え方でいけば、学校で「困った子・保護者」と思われている児童生徒や保護者が、実は「一番困っている子・保護者」だとの視点が出てくる。また、児童福祉において大切な理念である「子どもの最善の利益」のためには、子どもを中心に置いた支援体制の構築が必要となる。学校の内外で関係する支援者同士（もちろん、ここに教員が含まれる）を適切につなぎ、連携を促進するスクールソーシャルワーカーが制度化された意義はこうした点にあると思う。

アセスメントは「協力・連携・協働」のベースとなる

次に、学校とスクールソーシャルワーカーとの連携について、大切な考え方や留意点などをお伝えしたい。ソーシャルワーカーは、以下のようなプロセスを重視して仕事をしている。①（発見）学校からの要請を受け、支援を要する子ども・保護者と出会う（直接相談を受けることもある）、②（受理面接／問題把握）相談の内容から状況の全体像や環境を把握する、③（ニーズ確定／アセスメント）当人が何を希望しているか、うまくいっていないのはなぜか、どんなことが得意なのか等、いろいろな角度からアセスメント（見立て）を行う、④目標を定め、関係者と「協力」してプランを立てて実行する、⑤プランの実施状況を確認し、振り返りを行う。この流れは、マネジメントでいうPDCAサイクルに近いが、プランの前のアセスメントが不十分なままだと、支援計画そのものが違う方向へ行ってしまうので

注意が必要だ。

また、アセスメントは、スクールソーシャルワーカーが単独で行うものではなく、関係者と「協力」「連携」することで多角的な支援を編み出すことができ、効果を発揮する。スクールソーシャルワーカーは外から学校に来て問題をすべて解決するスーパーマンではなく、支援のフロントに立つのはあくまで教職員であると考えている。私たちは、教職員をエンパワメントし（力づけるという意味）、サポートすることに重点を置いている。それには私たちワーカー側が学校組織を理解することも大切である。

連携のキーは「判断」、そして連携したいこと（目的・内容・支援期間）の明確化

支援が進み、学校内だけでは対応が難しいとなったとき、関係機関との連携を進めることになる。そのときのキーは「判断」、そして「連携したいこと（目的や内容、支援の期間の見通しなど）の明確化」である。判断の基準や、誰が判断するのかといったことがあいまいになると、ある種の丸投げが生まれてしまうため、注意が必要だ。

また担任や学年主任、養護教諭、スクールカウンセラーなどが話し合っ「関係機関との連携が必要なケース」と判断しても、管理職がゴーサインを出さなければ、その先には進まない。どうなったら関係機関と連携するか、実際にはケースバイケースになることも多いかもしれないが、やはり、日頃から判断の基準を考えておくことが理想である。

顔の見える関係づくりが安心・安全な場としての学校づくりにつながる

スクールソーシャルワーカーの意義は認めながらも、私学への導入には懐疑的な見方をする方もいるかもしれない。だが私学の方が、その意思決定プロセスから考えて、導入されれば普及が進むのは速いのではないかと思う。そのためにも、まずはスクールソーシャルワーカーの職務について基本的な理解を深めて頂き、校内体制を整えてほしい。それは結果的に、よりよい学校・学級経営に寄与することになるのではないだろうか。

そして、子どもを尊重し権利を擁護することへの理解と、地域との関係を深めて頂きたいと思う。スクールソーシャルワーカーとともに、地域や関係機関と「顔の見える関係」を築き、学校づくりに取り組んで頂ければ幸いである。

生徒指導部会 講演Ⅱ

「高校生のネット利用の現状と官民連携によるトラブル防止」

株式会社スキット営業部営業1課 課長

福田 恭 広

言葉の捉え違いで、仲間内のトラブルが後を絶たない

文字だけで自分の考えを正確に伝えられるかといったら、なかなか難しい。会って話をしているときとは全然違う。音声や動画もあるが、SNS はどうしても文字が中心である。学校などで直接話す場合は、その場の空気や話している人の表情・口調が分かる。

例えば、「バカ」という言葉にしても、笑いながら「バカだなあ」というのと、真剣な顔をして「バカ」と怒鳴るのでは相手に与える印象は、まったく異なる。

後者であれば「本当に怒っているからまずい。これ以上、挑発したり、ちゃかしたりするのはやめよう」と自制が働くが、ネットで「バカ」という2文字が出てきたら「ふざけるな」ということになりかねない。

冗談かもしれない。本当にバカにされているのかもしれない。ネットの文字だけのやりとりでは勘違いが起きやすい。「バカだなあ」のつもりで「バカ」と送ったら、相手は「急に『バカ』って何だよ。こっちは本当に心配して、へこんでたのに」と腹を立てて、いざこざの原因になってしまう。実際に LINE の会話でも、よく起きている。

言葉は誤解を生みやすい。こちらが書いたことに対して友人が急に機嫌が悪くなって、「今日は寝る」と返事が返ってくる。言葉の捉え違いで、仲間内のトラブルが後を絶たない。勘違いから言い争いが始まる。

「バカって何だよ」「冗談だよ。冗談もわからないのか」といった会話になってしまう。「いきなりバカはないだろ」とエスカレートする。ネットや SNS は、どんどんエスカレートしていく傾向がある。止める人もいない。学校で口論になって、いよいよ殴り合いになりそうな時は、誰かが「やめろ」と仲裁したり、先生が止めに入ったりする。

ネットには止めに入る人がいない。カッとなると、売り言葉に買い言葉の応酬になる。むしろ、ネットのトラブルが起こると周りは、どちらかに加勢したり、あおったりすることが多い。結果的に収拾がつかなくなる。仲のいい友人だったが、ネットのトラブルから暴力を振るい、大ケガをさせた事件もあった。

顔見知りの友人ですら、そうしたことが起きるのだから、顔も知らない、会ったこともない人とのコミュニケーションには、いろいろな危険が付きまとう。高校生女子の6割以上は知らない人ともコミュニケーションを取れるといっているが、落とし穴が待ち受けている。

SNS の利用者が低年齢化し、高校生や中学生にも広まったことで増えてきたのがネットでの冗談や、からかい発言によるトラブルである。ネットで冗談は通用しない。書かれた側にとっては冗談なのかどうかも分からない。子どもたちは軽い気持ちで「死ね」「殺すぞ」「爆破する」といった言葉を使う。トラブルが生じないはずがない。

その責任は誰が取るか。「爆破する」と書かれたら、対策をとり、損失が発生する。当然、被害届けを出す。犯人が子供だろうが、大人だろうが関係ない。子供の責任は保護者がとるしかないが、学校にも影響が及ぶかもしれない。



トラブル防止のためには学校、家庭、地域、公的機関の連携が重要

では学校は、どうすればいいか。極論をいえば、学校だけが頑張っても難しい。学校、家庭、地域、公的機関などが連携しなければいけない。学校は根本的なところで児童・生徒に対するモラル教育を徹底し、併せて保護者に対する啓蒙活動を実施する必要がある。ネットやSNSの危険性を訴え、子供たちを、どのように守るかを周知徹底していく。家庭の役割も重要だ。トラブル防止は保護者にかかっている。子供たちを管理してもらわないといけない。ルールづくりが重要だ。小学生、中学生に対しては家庭内でルールをつくり、それを守らせていく。

ところが、高校生になると保護者の意識が薄くなり、スマートフォンを渡しっぱなしのケースが多い。しかし、むしろ高校生だからこそルールづくりは重要である。人間関係が広がるので、より危険性は高まるからだ。保護者は子どもたちが、どのようにスマホを使っているのかを把握する必要がある。保護者の注意を喚起するために、学校は啓蒙活動に力を入れなければいけない。学校で生徒や保護者に啓蒙する際、「あれをしてはいけない」「これには近寄らないほうがいい」と話しても、なかなかピンとこない。具体的なトラブルの事例を示して、「こんなに危険だ」と訴えるほうがインパクトはある。

外部機関も大いに活用してほしい。様々なかたちでサポートし、情報を提供している。フィルタリングや設定など技術的な部分でトラブルの発生を予防するとともに、ネットパトロールも実施し、トラブルの兆候を見つけて警告を発することもある。ネットトラブルの事例や、その対処法、啓蒙の仕方などの最新情報も提供している。専門のケアも外部を利用した方が良い。カウンセリングは学校の先生だけでは限界があり、ネットが絡むトラブルは意外に深刻で対応が難しい。専門の資格を持ったプロに任せるべきだ。

生徒指導部会
「総 括」

足利大学附属高等学校 校長
菅 井 康 政

当部会は、「学校を取り巻く関係機関との連携による生徒指導」という研究目標を掲げて、開催致しまして、4名の先生方に講演をお願い致しました。

最初に栃木県カウンセリング協会理事長の丸山隆先生に「スクールカウンセラーとの連携」という演題で基調講演を頂きました。「1人では背負いきれない」という印象を持ちました。スクールカウンセラーは先生方を見立てている。先生方もスクールカウンセラーを見立てて欲しいということです。校長先生とスクールカウンセラーが月に1回、面談している学校もあると聞き、管理職の立場のものとしては考えていきたいと思っています。



講演Ⅰでは栃木県子ども若者・ひきこもり総合相談センター「ポラリス☆とちぎ」センター長の中野謙作先生に「不登校ひきこもり支援における教育機関との連携」という演題でお話を頂きました。栃木県のケースでしたが、高等学校で不登校の生徒が917名、中途退学が834名、このうちの6割の約500名が若年無業になるということです。高等学校として、私の学校でも退学者がいるわけですが、退学をしてしまうと、学校を離れてしまって、後のことは分からないということもあるのですが、大きな数字だなと思いますし、その中で学校在籍中に地域とつながることが大事だということを頭に置いておかねばならないと感じました。

日本社会事業大学客員准教授の土屋佳子先生の「スクールソーシャルワーカーとの連携」を演題とした基調講演では、スクールソーシャルワーカーにつきましては、参加された先生方の学校で1校だけ配置しているということでした。私自身もつい最近聞いた言葉でした。配置している学校は少ないのですが、ケース会議の進め方、合意形成のプロセスについては非常に参考になると感じました。

最後の福田恭広・株式会社スキット営業部営業一課長の「高校生のネット利用の現状と官民連携によるトラブル防止」を演題とした講演では、ネット上のトラブルは1人では対応できない。学校や先生だけで何とかするのは不可能で、学校でできることは、生徒や教職員へのモラル教育、保護者への啓蒙活動とお話頂きました。これらについては、今後、考えていく必要があると思っています。

当部会のテーマで言いますと、学校の指導力の向上というのは、常に求められるところですが、当部会で学んだ内容から、関係機関との連携についても、今後の教育活動に活かして頂き、参加頂いた先生方の学校の中でも広げて頂くことをお願いして総括とさせていただきます。

特色教育（ICT）部会

新学習指導要領では、情報活用能力が、言語能力などと並んで「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられた。また、ICT 機器をよく活用している学校ほど学力が高いことも「全国学力・学習状況調査」の結果等から示唆されている。したがって、これからの時代に生きる子どもたちを教育するに当たり、ICT を活用した取り組みに一層力を入れていかなければならないのは、言うまでもないことである。

しかし、AI(人工知能)がこれから急速に発展していくことを考えるとき、単に ICT が使いこなせるだけではなく、AI と対極にある分野、すなわち「人間ならではの」創造的分野においていかに各自の能力を開発していくか、すなわち ICT と調和したコンピテンシー（人間力）の育成に関して、どのように力を入れていくかということこそが、今後の大きな課題となるのではないだろうか。

当部会では、Society5.0 の実現に向けて社会が動き始めた今、AI 時代に対応した人材の育成とそのコンピテンシーを高めていく ICT 教育について考えていきたい。

- 1 研究目標 コンピテンシーを高める ICT 教育
～AI 時代に対応した人材の育成を目指して～

- 2 会 場 ホテル東日本宇都宮 2階 平安

- 3 日 程

時間 月日	9	10	11	12	13	14	15	16
	15		45					45
10月18日 (金)	開 会 式	講演 I	講演 II	昼食	実践発表	パネル・ ディスカッション		閉 会 式

- 4 内 容

8:30	受 付	機材担当：和田 茂樹
	(竜の口 法子・小椋 一徳	記録(写真)担当：駒場 俊太
9:00	・木村 靖法・三浦 紘幹)	集録担当：町田 裕之
	開 会 式	司会：片岡 哲哉／記録：駒場 俊太
	1. 開式の辞	
	2. 運営委員長挨拶	特色教育（ICT）部会運営委員長 渡 邊 明 男
	3. 日程説明	
9:15	4. 閉式の辞	
	講 演 I	司会：片岡 哲哉／記録：駒場 俊太
		講師紹介：竜の口 法子
	演 題 「22世紀まで生きる子どもたちに必要な情報教育とは」	
	講 師 安 彦 広 齊	文部科学省 初等中等教育局 視学官
10:45		初等中等教育局参事官(高等学校担当)付高等学校改革推進室長

10:45	講 演 II 司会：片岡 哲哉／記録：駒場 俊太 講師紹介：竜の口 法子 演 題 「アウトプットで授業が変わる」 講 師 平 井 聡一郎 株式会社情報通信総合研究所 ICTリサーチ・コンサルティング部 特別研究員
12:00	昼 食
13:00	実 践 発 表 司会：小泉 真琴／記録：小椋 一徳 テーマ 「ドローン × マインクラフト × プログラミングの実践報告」 発表者 安 藤 昇 元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT推進担当室長
14:00	パネル・ディスカッション 司会：小泉 真琴／記録：木村 康法 テーマ 「Society5.0に備えたEdTech(エドテック)を活用した教育について」 パネリスト 平 井 聡一郎 株式会社情報通信総合研究所 ICTリサーチ・コンサルティング部 特別研究員 横 山 北 斗 関東第一高等学校 教諭 石 嶋 洋 平 株式会社ミスターフュージョン 代表取締役社長 コーディネーター 田 中 康 平 株式会社NE L & M 代表取締役
15:45	閉 会 式 司会：小泉 真琴／記録：小椋 一徳 1. 開式の辞 2. 総 括 特色教育（ICT）部会運営委員長 渡 邊 明 男 3. 閉会の辞
16:00	解 散

5 講師・発表者・指導員（順不同）

安 彦 広 斉	文 部 科 学 省 初 等 中 等 教 育 局 視 学 官 初等中等教育局参事官(高等学校担当)付高等学校改革推進室長
平 井 聡一郎	株式会社情報通信総合研究所 ICT リサーチ・コンサルティング部 特別研究員
石 嶋 洋 平	株 式 会 社 ミ ス タ ー フ ュ ー ジ ョ ン 代表取締役社長
田 中 康 平	株 式 会 社 N E L & M 代表取締役
安 藤 昇	元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT 推進担当室長
横 山 北 斗	関 東 第 一 高 等 学 校 教 諭

6 運営委員・指導員（順不同）

委員長

渡 邊 明 男 佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校 校 長

副委員長

竜の口 法 子 幸 福 の 科 学 学 園 中 学 高 等 学 校 校 長

委 員

片 岡 哲 哉 佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校 教 頭

小 泉 真 琴 幸 福 の 科 学 学 園 中 学 高 等 学 校 教 頭

町 田 裕 之 佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校 教 諭

和 田 茂 樹 佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校 教 諭

駒 場 俊 太 佐 野 日 本 大 学 高 等 学 校 事 務

小 椋 一 徳 幸 福 の 科 学 学 園 中 学 高 等 学 校 教 諭

木 村 靖 法 幸 福 の 科 学 学 園 中 学 高 等 学 校 教 諭

三 浦 紘 幹 幸 福 の 科 学 学 園 中 学 高 等 学 校 教 諭

特色教育（ICT）部会 講演Ⅰ

「22世紀まで生きる子どもたちに必要な情報教育とは」

文部科学省 初等中等教育局 視学官

初等中等教育局参事官(高等学校担当)付高等学校改革推進室長 **安 彦 広 斉**

小学校ではプログラミングが必修になった

新学習指導要領では「情報活用能力」を「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけ、教科横断的に育成する旨を明記するとともに、小・中・高等学校を通じてプログラミング教育を充実させると書かれている。

小学校ではプログラミング教育が必修になった。身の回りにも家庭にもプログラミングされた便利なものがあふれている。例えば、信号機もプログラミングで制御されており、非常に良くできている。いろいろな教科、算数、理科、総合的な学習の時間などで、プログラミング的思考を育み、世の中は、どのような仕組みで動いているのかということを、体験を通して理解させることが必修化された。

中学校でも技術・家庭科のプログラミングに関する内容を充実させ、「計数・制御のプログラミング」に加え、「ネットワークを利用した双方向生のあるコンテンツのプログラミング」も学ぶことになった。

高等学校でも、すべての生徒が必ず履修する科目「情報Ⅰ」を新設、プログラミングのほか、ネットワークや情報セキュリティ、データベースの基礎を学ぶ。選択科目の「情報Ⅱ」はプログラミングなどについて、さらに発展的に学習する科目だ。

高等学校では従来、約2割しかプログラミングを学ぶ「情報の科学」を選択していない。8割がプログラミングを学ばずに卒業していたわけだ。「これでは日本の未来は暗い」ということで新設されたのが「情報Ⅰ」である。従来はワープロや表計算ソフトなどを使えるスキルを身につけるくらいで終わっているケースもあったが、当然、それで終わってはいけない。

どのようにプログラミングすれば、世の中に役立つ新しいものをつくりあげられるのか。それができる基礎的なスキルを身につけさせなければいけない。将来、どんな仕事に就こうと、どんな大学・学部に進もうと、求められる基礎的な学習内容を必修化した。

信号機の制御を体験させるプログラミング教育に実際に取り組んだ小学校がある。十字路の信号を制御して同時に青にならないようにして衝突を防いでいることが、ざっくりと分かるような簡単なプログラミングを子どもたちに体験させるものだ。

そのプログラミングを体験した子どもが、お父さんが運転するクルマで町に出かけた。交差点の信号機を見ると、矢印信号があった。青、黄、赤の次に右折を指示する矢印が出る。その子はプログラミングの体験から「そうした順番にプログラミングされて決まっているんだ」と気づいた。

さらに「赤の後に矢印が出ると、対向車はスピードが出た状態で交差点に突っ込んでくるから、ぶつかる危険性が高い。だったら、プログラミングの順番を変えて、右矢印を表示するブロックを青を表示するブロックの上に持っていて、青、黄の後ではなく赤から青に変わる前に矢印を出せばスピードゼロの状態が車がスタートするから、ぶつかっても、たいした事故にはならないのでは」と考え、先生に「こうすれば大きな事故はなくなるのに、どうして、そういうふうにしないんだろう」と言ったという。



今まで、そうした視点で、ものごとを見る発想すら持てなかった子どもが、プログラミングを授業で体験できたことで、「新しい目」で社会の問題を見出し、解決策まで考えられるようになったのだ。

コンピュータは家電や自動車、スマートフォンをはじめ身近な多くのものに内蔵されている。そのことによって人々の生活は便利で豊かになった。

そうした仕組みを知らずに便利さを受け身で過ごしていく人と、その仕組みをわかった上で、コンピュータを使いこなして、問題を発見し、より良く解決しようと考え続けていく人との違いは大きい。人々の「新しい目」を見開かせるという意味では、とても大事な教育活動、学習活動になる。小学校でも、できるだけ早いうちから、いろいろな場面で取り入れて頂ければ、子どもたちの将来は楽しみだ。

プログラミング教育は子どもたちの可能性を広げる

コンピュータを理解し、上手に活用していく力を身につける。それは、あらゆる活動においてコンピュータなどを活用することが求められる、これからの社会を生きていく子どもたちにとって、将来どのような職業に就くとしても、きわめて重要だといえる。

先生方は「プログラミングを教えるとなると、難しい専門技術が必要ではないか」と警戒して構えているが、プログラミング教育で使うプログラムはブロックをはめていくような簡単なもので、昔のようにコンピュータ言語を打つ作業は必要ない。

先生方の大学時代、教職課程の必修科目にプログラミングが課せられていたかもしれない。中には相当ハードで、ものすごい難しいプログラムに取り組む意味も伝えずひたすら書かせるところもあった。文系出身の教員志望の学生たちが、そこですごく嫌な思いをしていた姿が思い出される。

そうした経験をしたせいか、苦手意識が強い先生が多い。ところが、実際に取り組んでみると、たいして難しくないことがわかる。「ぜひ一度チャレンジして欲しい」と一所懸命呼びかけている。

新しい時代に必要な思考力、「新しい目」を子どもたちが獲得する場に立ち会って欲しい。そのためには、授業で1回や2回プログラミングに取り組んだだけでは、身につけられるものではない。5年生の算数と6年生の理科では必修になっているが、それだけでは十分ではないことに先生たちは気付けるはずだ。

いろいろな学年・教科などで、体系的にプログラミングを体験する授業を展開して頂くことが、22世紀まで生きる子どもたちの可能性をさらに広げ、予測不能な将来の社会でもレジリエンスを発揮し、豊かな想像力と創造力で問題を発見し、解決しながら、未来を切り拓くことにつながっていく。

特色教育（ICT）部会 講演Ⅱ

「アウトプットで授業が変わる」

株式会社情報通信総合研究所 ICT リサーチ・コンサルティング部 特別研究員

平 井 聡一郎

ICT 機器はエレベーター、一気に屋上まで行ける

皆さんに、お配りした資料の中に QR コードがあるので、スマートフォンで読み込んで URL をクリックして Mentimeter というアプリを立ち上げてほしい。

Mentimeter が立ち上がったから、四角い枠が出てくるから決められた数字を打ち込む。すると「ICT 活用と聞いて一言」という質問が出てくる。ここには、答えを書く欄が 3 つあるから、「ICT」と聞いて頭に浮かんだ言葉を、一つ以上三つまで自由に書いていただきたい。ネガティブな言葉でも結構。「嫌だ」「怖い」「やりたくない」など、何でも構わない。自由に連想した単語を打ち込んで、Submit で送信する。持っていない方は隣の方にスマホを借りてほしい。



ちなみに、今度の教科書から QR コードが掲載されるのだから、先生方は QR コードに慣れて欲しい。QR コードを読みとるのは子どもたちにとっては簡単。先生方も、これができないと新しい教科書に対応できない。子どもだけでなくお母さんたちも QR コードは慣れている。日常からスーパーのクーポン券をダウンロードしているので、主婦層にとってはお手の物といってよい。

さて、ここで前方のスクリーンに結果を表示する。「学校では導入が遅れている」「取り組んだことがないから、できない」「電子黒板」「可能性が広がる」など、どんどん表示される。これが「思考の見える化」。これだけの人間が考えていることを、一瞬で集めて示すことができる。なお、私が「できるだけ単語で書いてください」と指示するのが遅く、文が多いが、単語で回答すると、さらに同じ回答が増え、傾向が掴みやすくなる。さすが ICT 部会だ。この会場は前向きな言葉が多い。普通は「苦手」などネガティブな言葉が多くなる。「便利」「楽しい」「期待している」が出てくる集団はなかなかない。他の機関・組織だとネガティブな言葉のほうが多い。もっとも、「うざい」「わからない」「授業が遅れそう」など否定的な言葉もある。ネガティブとポジティブが混在しているが、まさに、これが現在の学校現場を象徴しているのかもしれない。

今、一瞬で皆さんの思考が見える化した。これと同じことをアナログでやったらどうなるだろうか。テクノロジーを使ったから、一瞬でできたが、アナログなら、どんな方法があるか考えてみよう。

A プリントを配付する。

平井 プリントを配布して、また集める？集計は、どうするか。

A 数える。

平井 正の字を書いてカウントする？学校ではポストイットを使うかもしれない。ポストイットをグルーピングして黒板に張ると、風が吹いたら飛んでいってしまう。ところが、今、お見せしたやり方なら、データは全部クラウドに残る。

皆さんの打ち込んだ言葉は、いったんクラウドに上がり、処理されて私のところに戻ってくる。すべてが瞬間でできる。これがデジタルの力。アナログで同じことをしようとしたら、ものすごく時間がかかる。効率的ではなく、効果的でもない。

タブレットを導入すると「ホワイトボードの代わりだよ」という方がいる。タブレットをホワイトボードの代わりに使うのは階段の代わりにエスカレーターを使うようなもの。ちょっと楽に、ちょっと早くなるだけ。本当に使い方を变えと、タブレットや ICT 機器はエレベーターだ。一気に屋上まで行けてしまう。今まで時間がかかっていたことがスピーディーに楽にできるようになる。あるいは時間がかかりすぎて、できなかったことができるようになる。今日は ICT の威力を実感して頂きたいと思い取り上げた。ちなみに、この **Mentimeter** というアプリは無料である。通信がつながっていれば、こうした授業が可能になる。

ICT 機器を活用するためには情報収集に力を入れる必要が

さて、もうひとつ皆さんに質問したい。画面を見ると質問が変わっていることに気づいただろうか？。私の PC で操作するだけで、皆さんのスマホの画面が変わる。今度は ICT 機器活用の「困り感」を伺いたい。ここにいる方は学校で ICT 機器活用をけん引されている方や担当者の方だと思う。学校に ICT 機器を導入する際、何が障害になっているか。困り感を文章で書いてほしい。

回答を見ると「回線が貧弱」「端末が足りない」「予算がない」「機器が高い」「先生方のスキルの差」「アップデートの設定が難しい」「Wi-Fi 環境になっていない」「ギガ不足」「理解している教員がいない」「年配の方の拒否感がひどい」など。このへんが先生方の困り感なんだろう。予算の問題、教員のスキルの問題、そして授業での活用の問題の 3 つに大別がされる。ロールアップすれば、皆さんも回答を見ることができる。こういう便利な機能がついているのに、**Mentimeter** は無料。知っていれば使える。知らないと使えない。ICT 機器を活用するためには、教員も情報収集にも力を入れる必要がある。

これまでの授業によく見られた一方通行の授業では本当の力はつかない。今後はインプット中心の授業からアウトプット中心の授業に変えていく必要がある。こうした ICT 機器やアプリを活用することで、子どもたちのアウトプットを促し、短い時間で効果的、かつ効率的に授業を展開していくことで、新しい教育の姿を求めていこう。

特色教育（ICT）部会 実践発表

「ドローン × マインクラフト × プログラミングの実践報告」

元佐野日本大学中等教育・高等学校 ICT 推進担当室長

安 藤 昇

私は、2015 年から Microsoft Expert Educators に認定され、Microsoft Office 製品や Microsoft OS については詳しく、小学生向けプログラミング学習のカリキュラム監修等もしている。佐野日本大学高等学校では、入試のマークシートを採点するシートリーダーのアルゴリズムを設計したり、LMS（学習管理システム）の構築、学校ホームページの基盤をつくっていた。また、私自身、プログラミングが好きで、なおかつ、ゲームも好きだったので、子どもたちにゲームを通してプログラミングを教えられないのではないかと考え、プロのクリエイターと協力して教材をつくり、プログラミングを教えていた。



ドローンの教育活用について

ドローンは様々な面で真価を発揮する。例えば、農業ではプログラミングと組み合わせることで自動的且つ効率的に農薬散布等を行わせることができる。

また、空撮を行うことで、通常では撮れない空から俯瞰する「絵」が撮れ、様々な宣伝活動に活かすことができる。また、モニター付きのゴーグルと組み合わせると、自分が鳥になったような感じがして、実際に飛んでいるような体験ができる。

ドローンは測量でも威力を発揮する。これまで空からの測量は大がかりなものになりがちだったが、ドローンで撮影することで簡単にできるようになった。3D マップも手軽に作成できる。立体で動かすことも、容易であり、Unity などを活用すると、その中でモデリングもできる。これを活用し、佐野日本大学高等学校の周辺の地形からより鮮明なハザードマップも作成した。

このように、ドローンを活用することで、「製作・プログラミング・飛行技術」といった、子供たちが将来社会に出て行く際に必要となる能力を楽しみながら学ぶことができる。

マインクラフトの教育への活用について

ゲームの中にプログラミング三大要素の「順次処理・繰り返し・条件分岐」や化学の元素記号を織り交ぜることで遊びながら学ぶことができるため、プログラミングや化学を楽しく学ぶことができ、小学生の学習にも有効である。

ICT や人工知能が発達して、覚えるだけの教科はネットで学べる時代になっている。先生の役割は生徒に覚えさせることではなく、考えさせ、自ら学ぶ力を身に付けさせることが大事である。例えば、それは e スポーツで優勝した中学生が多額の賞金を獲得した例もあるように、ゲームをすることが囲碁・将棋と同様に親から褒められるようになっている。社会の価値観が変わってきているのだ。評価についても今までと同様ではなく、多様の評価がなされないとはいえない。また、近年の将棋にもみられるように、若者が大人を圧倒する例が次々と出ている。理由は明確だ。彼ら若者は人間よりも強い人工知能からトレーニングを受けている。大人が勝てる訳がない。この若者が大人を圧倒する時代が来ていることを教員は理解しなければならない。

これからの学校には、必ず ICT が不可欠となってくる。教員は自分が理解できないからと言って子どもの学習環境の可能性を妨げないことが大切である。

特色教育（ICT）部会 パネル・ディスカッション

「Society5.0 に備えた EdTech(エドテック)を活用した教育について」

株式会社情報通信総合研究所 ICT リサーチ・コンサルティング部 特別研究員 平 井 聡一郎

関東第一高等学校 教諭 横 山 北 斗

株式会社ミスターフュージョン 代表取締役社長 石 嶋 洋 平

株式会社N E L & M 代表取締役 田 中 康 平

子どもたちがプログラミングして花火を打ち上げるイベントを実施

石嶋：当社は Education と Entertainment を融合させた Edutainment という方法を実践している。Edutainment はイギリスで荒れた学校を蘇生させた方法で、「楽しみながら学ぶこと」を目的としたメディアやコンテンツを指す。日本でも寺小屋で、もんじゃを焼いて食べる文化があったそうで、今なら『スラムダンク』『キャプテン翼』などを教材にして、「スポーツの価値」を楽しく学ぶ取り組みなどが考えられる。

その取り組みの一環として、2018 年、お台場で、子どもたちがプログラミングして花火を打ち上げるイベントを行った。世界でも初めての試みで、約 3 億円かかった大イベントだった。

花火の打ち上げプログラムは結構複雑で、プロジェクトがスタートした時点では子どもたちにできるかどうかは誰もわからなかった。「無茶だ」という声もあったが、子どもたちは、なんとかプログラミングし、無事に花火を打ち上げることができた。

その体験をした子どもたちは大きく成長した。当社の企業目標でもある「すべての人に創るチカラを」を実践したことで、創造する喜びと達成感が生まれた。

何かモノをつくった体験をした子どもたちは自信に満ちあふれている。自分が考えたこと・構想したことをアウトプットできることに気づき、すごく強くなった。みんなが、こうした創造的な体験をすることができたら、きっと未来は良くなっていくと信じることができた。

普段は子どもたちを対象にした「プロスタキッズ」というプログラミング教室を運営している。教育とエンターテインメントを融合させ、子どもたちが楽しく学ぶ、きっかけづくりの場所になれば良い。興味さえ持てれば、子どもたちは驚くほど熱心に勉強に取り組む。学校の勉強に対しても積極的になり、自分で自分を成長させる。

私たちは専門の教員ではないので、教育そのものを提供するというより、自分たちの得意な方法を使って子どもたちが教育に興味を持つ入り口をつくる企業であると考えている。

e ラーニングと集合学習を併用する「ブレンデッド・ラーニング」にも取り組んだ

横山：簡単に関東第一高等学校での EdTech の活動をご紹介します。5 年前、私が「ICT に取り組みたい」と校長、理事長に話したところ、すぐさま OK が出た。全館・全教室にネットワークをはりめぐらし、しかも 1 教室あたり 2 つずつアクセスポイントを設けた。あわせて iPad も大量に購入した。

iPad は毎年増やしていき、現在は生徒数 2,000 名に対して iPad が 800~900 台。2~3 人に 1 台というところまで来た。ただし、2018 年から BYOD にして、端末も Chromebook に変更した。家庭で端末を購入し、それを学校に持ってきてもらうようにした。所有権は生徒、家庭にある。

2018 年度、1 年生の特進コース 2 クラスに導入、2019 年度に 7 クラスまで増やし、Chromebook 300 台を使った授業を行っている。2020 年度は、さらにコースを増やし、1 学年丸ごと BYOD に転換したい。Chromebook を 600~800 台、導入することになる。



授業スタイルとしては毎年、新しい方法にチャレンジしている。ICTを導入して以降、その幅も広がり、「アクティブ・ラーニング」のほか、生徒が自宅で教材や動画を見て予習する「反転学習」、eラーニングと集合学習を併用する「ブレンデッド・ラーニング」などに取り組んできた。Chromebookを一回だけ持ち込み可にして定期考査を行ったこともある。

0対10で私が何もしゃべらない50分間の授業を実施したこともある。さすがに生徒も戸惑いを感じたようで、現在は5対5の割合にしている。本当はもう少しインプットの割合を減らしたい。

Zoomというテレビ会議システムを使った授業にも取り組みたい。生徒には学校の中の好きな場所にいてもらい、映像を通じて授業をする。それができるなら、休んだ生徒も自宅のWi-fiで授業に参加してもらうことも可能になる。

問題解決型学習（PBL）を中心に置いた新設校の開校準備に奔走

平井：校長を2年務めてから教育委員会へ行き、そのまま退職したので、今、もう一度学校経営に関わりたいという思いがある。そんな気持ちの中で、近年、軽井沢の風越学園など私立校や、名古屋市や広島県福山市の公立校でのオルタナティブスクールが続々誕生し、各地で教育改革が進んでいるのを見てきた。そんな中で友人が愛知県瀬戸市に理想の学校を作ろうと立ち上がったので、その設立をサポートしている。



少子化が進む現在、学校が統廃合されると校舎が余る。余った校舎をうまく使えば初期投資を抑えて学校をつくることができる。更地にすると多額の費用が発生するので、そのまま引き取ってもらった方が負担は少ない。瀬戸の新設校も市から中学校の校舎を借り受けて、リノベーションすることにした。

小中の一貫校で1学級26人にして先生を2人つける。1人が日本人で、1人がネイティブスピーカーである。今の学習指導要領に沿った1条校として立ち上げるが、問題解決型学習（PBL）を中心に組み込む予定である。

3カ月クールでPBLを回していく4学期制とし、その成果を学期の終わりに、授業公開の形で子どもたちが保護者や地域の人にアウトプットしていく。英語教育もしっかり行い、中学卒業時点で英検2級取得、2ヵ国語ができるようにしておきたい。できれば、日本語、英語、中国語の3ヵ国語を話すことができれば、アジア・世界で戦っていけるだろう。

今の段階では、まだ先生方を公募していないが、開校の話聞き、公立を辞めて働きたいという先生もいる。すでに開講しているオルタナティブスクールでも、新しいことにチャレンジしたいと考えている先生が殺到していると聞く。そうした新しいタイプの学校が増え、全国で、様々な学校が切磋琢磨していくようになれば、教育界も大きく変化する。急激な変革が起こるのではないかと感じられてならない。

その中で、新しい教育を支えるには、やはりEdTechが欠かせない条件になる。EdTechにきちんと取り組めるかどうか、ある意味、教育に関わる産業や学校の生き残りの条件になる。教育界も厳しい競争社会で、ICTをうまく取り組めなければ早晩、退場を迫られる。

○ディスカッション

EdTechの導入で、生徒それぞれの理解度に合わせて進む授業が可能になった

田中：EdTechの一例として、千代田区立麹町中学校の「未来の教室」を紹介する。何をしているかというと、2018年度は数学の授業改革に取り組んだ。中学1～2年生はCOMPASSがつくったQubenaというAI型のドリル教材を使った授業を実施した。数学の授業時間数を半減させ、残った時間で探究型のワークショップのような授業を実施した。

1人1台の端末を持ち、それぞれの理解度に合わせて進んでいくので、集まって授業をする必要がない。座る場所も自由で、ランチルームで取り組む生徒も多い。先生は板書もしなければ、特に指示もしない。

唯一あるのは「この単元を、いつまでに終わらせて下さい」という指示だけである。その時点で単元テストを実施することになっている。

紙の問題集とは異なり、書いては消し、書いては消しの学習を繰り返す。一番良いのは子どもたち同士で、きちんと教え合ったり、疑問に答えたりしていることだ。対話しながら学習している。その結果は先生の端末に送られ、先生はそれを読んだり、子どもたちの様子を見たりしながらピンポイントで指導にあたる。

先生は、「自分がなじんだ昔ながらの授業ではないので、ちょっと寂しいが、その時には見えていなかった生徒の様子が見えるようになった。その結果、本当に個別指導がしやすくなり、結果としてクラスの偏差値が縮まった」と話している。こうした結果が成果として出ている。

パネリストの先生方に EdTech を導入するメリットを伺いたい。EdTech が学校に入れば、何ができるようになるのか。

平井：今日の午前中に皆さんにアンケートに書いて頂いたことが、たちどころにテキスト化され、前の画面に表示される。午前の講演で皆さんが「なるほど」と思った言葉で一番多かったのが「アウトプット」、次いで「フィードバック」だった。

EdTech を導入すれば、こうした処理が簡単・瞬時にできてしまう。学校でも紙のテストではなく、CBT 方式（コンピュータに表示された試験問題に対してマウスやキーボードを操作して解答する方式）でテストを実施すれば良い。

テストの結果を集計し、分析したら生徒の理解度は一目瞭然だ。しかも自由記述に使われた単語の出現頻度なども、すぐに分かる。名詞では「アウトプット」が一番多く、40名のうち15名が使っていたといったことが瞬時に分析してできてしまう。この秀逸なアプリが無料で使えるのがテクノロジーのありがたさかなと思う。

横山：例えば、Google Classroom を使えば、登下校時の連絡が必要なくなる。画面ですべてが確認できるので、生徒は、それを見て「今日の何時間目は授業変更があった」「レポートの提出期限が近い」「集会は何時から」といった情報を得る。事務的な連絡が必要なくなるので、朝の10～20分は進路やノーベル賞の話など本当に伝えたい話ができる。EdTech を導入することで、まとまった時間がとれるようになるのが大きなメリットである。

石嶋：教室でプログラミング教育に取り組んだ結果、通信簿の評価点がどのように変化しているのかを調べた。もちろん、成績が上昇した子、下降した子がいるが、概して国語や算数の主要教科が上昇した子が多かった。

ただ、どうしても成績が上がらない子がいた。なぜだろうと思い、そうした子の一日の時間配分を調べたところ、共通項は動画投稿サイトを見ていることだった。つまり、よそ見をしてしまう。端末を渡すデメリットは、ここにある。

iPad を見るとスクリーンタイムというのがあり、1日何時間、動画投稿サイトを見ているかがわかる。6時間以上見ている子は成績が上がらない。よそ見、ながら見をしていると、勉強に集中できない上、動画投稿サイトの影響を受けて思考が偏ってしまう危険性もある。具体的な思考ができなくなり、将来の希望を聞いても、ただ「ビッグになりたい」というばかりで、具体的な展望を描けない子が多い。

まとめ

田中：EdTech が今回のテーマであるが、EdTech だけでなく、仕事が AI によって自動化され、人がやることは何だろうということを前提にした教育・学習が求められる。では、学校でどのようなことに力を入れるべきか、期待したいかについて話して頂きたい。



平井：アメリカの学校を視察し、学校と社会がつながっていると感じた。これからは学校と社会のリンクを意識した教育を考える必要がある。学校が行っていることが、社会とつながっているかどうかという視点で考えると、社会とリンクさせるためには何が必要かということになる。つまり、社会とリンクさせるように学校を作り変えることが求められていくのではないか。今、校則が問題となっているが、例えば、社員の靴下の長さを決めている会社はないだろう。乱暴な例えだが、このように、学校と社会の感覚が少しズレている気がする。また、社会では、目の前の課題を自分で調べて解決していくことが求められる。それゆえ、学び方、課題を解決する力を学校で身につける必要がある。ICT 機器環境についても、1 人 1 台と言っているが、社会に出ると、仕事をする上で 1 人数台の PC を使う場合もある。それが 1 台当たり数人ということ自体間違っている。学校と社会を結びつけて考えると、改善すべき点が見えてくる。学校に求められることは変化することである。

横山：好奇心や素直さ、学び方、生き方というように、コンテンツよりマインドセットにより重点が置かれていくべきではないか。私は東京大学の受験を試みた。理系の教員であったが、文系を受験した。従って、高校で日本史、地理等は習っていなかったため、一から勉強したが、その際、参考書等を使った。学校の授業を受けなくてもできることを示したかった面もあるが、学校でコンテンツを教えるなどとは言わないが、コンテンツ自体が目的となってしまうとそれは違う。コンテンツを通じて、様々な面白さや世界の見方、楽しみ方等を教えることができるが、コンテンツそのものではなく、マインドセットの部分を学校として育てていこうとすることが建学の精神であると考えている。

石嶋：STEAM というと、Art とか Science という話であるが、要は文系・理系である。日本では文系・理系で分けるが、外国では文系・理系で分けることはあまりない。Art と Design は同じグループとして捉えることがあるが、文系軸として捉える。Science と Engineering は同じ仲間として捉えると文理学部等となる。これを価値観で考えると、Apple や Dyson 等では、「Art は Science」、「Design は Engineering」と社員に教えている。ということは「Design は Engineering」、つまり機能を達成するために作るということで、意味的価値とか問題解決の応用的なものだという指導をしている。「Art は Design」と言うと混乱する。「Art は Science」とすると神が作っているものだから誰も分からなくて良い。しかし、Design するとか Engineering するということは問題解決のために使われるということである。要は IT に使われる（使う）人、作る人に分かれてくる。IT を使う人ではなくて、作る人にならなければならない。

田中：学習が変わっていく、EdTech を導入する、そのことによって記憶や理解からそれを応用したり、さらにはクリエイティブな活動に学習を発展させたりするときに評価をどうすれば良いか。この点は、経済産業省でもテーマとなっており、今回は形成的評価に軸足を添えて、それをどのように見ていくのかと言うことを一つの成果物として出そうと考えている。形成的評価とは、私の解釈としては、学習しながら子どもたちに「何ができつつあるのか」、「できるようになったのか」を観察したり、パフォーマンスから読み取ったり、性格から読み取ったりしていく評価である。必ずしも正解、不正解というものではない。海外教育系メディア等で取り上げられる改訂版タキソノミーがある。この中のステップとして、1 から 6 まで段階がある（①知識、②理解、③応用、④分析、⑤統合、⑥評価）。⑥に向かうほど高次元な思考のスキルとされている。⑥が「創造—Creative」、一番低いのが①の「記憶」である。研修等でよく使うが、先生方に最初に分析して頂くと、これまでの授業は①と②「理解」に時間をかけすぎているのではとよく言われる。効率よく EdTech を使うことができれば、子どもたち自身が学んできて、その土台に立って、③「応用」や④「分析」、⑤「統合」、⑥「評価」を学校で行っていく。これが恐らく PBL の活動の軸になる。これらをどうデザインしていくかということが、今後、先生方に問われていく。

最後に、誰もやったことがないことが山ほどあり、それらにトライするときに合い言葉にしているのが、「未来を予言する最良の方法は、未来を創造することである」である。コンピュータを作ったと言われる Alan Kay 氏の言葉である。先生方には、「分からないからやらない」の前に「分からないからやってみよう」「未来を作っていこう」ということを頭に入れて、面白くチャレンジして頂ければと思う。

特色教育（ICT）部会
「総 括」

佐野日本大学高等学校 校長
渡 邊 明 男

特色教育（ICT）部会は、ご指導頂いた先生方、ご参加頂いた先生方のおかげで大変密度の濃い、素晴らしいものとする事ができたと思っています。

講演Ⅰにおきまして、安彦先生からは、現在の世界そして日本の状況と今後の展望等を、包括的に分かりやすく教えて頂きました。その上で高校生等の現状や課題を踏まえた情報教育の必要性や、その方略を示して頂きました。私たちは改めて ICT 活用教育の重要性、必要性を理解することができました。

講演Ⅱでは、平井先生から本当にインパクトのある講演を頂きました。フューチャーワークの動画によって、強烈な印象とともに、現在が大きな変革期にあることを一瞬で理解することができたと思います。まさにアハ体験でした。また、メンチメーターで、ICT 活用教育は「エレベーター」ということを体感するとともに、その楽しさに引き込まれました。そして Input、Output、フィードバックの重要性、さらにはデジタルとアナログのバランス等の多くの示唆を頂きました。いずれにしても、まずは先生方が直接触れることで実感して、使えそうな場面を考えながら、さまざまな取り組みをしていくべきなのだという励ましを頂いたと思っています。

実践発表では安藤先生からの『ドローン・マイクラフト・プログラミング』についてのご報告。一言で言えばその「楽しさ」を十分伝えて頂きました。この分野での教育・学習の可能性を垣間見た思いが致しました。

パネル・ディスカッションでは、同様に多くの示唆を頂きました。まずは我々がエドテックを使って、どのようなことをやりたいか、どのような子どもを育てたいか、ということを考えるのが一番大切です。そこをしっかりと考え、授業のデザインを構築していかなければなりません。もちろんそれを面白くやる事が大切なのですが、その際「手段」と「目的」をはき違えないようにすること。あくまでもそれは「手段」なのだという事を忘れてはいけなと、重ねてご指導頂きました。また、印象的だったのは、YouTube を多く見続けることで、物事をしっかりと考えることのできない受け身の人間になってしまっているケースがとても多いという話でした。当大会のテーマの中の「コンピテンシー」、さらには「コミュニケーション」の重要性を実感致しました。

今回のこの部会で、ICT 活用教育を推進していく覚悟と同時に、幾つかのアイデアを頂くことができました。参加頂きました先生方におかれましては、「あれをやってみたい」「これをやってみたい」という熱い思いを、今持たれているのではないのでしょうか。

最後に、お忙しい中にもかかわらず、ご指導頂きました先生方に改めて感謝を申し上げます。そして、ご参加頂きました先生方の、今後益々のご活躍を心からお祈り申し上げて、総括とさせていただきます。



参加者アンケート（感想）

第1日「全体集会」

◇栃木県私立学校活動紹介

- 一生懸命に準備されていたのがよく分かり、学校関係者であることが嬉しくなる一時だった。
- 箏曲部の発表は今まで生で聞いたことがなかったが、迫力があり、優しさもある演奏に感動した。心に響く演奏だった。
- 箏曲部という部活動を初めて知った。
- 素晴らしい琴の演奏だった。思わず聞き入ってしまった。
- 箏の演奏は素晴らしく感動した。生徒達はもちろん、司会の顧問の先生も含めて素晴らしいパフォーマンスだった。

◇報告

- 私学助成の実態が詳細に理解できた。大学入学共通テストの最新の情報が聞けて良かった。
- 学校生活とは全く違った時間の流れ、社会の変化に驚き、反省した。大会への参加は大変刺激を受け、勉強になった。
- 私学情勢は厳しい現状にあるが、生徒のコンピテンシーを教育の中で高めていかなければと実感した。そのためには、我々教員側のコンピテンシーをより魅力的に向上させなければいけない。
- 現在の私学の状況が分かり参考になった。視野を広げることができた。今後、我々が具体的にどのような取り組みでいくべきかを改めて考えることができた。
- 情報量が多く興味深く伺った。今後の教育の流れにいたる現状等が各資料で示され、より一層の勉強の必要性を感じた。
- 生徒に身につけさせたい力を再確認することができた。やはり私学で生徒や保護者からの進学面での要望に応えていかなければならないので、本当に難しくなると危機感を感じた。
- 入試制度改革の現状を知ることができ、今後の生徒対応のやり方を見直していく上で参考になった。
- 私学をとりまく今日の課題、特に高大連携と入試制度改革の中で、私学がどのように取り組んでいくべきか勉強になった。
- 私立学校の役割や使命を改めて認識した良い機会になった。また、日本の教育の現状なども知ることができた。
- 現状の再確認、今後あるべき姿勢を示して頂いた。初心に帰ることができ意義深いものであった。

◇記念講演

- 多くの参考文献を示して頂いたので、早速、持ち帰って調べ、今後に活かしたい。
- 急ぎすぎる教育改革やこれからの AI 進歩の世界へ不満・不安の中でホッとする内容だった。
- とても元気をもらった。サミュエル・ウルマンの青春にあったように、いつまでも理想や夢を自分も追いかけたいと感じた。
- 大変参考となり、今後の本校の教育に生かされるものとなった。
- とても興味深いものだった。刺激を受けた。楽しく拝聴した。
- その豊かな感性、知識に触れ、自分もあまりできていない読書から知識を蓄えたいくなった。
- 時間が経つのを忘れるくらい引き込まれてしまった。
- 講演から得られるたくさんの新しい視点を生かしたい。また、納得のできる話が大変多かったと感じた。今後の教員生活に大変参考になった。
- 普段見過ごしがちな視点を学ぶことができた。
- とても素晴らしい講演会だった。ロシア文学の第一人者である先生の講演を拝聴、拝見できたことに感激した。
- 先生の 70 歳にしてまだまだ向上心旺盛なところに深く感銘した。
- 感銘を受けた。亀山先生の幅広い見識と真情溢れる語り口に感銘を受けた。
- 自分自身がいかに怠けていたかを知らされた。もう一度勉強し直そうと思った。

- 人生に対する鋭い洞察力に満ちており、多くの文化人の紹介もあり、教育に係わる者として視野を拡げることができた。
- 私学教育をより良いものにするためのヒントがあった。
- これからの時代の中で「生きる力」＝「人間力」をいかに養い、また自らもどう成長していくのかの方針について深く考えることができた。
- 私自身のこれまでの生き方、これからの人生について考えさせられた。もっと多くのことを学びたいという気持ちが強くなった。
- 公立でなく私学でしかできない特色ある教育をしていかなければならないと改めて思った。AI が急速に発展していく中、Art 分野はAI が我々の日常生活を脅かすことはない。つまり Art（音楽や絵画等）を楽しむことのできる豊かな感性を持つことが人生百年時代を生きる力の1つとなる。
- 今後、教育現場で求められるスキルについて改めて考えさせられた。自分自身がこれからも学ぶ存在としての自覚を持ち、日々過ごしていきたいと感じた。
- これからの世の中においては、確かに AI は切り離せないものである。急速な変化の中、適した教育も常に変化しているという事実を再確認する良い機会となった。
- 文学、音楽といった芸術が人生を豊かにし、教員側の教養が子供たちに多くのものを与えられるのだ、ということをつくづく感じた。複数の属性で人は成り立っていること、胸に改めて刻み、子供たちに接していきたい。

第2日「部 会」

◆私学経営部会

- ここでなければ聞けない話もあり、もっと聞きたいと率直に思った。
- 船田先生の講演は共感を持った内容だった。創立者の思いが伝わる。人間力、良いテーマだった。
- 大変感銘深いものだった。私学教育に対する深く熱い思いに感じ入った。
- 日本の歴史から現在の世界情勢までを盛り込んだ内容は、大きな情報源になった。
- 示唆に富んで、思い当たる、参考になるところもあり、また、アクティブ・ラーニング方式も良かった。
- 内容は大変興味深いものだった。データによる見える化はやっているものの、ポジティブにマネジメントする必要性を感じた。
- 時間を忘れるくらい、あっという間で、私学の学校改革について考えることができた。イメージできなければマネージできない、本当にその通りだ。「自分の強みを生かしてチームに貢献する人」が真のリーダーシップが取れる人だという言葉も印象的だった。AL も本校では取り組み始めたばかりで、もっと勉強しなければと思った。実践したらそれにきりになってしまい、データ化できず、必然的に次に活かせないでいるのも現状。今回は色々なことを考えるきっかけになった。
- なかなかのスピート感で、飽きさせず軽い語り口調で、とても良い講演だった。本校でも「見える化」をもっと促進し、サイクルの最後まで進めていきたい。
- 学校改革を行う為の方法、リーダーシップについての考え方など、個人としても組織としても非常に有用であり、大変参考になった。
- 「見える化」したいが、誰に何をどのようにさせるかが課題である。私学でしかできない教育をこれからはすべき、人間力を育むのは私学でしかできない。
- 建学の精神の再創造を本校でもしなければならぬと感じた。
- 元兼先生の話の中で「顔なし管理職にならないように」という言葉が分かりやすく印象深い。
- 私立学校の強みを活かしたカリキュラムマネジメントの展望、建学の精神の読み直し、カリキュラムを組織的に改善して進めていきたい。また、地域との連携については、行っているが、まだまだ弱いの、目的をはっきりとし、どのような形で何をするか、もう少し掘りおこして、具体化していきたい。

◆教育課程部会

- 教育に係わる者として何を重視し伝えるべきかを考えさせられた。
- カリキュラムは日本の教育の礎、先生方の認識、問題提起に速やかに検証・検討しなければいけない。
- 事例をもとに、具体的に大学入試に対応できるカリキュラムに着手したい。
- コンピテンシー基盤型学力の視点から、この度の教育改革を捉え直し、変えることの意義が見えてきた。さらに実践へと繋がるカリキュラム、授業、評価の良い例・悪い例を比較し、体験して目指すべき姿を具体的に知ることができた。

- 知識構成型ジグソー法、グループでの体験もでき、アクティブ・ラーニングの本質を改めて学ぶことができた。
- 教員側の裁量によって生徒の成長の仕方が変わるのだと再認識した。アクティブ・ラーニングの本来の目的を頭に入れ、どんな問いかけをするか研究していきたい。
- 柔らかな語り口ながら、グループワークあり、様々な先生の助言ありで、緊張感を持って伺うことができ、有意義な講演であった。
- パーツ、パーツで行うのではなく、デザインをしてから、ICTの活用やアクティブ・ラーニングを行う重要性が分かった。
- どの発表もとても参考になる内容ばかりだった。学校へ持ち帰り、実践してみたい内容もあり、勉強になった。今後の参考にしたい。今後の授業計画に活かせる講演が聞くことができた。大変有意義だった。
- 実践発表の先生方は3人とも、素晴らしい研究と工夫、実践をされていて、頭が下がる思いだった。教育や生徒への情熱を強く感じた。
- 笹尾先生の生徒にタブレットを持たせたアクティブ・ラーニングの実践は大変参考になった。入試のための活動ではなく、活動があって、それが入試に結びついていく姿は理想的だなと感じた
- 齋藤先生の発表は示唆に富む内容で、現場で指導(PBL)にあたる先生に伝えるべきだと感じた。
- 「コンピテンシーとは」というテーマにそった具体的説明や実践例により、理解を深めることができた。
- どの学校でも生徒の未来に向けて様々な事を考えている。大事なことは学校の実状に応じた取り組みだと思った。
- 新しい教育内容と方法、それに対して大学入試の問題もあり、様々な問題提起とその対策法について勉強できた。
- 新しい学習要項や ICT の活用を含めたアクティブ・ラーニング等の授業改革に向けた校内研修も行っているが、水原先生、益川先生のお話から単なる授業技術でなく、本質や目的を見据えての教材研究の大切さを痛感した。早速、校内研修に活かしたい。
- 大学入試対応は言うまでもなく、中学高校の入試も再考しなければ未来を担う児童・生徒の未来はないとさえ考えた。
- 午前中の講演を聞き、ジグソー法を一部導入して授業展開してみたいと思った。また、腎臓を学んだ後に腎臓のポスターを作らせることなどの発想はなかったので、導入してみたい。午後の実践発表の紹介は活用できるものがいくつかあった。学校に戻り、検討してみたい。
- アクティブ・ラーニングが叫ばれてから一定の時間が経ち、入試と絡めての工夫も進んできていると感じた。また、生徒を教育するための大切な時間である授業をより真剣に研究しなければいけないと感じたし、学校全体でも取り組まなければ成果が期待できないのではと考えた。
- 学習指導要領の改訂に伴う「教育課程」の編成という視点からすると期待に反するものも多かった。ICT機器の活用、アクティブ・ラーニングという視点が多かった。
- 問いかける、問いを考えさせる、疑問を起こさせることが、ALの鍵となっていることを再認識した。勉強になった。

◆法人管理事務運営部会

- 総論ベースながら、ポイントをついた解説でよく理解できた。
- 本校で取り入れられるところも多く、実用的で良かった。
- 大変分かりやすく、参考になった。当県においても各学校において勤務時間の管理については最大の懸案事項となっている。そのため、国が労働局から講師を招き、講演会等を開催したが、規制する側からの説明であるので学校サイドからはなかなか素直に受け入れられないジレンマ感があった。坂田先生のお話では、学校・教育・教師側からの視点での労務管理・スクールコンプライアンスの具体的なお話だったので納得できる内容だった。
- 実例をあげながら、労務管理について学ぶことができ良かった。
- デジタルキャンパス構想のお話は非常に興味深く、参考になる部分が多かった。
- Google アナリティクスを利用してみようと思った。
- デジタルキャンパス構想については、今まであまり関わったことがない分野の話を聞くことができ、興味深かった。持ち帰り、内製化について検討したい。
- タイムリーな企画で勉強になった。他校の情報も分かりやすく参考になった。
- どの講演も非常に現場の仕事にマッチした内容で良かったと感じた。また、昼食時、各校の実状を知ることが参考になった。

- デジタルキャンパス構想について、今まであまり関わったことがない分野の話を聞くことができ、興味深かった。持ち帰り、内製化について検討したいと思う。昼食会も働き方を中心に興味深い話を聞くことができた。講演Ⅱでは、部活動は生徒のものであり、教員のものではない、というお話から、ヨガや総合運動部など、生徒のニーズに合った新しい部活も受け入れていけば良いと思った。部活は生徒募集と関連している分野なので、生徒が楽しんで活動できるようにしていかなければならないと思った。
- 私立学校における働き方改革の根本にあるべき考え方等、多くの点で参考になった。
- 昼食兼情報交換は全国の貴重な情報が聞けて大変有意義だった。今後も続けて欲しい。部活動についての嶋崎先生、デジタルキャンパス構想の安藤先生のお話も大変勉強になった。
- 情報交換の場は他の学校の皆さんから具体的な生の話を聞く機会を得られ、大変役に立った。
- 働き方改革での勤務の在り方について考えさせられた。職員の中にも従来の学校の為、生徒の為、「部活動大好き人間」と「労働者としてプライベート重視の先生」とに大きく分かれ、今後の学校運営は大変な時になってきている。
- 各学校の実態を踏まえた働き方改革をディスカッションできたことは良かったと思う。今後の部活動の在り方、出退勤の管理方法について参考になった。
- 各講師とも深い知識に裏付けられた的確な情報の提供が受けられ、誠に有意義な内容であった。
- 講演Ⅰ・Ⅱともに現状に合わせた内容でとても勉強になった。自分の学校に足りない点が具体的に分かった。昼食時の情報交換がとても勉強になった。
- 講演・事例発表・報告ともに研究された先生方の深い話を聞くことができ感銘した。それぞれ自分の中で問題の整理ができた。

◆進路指導部会

- どのようなストーリーを生み出すのが大事であるが、どう生きるかという点においては、進路と生徒指導の接続も極めて重要であると思う。
- 常日頃からの「振り返り」の大切さ、また「自己肯定感」はとても気になっていたが、話題にして頂き参考になった。
- 全国の事例の中から本校で活用できる例がいくつかあった。今、何をしなければいけないのか、頭の中で考えるヒントが生まれる内容だった。
- これまでの進路指導では乗り切れない時代という認識が高まった。部会での事例を本校でも挑戦してみたい。今後もアンテナを張って、情報を収集したいと思う。
- 「課題」ではなく「時間」を与える指導を上手に活用し、出口を意識した指導を実践したい。
- 「特色あるカリキュラム」「主体性を持たせる教育」「キメ細やかな指導」、生徒一人一人に合った指導をすることは厳しいと思うが、近づけることは可能だと思う。今後もパターン化することなく、一人でも多くの生徒に合った指導を心がけていくことが必要だと思った。
- 新入試によって授業・評価が激変すると思った。ただ出口だけを考えた進路指導ではなく、「生きる力」を考えた高校3年間にするべく、指導・助言・支援をしていく必要性をよく理解できた。
- 受験や進路において、マニュアル通りのやり方をするのではなく、生徒一人一人の現状に合ったプラン作りと入念な対話（生徒重視）が必要であることを学んだ。
- 基調講演Ⅰの渡邊氏の話は、とても分かりやすく、大変参考になった。主体的に学べるきっかけ作りと、どのように行うか、考えていきたい。AO入試について、人としての多様性は様々な体験より生まれるため、多くのサポートが必要だと思った。
- 進路計画を生徒自ら自己分析させ、進路を実現させる上で、手帳の活用が大切であると改めて思った。
- 学校のグランドデザインの構築が重要であることを実感。特に観点別評価による試験問題作成、面談などが参考になった。
- 進路指導の変化、ポートフォリオの重要性を学ぶことができた。これからの進路指導に向けて1年生からしっかりした計画を立てたい。
- 教育・入試改革により進路指導の在り方も大きく変化し、我々教員も変化に対応していく必要性について痛感した。
- 人間力はまず教師と生徒との連携から始まるのだと改めて勉強することができた。「振り返り」を大事にしていきたい。
- 子供たちの主体性を「個」に即した教育を行っていかねばと切に思った。
- 進路指導は「出口」の指導という考え方から、入学時より生徒の「強み」を見出し、「生き方」を指導するものであり、学校全体で連携して行うべきものだと思った。

- 教育課程、新入試に対応するというよりも、これを機会に進路指導の在り方を考え直す良い機会となった。出口やマッチングだけではなく、3年間の進路指導のストーリーを描くことの大切さを認識した。
- 基調講演Ⅰの渡邊氏は具体例をあげての説明、レジュメ、大変勉強になった。全国各地の学校を訪問されて勉強なさっていることがよく分かった。どう生きていくかを考えさせていくことの重要性を改めて感じた。
- 振り返りや評価を行うことが重要であると思った。事例発表を聞き、具体的な方法論までを学ぶことができた。生徒が主体性をもって自己肯定感を高めるような工夫をしていきたい。
- 基調講演Ⅰの内容を聴いて、特に「振り返り」について多く実践していきたいと思った。事例発表Ⅰにあった「手帳」はとても良いと思った。自ら計画・実施・反省等をさせていきたい。
- 学ぶものが多く、特に今後は「自己肯定感」や「言語化」が鍵だと思った。生徒の様子などもこれからは今よりも更につぶさに観察することが大変重要だと考えた。
- 今回の進路指導のアドバイスが、直接授業における組み立てに繋がれると感じた。
- 基調講演Ⅰでは、進学校での取り組みを世の中のどの人物が求められているかよく分かり、有益であった。足利学校の学校としての時代の中で、どう社会の中であって来たか、日本最古の学校であることが分かった。岩崎先生の動きは高校教員ではないと思うくらい素晴らしい。
- 2つの基調講演、事例発表いずれも大変勉強になった。たくさんの学校における実践事例に触れることができた。今後の生徒指導の参考になる点が多数あり、しっかりと活かしていきたい。
- 各講演、事例発表、大変参考になった。特に基調講演Ⅰの渡邊氏のカリキュラムマネジメントについては、進路指導部が積極的に関わるべき点が明確になり、早速、学校に戻って、報告・検討したい。

◆生徒指導部会

- 生徒指導において自分が出来ていたこと、出来ていなかったことを改めて知ることができた。これからの指導に生かしていきたい。
- 学校ですぐにでも起こりえる問題、事例をテーマにあげて頂き、現場でもすぐに活用できると思った。
- 丸山先生のお話の中で職員室の中にカウンセラーの席を設ける、信用あるコーディネーター（教師）を配置する、という点が印象に残った。非常に良い講演だった。
- 講演Ⅰは理論的で実践例が多く、とても為になった。学校外部との連携例を具体的に示して頂けて良かった。基調講演Ⅱも具体的で、とても良かった。次回以降も続けて頂きたい。
- 多様な問題に対応していくため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携がとても重要だと感じた。
- 日頃は学校の枠に捕らわれ、学校の視点で考えがちだが、スクールカウンセラーや外部団体代表等、外部情報を得ることができ有意義だった。校内の体制の構築に活かしたい。
- 今回、学校単独では解決が困難な問題が多発する現状でいかに関係機関との連携を図り、生徒の状況に応じた指導が大切か痛感した2日間だった。
- 生徒の自死や希死念慮に対する対応は他人事ではない。スクールカウンセラーとコーディネーター、クラス担任との連携によって、大きな事態を未然に防いでいくための考え方が大変参考になった。
- 生徒のバックグラウンドを知る必要があると改めて分かった。カウンセラーの方々と連携ができるように体制を見直したい。
- 困難を抱えた生徒の事情は個々に異なり、様々な学外の機関との連携の重要性を日々感じている。今、勤務校で出来ていること、不十分なことを考えながら、4つの講演を伺い、多くのヒントを頂いた。
- 現代的な問題が本校でも起きる中、1つ1つの講演内容が全て当てはまるものだった。特にいじめや不登校は今もっとも現場教員が頭を抱える様子が多いため勉強になった。学校が外部性の力と共に進む必要があることの確認になった。
- 基調講演Ⅰでは教員とカウンセラーの相互のアセスメントは必要だが連携は大変重要。基本の確認ができた。講演Ⅰでは学校の出来る範囲を超えたようなケースの現状と支援などが分かった。今後の生徒指導に必要な知識を得た。基調講演Ⅱではソーシャルワークのグローバル定義の紹介、解説があり、その必要性を痛感した。講演Ⅱについて、SNSの現状と危険性について再確認できた。
- エンカウンターの話など、クラス担任になった時、色々と役立ちそうなお話を聞いた。
- 世の中の現状が理解でき、今置かれている状況が大変であることが分かった。古い考えでの指導が困難になっており、子供が安心、安全な場になるよう、指導方法、教員側の考えを変えなければならない。
- 不登校のみならず、現在の生徒の状況に即した発展的な講演だった。
- 様々な子供たちの問題は様々な要因が絡み合っていることであり、表面的な問題に向き合う他に

ケアしなければならないことがあることが事例の紹介より分かった。ネットの問題は、なかなか見えないが、まとまった話が聞けたのは良かった。

- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、民間での活動など、全て繋がりある内容になっていて、とても理解しやすかった。
- 学校だけでは解決できない場合、色々な関係機関との連携が必要であると改めて感じた。宇都宮にある支援機関について知ることができ良かった。ネットトラブルについて具体的に理解できた。自分も意識を変え利用したい。
- 丸山先生のお話はとても分かりやすく具体的で、全ての講演の中で最も本大会に参加して良かった、勉強になった。明日からでも実践したいと思う内容だった。草野先生のお話もとても具体的で端的だった。タイムリーな話題だったので、聞き入ることができた。
- 生徒との関わり方について様々な方面から話を聞くことができたので、現場に生かしていきたいし、自分が対応できないことに対して、他の人たちの協力をしっかり求められるようになりたい。
- ひきこもり等は学校のみで解決できるのではなく、長い目で根気強く、また抱え込み過ぎず、関係各所と上手く連絡・連携していくことで生徒の未来が切り開いていけるのだと再認識するとともに、生徒の異変にいち早く気づけるようになりたいと思った。
- 現場が多様化してくると相談内容や問題も複雑になり、解決にも時間がかかる。教員だけでは限界もあるので、スクールカウンセラーとの連携は欠かせないものとなり、ますます比重も高くなると思う。両者が協力しあうことの大切さを再認識できた。
- ソーシャルワーカーの役割等がどのようなものかということが理解できた。丸山先生の話から生徒とどのように向き合うべきかを知れた。ソーシャルワーカーを学校に入れた後のメリットも多くあると思ったが、そのソーシャルワーカーの質次第ではデメリットになるのではと思った。

◆特色教育（ICT）部会

- ICT を学校に導入するにあたり、色々と注意点があることが分かり、これらを踏まえながら上手に活用したい。
- ICT 環境の整備が目的になってしまうと失敗してしまうという言葉は目からウロコの思いだった。今回の話を学校に持ち帰り、もう一度、学校として、教科として、何を学ばせたいのか、よく検討し直す必要があると感じた。大変勉強になった。
- 今の状況を踏まえつつ、これからどう生徒を教育していくのか、そこにどう ICT を活用させていくのかを考えるきっかけになった。
- 大変勉強になった。プログラミングはもちろん、探求、アウトプットの向上など、コンピュータなどを活用して生徒たちの向上につなげられることがとても参考になった。
- 生徒に新しい「学び」を伝えるためには、私たち教員が柔軟にチャレンジしていくことが必要と感じた。
- 「Google for Education」や「Zoom」など、すぐに活用できる情報など、多くのことを学べた。
- 講演Ⅱの平井先生の話は ICT らしく、各教員の端末からアンケート形式で腕時計に集計した意見を可視化して下さり、為になった。
- 講演Ⅰで新学習指導要領がどのような考えのもとで作成されたのか、講演Ⅱでそれらをどのように現場にもっていけばいいのかが良く分かった。
- ICT と一口に言っても様々な分野があり、自分が知らない仕組み・技術・やり方は、とても勉強になることが多かった。知らないことを知ったら次はやってみるという姿勢を大切にしたい。
- 新しい時代、今の教育界、あまりにも進んでいるように感じた。時代遅れの教員にならないようにしたいと思った。
- 平井先生の説明により、今後、生徒に身につけさせる力の確認ができた。アクティブ・ラーニングの必要性を感じることができた。
- 様々な立場の先生方からの ICT の可能性の話を聞き、もう一度、活用法や使用法を考えていきたい。
- 講演Ⅰ、講演Ⅱ、実践発表、全て充実していた。パネル・ディスカッションもそれぞれの先生方の意見や体験がとても良かった。ICT を取り入れた授業を前向きに考えていきたい。来年も参加したい。
- これからの時代を生きていく人間にとって、どんな技術（能力）が必要か文科省の考えが少し理解できた。情報が盛り沢山過ぎて、後で整理したい。平井先生の話は実技を交えた内容がとても参考になった。人間力を高める私学教育に関わるこれからの教員にとって、何が大切なのかヒントとなる内容だった。

参 加 者 数

総参加者数 603 名

参加者数（部会別・都道府県別）

◆部会別参加者数

No.	部会名	参加者数	No.	部会名	参加者数
1	私学経営	140	5	生徒指導	92
2	教育課程	105	6	特色教育（ICT）	70
3	法人管理事務運営	72	7	全体集会のみ	44
4	進路指導	80	計		603

◆都道府県別参加者数

No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数
1	北海道	11	17	石川	3	33	岡山	1
2	青森	1	18	福井	1	34	広島	12
3	岩手	6	19	山梨	2	35	山口	3
4	宮城	5	20	長野	1	36	徳島	1
5	秋田	12	21	岐阜	2	37	香川	2
6	山形	5	22	静岡	6	38	愛媛	4
7	福島	4	23	愛知	23	39	高知	5
8	新潟	9	24	三重	1	40	福岡	19
9	茨城	45	25	滋賀	2	41	佐賀	4
10	栃木	214	26	京都	8	42	長崎	6
11	群馬	28	27	大阪	15	43	熊本	4
12	埼玉	18	28	兵庫	4	44	大分	4
13	千葉	16	29	奈良	5	45	宮崎	4
14	神奈川	23	30	和歌山	2	46	鹿児島	6
15	東京	26	31	鳥取	8	47	沖縄	3
16	富山	3	32	島根	16			
計						603		

開催地・研究目標一覧

回数	開催地	主 会 場	会 期	参加人員
1	東 京 都	宝仙学園中学高等学校	昭和 27 年 4 月 27 日～ 29 日	185
2	東 京 都	女子聖学院中学高等学校	昭和 28 年 11 月 20 日～ 23 日	235
3	東 京 都	早稲田大学	昭和 29 年 11 月 20 日～ 23 日	283
4	東 京 都	東洋大学	昭和 30 年 11 月 11 日～ 14 日	402
5	京 都 市	立命館大学	昭和 31 年 11 月 9 日～ 12 日	995
6	東 京 都	明治大学	昭和 32 年 11 月 22 日～ 25 日	679
7	名 古 屋 市	椋山女子学園大学	昭和 33 年 10 月 3 日～ 6 日	857
8	東 京 都	法政大学	昭和 34 年 11 月 20 日～ 23 日	846
9	札 幌 市	北海道学園大学	昭和 35 年 8 月 20 日～ 23 日	958
10	東 京 都	日本大学	昭和 36 年 11 月 22 日～ 25 日	954
11	横 浜 市	神奈川大学	昭和 37 年 11 月 22 日～ 25 日	841
12	広 島 市	進徳女子高等学校	昭和 38 年 11 月 12 日～ 15 日	993
13	東 京 都	学習院大学	昭和 39 年 11 月 20 日～ 23 日	612
14	福 岡 県	中村学園女子高等学校	昭和 40 年 11 月 21 日～ 24 日	1,100
15	東 京 都	明星大学・明星学苑	昭和 41 年 11 月 3 日～ 6 日	750
16	仙 台 市	東北大学	昭和 42 年 11 月 5 日～ 8 日	1,172
17	東 京 都	文化女子大学	昭和 43 年 11 月 22 日～ 25 日	1,074
18	大 阪 市	相愛学園	昭和 44 年 11 月 15 日～ 18 日	2,294
19	宇 都 宮 市	作新学院	昭和 45 年 11 月 11 日～ 13 日	382
20	西 宮 市	武庫川学院	昭和 46 年 11 月 11 日～ 13 日	2,513
21	東 京 都	昭和女子大学	昭和 47 年 11 月 23 日～ 25 日	764
22	静 岡 市	静岡雙葉学園	昭和 49 年 11 月 7 日～ 9 日	926
23	札 幌 市	札幌市民会館	昭和 50 年 10 月 2 日～ 4 日	978
24	広 島 市	広島市公会堂	昭和 51 年 10 月 26 日～ 28 日	1,216
25	東 京 都	千代田女学院中学高等学校	昭和 52 年 11 月 16 日～ 18 日	1,054
26	福 岡 市	福岡市民会館	昭和 53 年 11 月 7 日～ 9 日	1,714
27	埼 玉 県	埼玉会館	昭和 54 年 11 月 20 日～ 22 日	1,043
28	仙 台 市	仙台白百合学園中学高等学校	昭和 55 年 10 月 22 日～ 24 日	1,533
29	京 都 市	K B S 京都放送会館	昭和 56 年 11 月 12 日～ 14 日	1,923
30	東 京 都	学習院記念会館	昭和 57 年 11 月 17 日～ 19 日	1,370
31	福 井 市	金井学園	昭和 58 年 10 月 26 日～ 28 日	992
32	札 幌 市	札幌市民会館	昭和 59 年 9 月 26 日～ 28 日	1,040
33	山 口 市	山口市民会館	昭和 60 年 10 月 31 日～11 月 2 日	1,210
34	福 岡 市	福岡市民会館	昭和 61 年 11 月 12 日～ 14 日	1,696
35	千葉市ほか 4 市	千葉県文化会館	昭和 62 年 11 月 11 日～ 13 日	1,867
36	新 潟 市	新潟県民会館	昭和 63 年 10 月 19 日～ 21 日	1,651
37	大阪市ほか 2 市	大阪国際交流センター	平成 元 年 10 月 25 日～ 27 日	2,530
38	東 京 都	学習院記念会館	平成 2 年 10 月 24 日～ 26 日	1,773
39	愛 知 県	愛知県勤労会館	平成 3 年 10 月 23 日～ 25 日	1,473
40	札 幌 市	札幌ガーデンパレス	平成 4 年 9 月 30 日～10 月 2 日	1,123
41	岡 山 市	岡山シンフォニーホール	平成 5 年 10 月 27 日～ 29 日	1,306
42	熊 本 県	熊本市市民会館	平成 6 年 10 月 26 日～ 28 日	1,170
43	神 奈 川 県	国立横浜国際会議場	平成 7 年 10 月 25 日～ 27 日	2,134
44	山 形 県	米沢女子高等学校	平成 8 年 10 月 16 日～ 18 日	829
45	京 都 市	京都府会館第一ホール	平成 9 年 11 月 12 日～ 14 日	1,222
46	東 京 都	東京国際フォーラム	平成 10 年 11 月 4 日～ 6 日	1,422

回数	研 究 目 標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方 ・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を上げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日的課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立って―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を

回数	開催地	主 会 場	会 期	参加人員
47	静岡県 岡 市	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成 11 年 11 月 10 日～ 12 日	1,042
48	札幌市 札幌市	札幌ガーデンパレス	平成 12 年 10 月 4 日～ 6 日	862
49	徳島市 徳島市	徳島文理大学徳島校	平成 13 年 11 月 15 日～ 17 日	827
50	宮崎県 宮崎市	宮崎観光ホテル	平成 14 年 11 月 6 日～ 8 日	928
51	水戸市・土浦市	茨城県立県民文化センター	平成 15 年 10 月 29 日～ 31 日	1,590
52	福島県 郡山市	郡山市ホテルハマツ	平成 16 年 10 月 28 日～ 29 日	774
53	神戸市 ほか 3 市	神戸ポートピアホテル	平成 17 年 11 月 10 日～ 11 日	1,383
54	東京都 新高輪	プリンスホテル国際館パミール	平成 18 年 11 月 9 日～ 10 日	1,354
55	石川県 石川県	立音楽堂コンサートホール	平成 19 年 10 月 25 日～ 26 日	791
56	札幌市 札幌市	札幌ガーデンパレス	平成 20 年 10 月 9 日～ 10 日	722
57	松江市・米子市	島根県民会館	平成 21 年 10 月 22 日～ 23 日	505
58	佐世保市 佐世保市	ウインズ佐世保ゲルックホール	平成 22 年 10 月 14 日～ 15 日	621
59	高崎市 群馬県	音楽センター	平成 23 年 10 月 27 日～ 28 日	437
60	盛岡市 盛岡市	ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING	平成 24 年 10 月 11 日～ 12 日	501
61	大阪市 大阪市	シェラトン都ホテル大阪	平成 25 年 10 月 24 日～ 25 日	621
62	東京都 新高輪	プリンスホテル国際館パミール	平成 26 年 10 月 16 日～ 17 日	1,023
63	長野市 長野市	ホテル国際 21	平成 27 年 10 月 29 日～ 30 日	592
64	札幌市 京王プラザ	ホテル札幌	平成 28 年 10 月 27 日～ 28 日	587
65	松山市 松山	全日空ホテル	平成 29 年 10 月 19 日～ 20 日	542
66	鹿児島市 城山	ホテル鹿児島	平成 30 年 10 月 25 日～ 26 日	681
67	宇都宮市 宇都宮	ホテル東日本宇都宮	令和 元年 10 月 17 日～ 18 日	603
68	秋田市 秋田	キャッスルホテル	令和 2 年 10 月 22 日～ 23 日	(400)

回数	研 究 目 標
47	21 世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育－中国・四国からの発信－
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて－伝統と創造－
52	特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして－悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして－私学教育の挑戦－
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21 世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～
63	新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～
64	今こそ私学～明日への挑戦～
65	時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～
66	新時代に向けたさらなる私学の躍進
67	人間力（コンピテンシー）を高める私学教育
68	新しい時代のリーダーを育てる私学教育

編 集 後 記

すべての都道府県の私学から 600 名を超える先生方にご参加頂き、全国私学教育研究集会栃木大会を盛大に開催することができ、心から感謝申し上げます。これも日本私学教育研究所のきめ細かい温かなご指導と、大会役員・専門委員・客員研究員・指導員、そして大勢の講師の皆様にご尽力頂いたおかげでございます。また主体的にご参加頂いた全国の先生方にも厚く御礼申し上げます。

全体会では、高校生の若さあふれる箏曲の演奏にはじまり、吉田晋会長と中川武夫所長による教育政策と私学情勢についてのご報告、亀山郁夫先生の記念講演「『人生百年時代』を生きる力」は、新しい学力の 3 要素の育成や新学習指導要領に取り組む私学人に多大な示唆を与えて頂きました。

また、2 日目の各部会においても、豊かな経験や深い研究をもとにした講演、発表、パネル・ディスカッションなど、密度の濃い研究協議等が行われ、大きな成果を得ることができました。

多彩なプログラムや先生方の活発な議論を通じ、研鑽を深めるとともに、今後に繋がる私学人同士の交流の輪を広げる有意義で実りある大会となったことと思います。

ここに、大会の成果をとりまとめた研究集録ができあがりましたのでお届け致します。今後の学校現場での教育実践に役立てて頂ければ幸いに存じます。運営委員は、おもてなしの心で運営にあたったつもりではございますが、行き届かないところがありましたことを、おわび申し上げます。

来年度、秋田大会でお会いできることを楽しみにしています。

2019（令和元）年度全国私学教育研究集会栃木大会
運営総括委員長 須賀英之
（宇都宮短期大学附属中学高等学校 理事長・校長）

2019（令和元）年度
全国私学教育研究集会 栃木大会
研究集録

印 刷 2020 年 3 月

発 行 2020 年 3 月

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所
所 長 中 川 武 夫

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷UNビル 6 階
電話 (03)3222-1621

編 集 一般財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷UNビル 6 階
電話 (03)3222-1621

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。私的かつ非商業目的で使用する場合、その他著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。

